14. Ａ４地区の調査

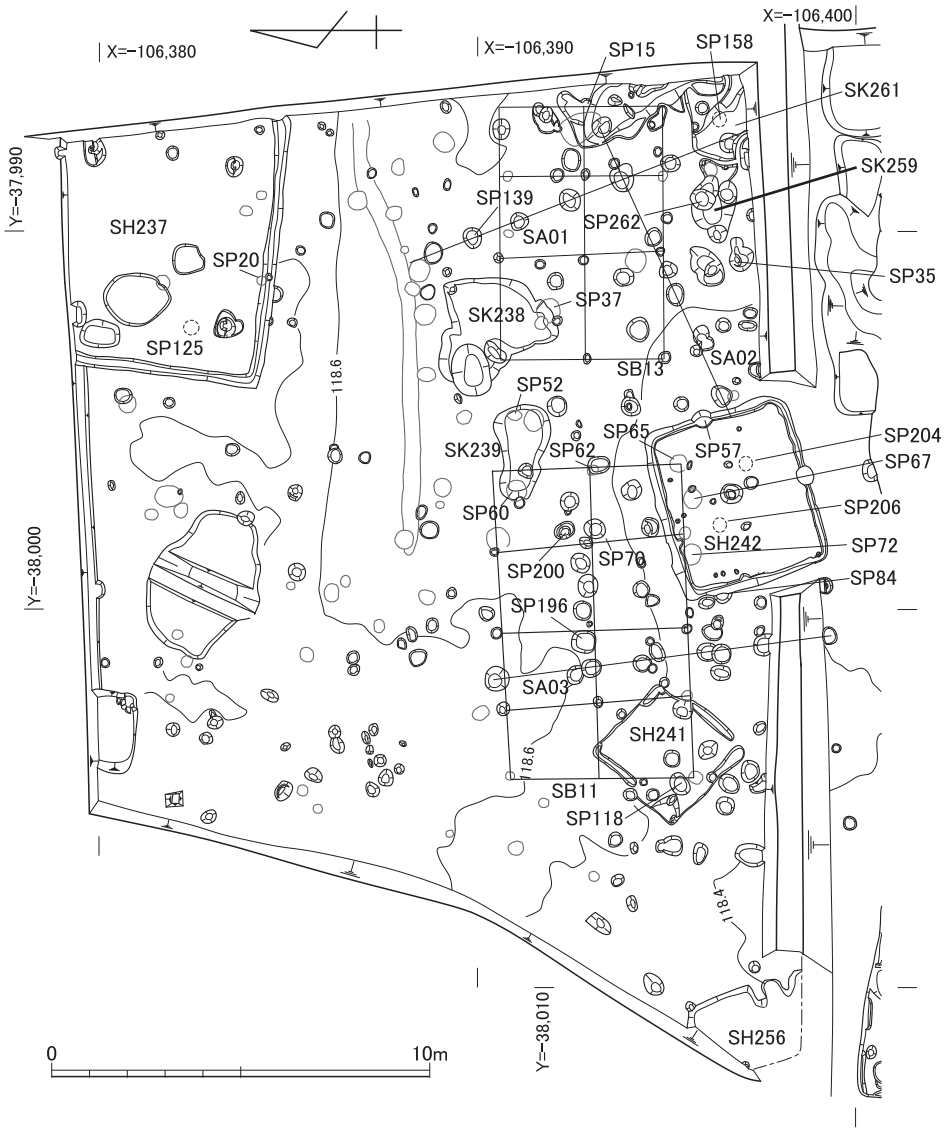
Ａ３地区の東側、農道を挟んで設定した調査区である。古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の各時期の遺構･遺物を検出した。地形的には南に向かって傾斜しているため、南側に黒褐色粘質土(黒ボク層)が堆積していた。この上面で中世と奈良時代の遺構を検出した。また、地山上で古墳時代や飛鳥時代の遺構を検出した(第55図)。

(１)古墳時代の遺構・遺物

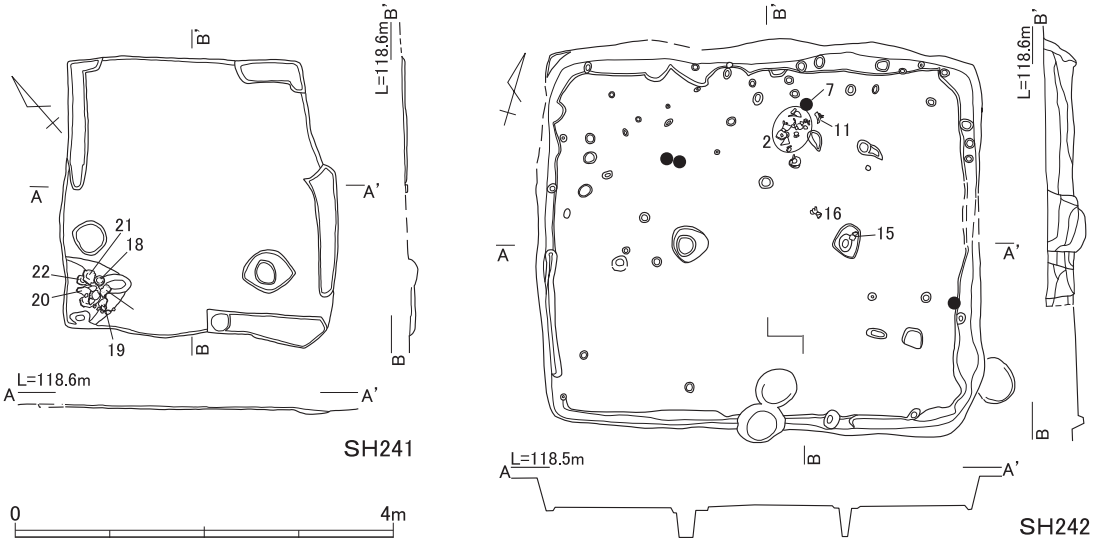
古墳時代の遺構としては竪穴式住居跡２基を検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ241(第56図左)　調査区の南西部で検出した。住居跡の平面形は方形を呈し、一辺3.0mほどのやや小型の住居跡である。周壁溝は部分的に認められる。明らかに主柱穴と思われるような柱穴は検出されなかった。土師器が住居の西角でまとまって出土した(17～22)が、深さ10cm程度の土坑状を呈する。住居の方位は北に対して約41°東に振る。

出土遺物としては土師器がある(第61図17～22)。17・18は小型の壺ないし甕である。17は磨滅



第55図　Ａ４地区遺構配置図（1/200）



第56図　竪穴式住居跡ＳＨ241・242実測図

が著しく調整が不明瞭である。18は内外面ともヘラケズリ調整を施す。器壁が厚く重い土器である。外面下半に煤が付着する。19～21は甕である。19は口縁端部を内上方につまみ上げ、体部内面を頸部付近までヘラケズリ調整を施す。20は口縁端部内面が若干肥厚する。21は口縁部と底部を欠損するが、体部外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。22は口縁部が外上方に開く鉢である。古墳時代前期に位置づけられる。

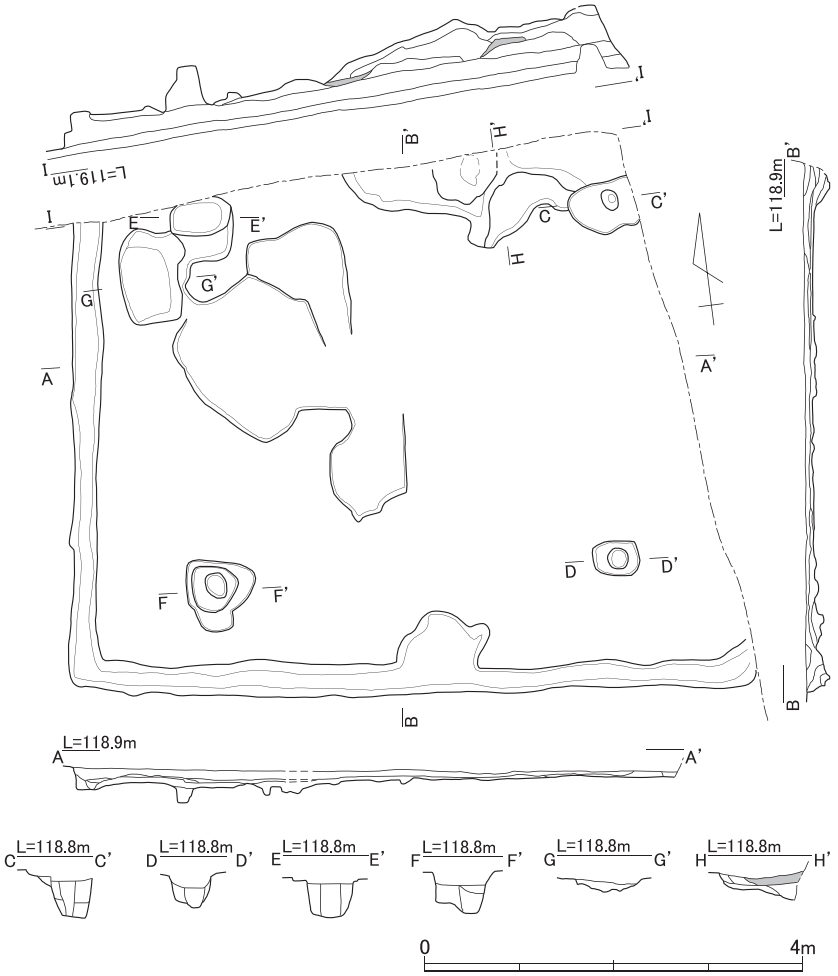
②竪穴式住居跡ＳＨ242（第56図右）　調査区の南辺中央付近で検出した。当初は北半部のみを検出したのみであるが、Ａ５地区との間の畦畔を除去して、全面的に検出した。

住居跡の平面形は長方形を呈し、一辺が4.1ないし4.6m、深さ30cmを測る。幅20～30cm、深さ５～10cm程度の周壁溝がほぼ全周する。主柱穴は２基確認した。平面形は不整形な形状を呈するが、直径30～40cm、深さ25～30cm程度を測る。住居の方位は北に対して約17°西に振る。遺物は床面直上から多数の土器と鉄器１点が出土した（２・７・11・15・16・95など）。また、埋土からも土器が出土した。

出土遺物としては土師器や鉄器がある（第61図１～16、第65図95）。１・２は小型丸底土器である。１は複合口縁を呈し、口縁部外面に９条の擬凹線文を施す。後述する６とともに、北陸系の特徴を有する土器である。３・４は二重口縁状を呈する壺の口縁部である。４は口縁部内面にヘラミガキ調整を施し、擬口縁部外面に列点文を施す。５は器台の可能性もあるが、器種は不明である。６～９は甕である。６は複合口縁を呈し、磨滅気味であるが、口縁部外面に９条前後の擬凹線文を施す。体部内面にヘラケズリ調整を施す。８は体部外面にタタキ調整がみられる。12～14は壺または甕の底部である。13は外面にタタキ調整がみられる。10・11は高杯である。10は椀形高杯の杯部である。11は「ハ」字状に開く高杯脚部で、スカシ孔は認められなかった。15・16は小型器台である。95は刀子の茎であろうか。土器は古墳時代前期に位置づけられる。

（２）飛鳥時代の遺構・遺物

飛鳥時代の遺構としては、竪穴式住居跡２基、土坑２基などがある。また、多数の柱穴を検出



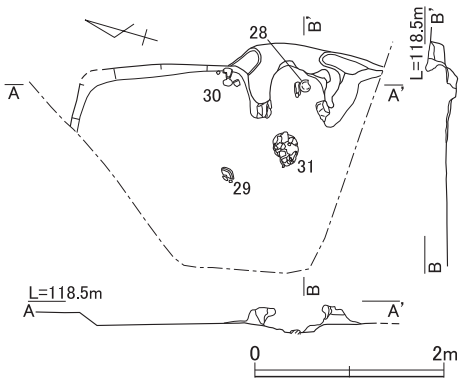
第57図　竪穴式住居跡ＳＨ237実測図

しており、当該期の建物や柵が存在する可能性がある。

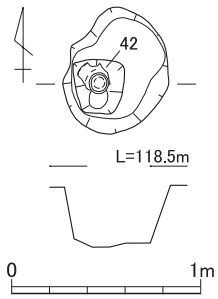
①**竪穴式住居跡ＳＨ237**（第57図）　調査区の北東隅で検出した。比較的大型の竪穴式住居跡であるが、東辺と北辺は調査区外にあるため、正確な規模は不明である。南辺長7.3m、西辺長4.9m以上、深さ15cm程度を測る。住居には貼り床が施されており、これを除去した後の、掘形底面は凹凸が著しい。幅30cm前後、深さ５～10cmの周壁溝が全周する。主柱穴は４基確認し、おおむね直径40～50cm、深さ35～45cmを測る。トレンチ北壁に沿って土坑を２基検出した。どちらも浅いため機能については不明である。カマドは未検出であるが、上述の土坑埋土に焼土を含んでおり、住居の北辺にカマドが敷設されていた可能性がある。住居の方位は北に対して約８°東に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第61図23～26）。23は土師器甕である。24～26は須恵器杯Ｈ蓋である。いずれもほぼ同形同大の個体である。25は天井部付近に補助ケズリがみられる。[注6] ＳＨ237出土遺物は次のＳＨ256出土遺物よりも明らかに新しく、飛鳥時代中頃に位置づけられる。

②**竪穴式住居跡ＳＨ256**（第58図）　調査区の南西隅で検出した。竪穴式住居跡ＳＨ242と同様に、Ａ５地区との間の畦畔を除去して、可能な限り調査を行った。しかし、南側はＡ５地区とし



第58図　竪穴式住居跡ＳＨ256実測図



第59図　柱穴ＳＰ262実測図

た水田によって削平されていたため、規模等は不明である。東辺にカマドを有する。周壁溝や主柱穴は未検出である。住居の方位は北に対して約19°西に振る。遺物はカマドの周囲で出土した。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第61図27～第62図32）。27・28須恵器杯蓋である。天井部に回転ヘラケズリを施す。口径は13cm程度を測り、竪穴式住居跡ＳＨ237よりも古い様相を示す。29は須恵器長頸壺の口頸部から体部中位にかけての破片である。口頸部外面に沈線を２条施す。また、体部外面に沈線２条を施し、その間を刺突文で充填する。30は須恵器𤮔である。大きく開く口縁部と、小型化した体部からなる。底部外面は手持ちのヘラケズリ調整の後、ナデ調整を施す。体部中位に直径1.5cmほどのスカシ孔を１か所穿つ。31は土師器甕である。カマドの前庭部で出土した。32は製塩土器と推定されるが、蔵垣内遺跡では類似した特徴を持つものがなく、粗雑な土師器鉢の可能性もある。須恵器から古墳時代後期後半ないし末頃に位置づけられる。

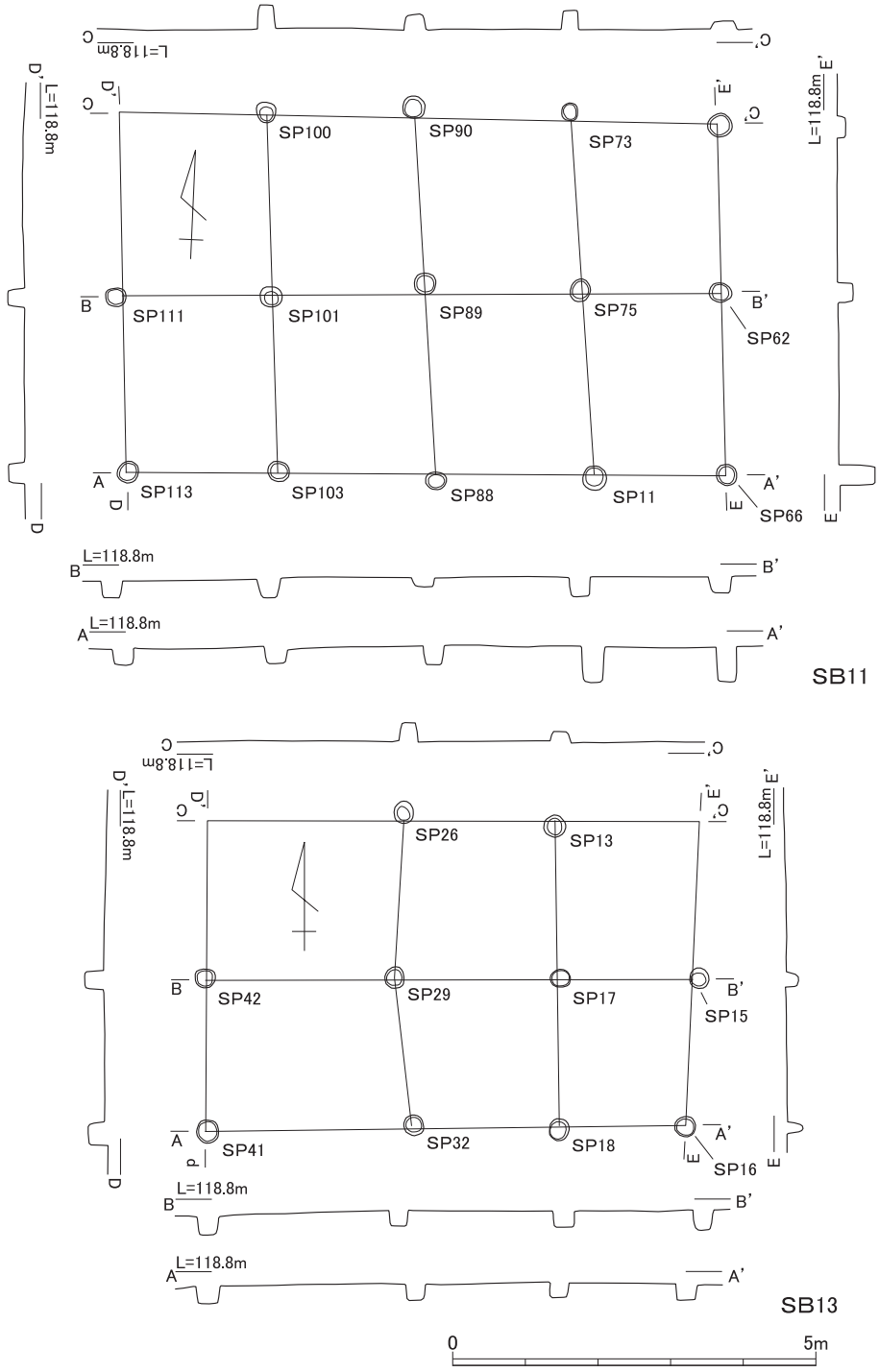
③土坑ＳＫ239　調査区のほぼ中央で検出した。不整形な形状を呈するが、長軸2.5m、短軸1.5m、深さ40cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第63図33～35）。33は須恵器杯Ｇ蓋である。34は須恵器杯Ｇである。35は須恵器甕である。

④土坑ＳＫ238　調査区の中央やや東寄りで検出した。土坑ＳＫ239よりも不整形な形状を呈し、長軸3.3m、短軸2.6m、深さ35cmを測る。東半部で10～30cm程度の礫がまとまって出土したが、性格は不明である。出土遺物として須恵器や土師器がある（第63図36～38）。36は須恵器杯Ｇである。37は須恵器壺の口縁部であろう。外面に沈線を２条施す。38は土師器甕である。ＳＫ239・ＳＫ238出土の須恵器杯Ｇは古い特徴を持つと考えられ、飛鳥時代中頃に位置づけられる。

⑤柱穴ＳＰ262（第59図）　調査区の南東部で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、長軸0.67m、短軸0.56m、深さ30cmを測る。柱穴内から須恵器脚台付皿が出土した（第63図42）。42は「ハ」字状に開く脚台を有し、内端部が接地する。飛鳥時代後半から奈良時代前半頃のものと推定される。

⑥柱穴ＳＰ206　調査区の南辺中央付近、竪穴式住居跡ＳＨ242の上面で検出した。平面形は円形を呈し、直径0.7m、深さ30cmを測る。柱穴からは須恵器杯Ａ（もしくは杯Ｇ）が出土した（第63図43）。43は34・36に比べると器高が低く、やや厚手の作りである。

⑦柱穴ｆ　Ａ４地区とＡ５地区の間の畦畔を除去後、竪穴式住居跡ＳＨ242の上面で検出した。平面形は円形を呈し、直径0.54m、深さ30cmを測る。柱穴からは須恵器杯Ｇ蓋などが出土した（第63図54）。小破片で、焼け歪みが著しい。宝珠つまみを持つ。

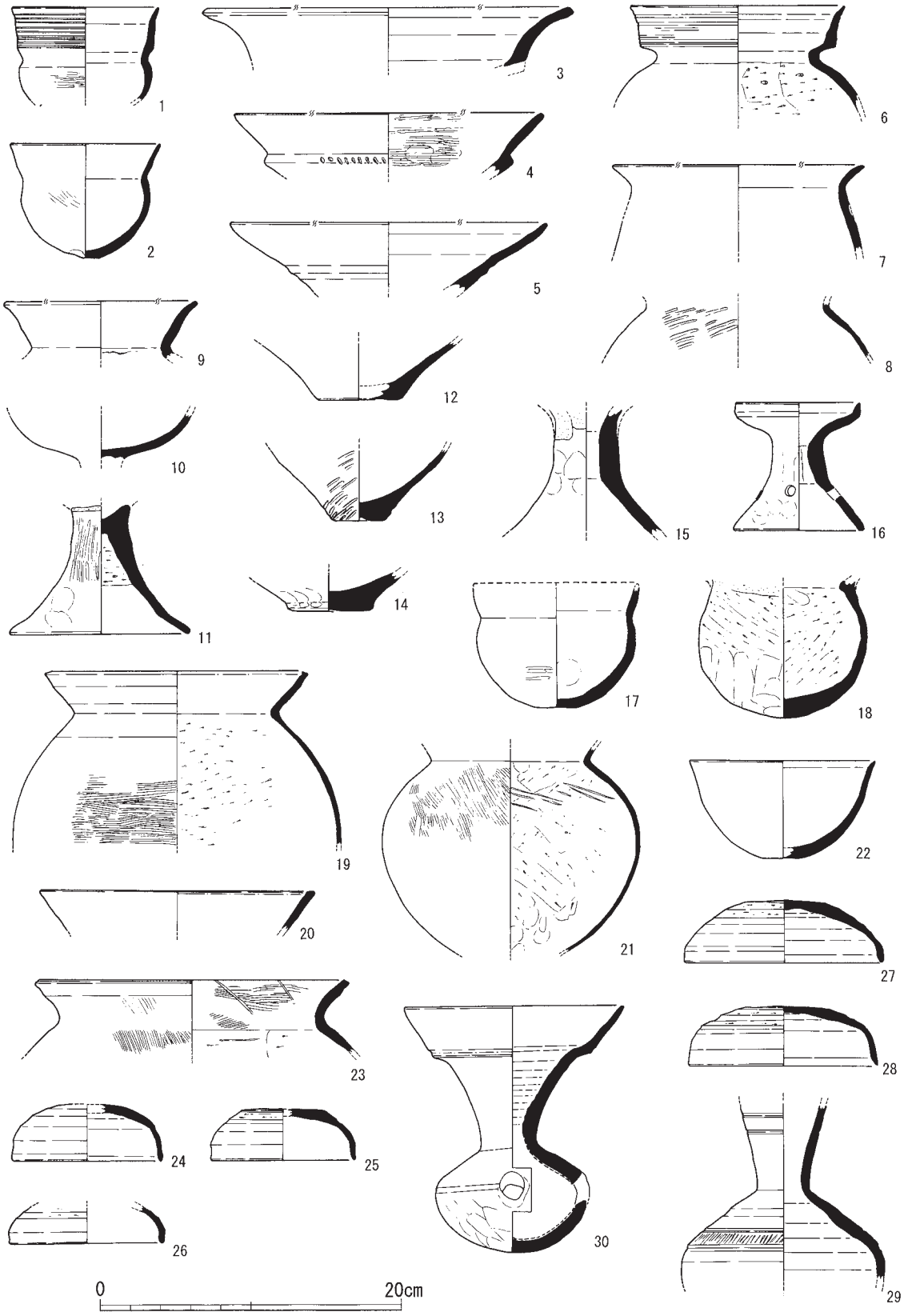


第60図　掘立柱建物跡ＳＢ11・13実測図

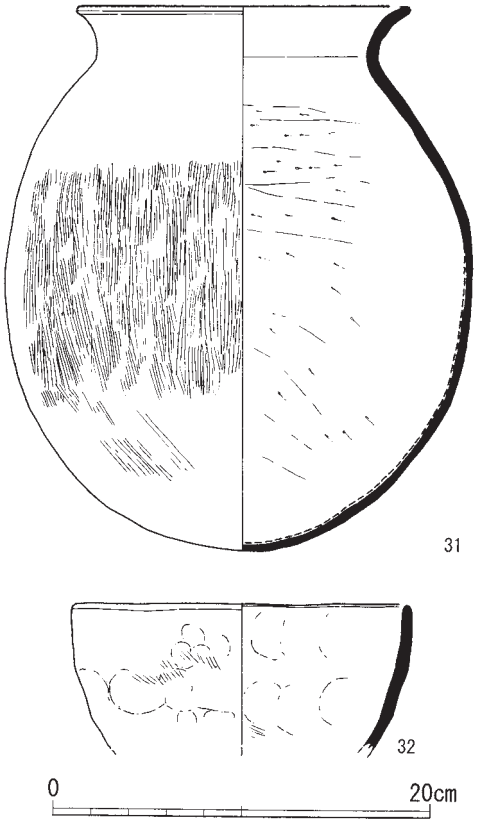
（３）奈良時代の遺構・遺物

奈良時代の遺構として多数の柱穴を検出したが、柵状の柱列として復原できたのは３条ほどである（柵ＳＡ01～03）。これらは柵ではなく掘立柱建物である可能性もある。

①柵ＳＡ01　調査区の南東部で検出した。柱穴７基が直線上に並ぶ。検出長は8.4mである。柱穴はおおむね円形を呈し、直径40～60cm、深さ20～30cmを測る。柵の方位は北に対して約21°西に振る。



第 61 図　A 4 地区出土遺物実測図（1）



第62図　Ａ４地区出土遺物実測図（２）

②柵ＳＡ02　調査区の南東部で検出した。柵ＳＡ01とほぼ直交する。柱穴６基が直線上に並ぶ。検出長は7.8mである。柱穴はおおむね円形を呈し、直径50cm前後、深さ20～30cmを測る。柵の方位は東に対して約24°北に振る。

③柵ＳＡ03　調査区の南西部で検出し、Ａ５地区で検出した柱穴１基も含まれる。柱穴６基が直線上に並ぶ。検出長は8.9mである。柱穴はおおむね円形を呈し、直径40cm前後、深さ10～30cmを測る。柵の方位は北に対して約７°西に振る。

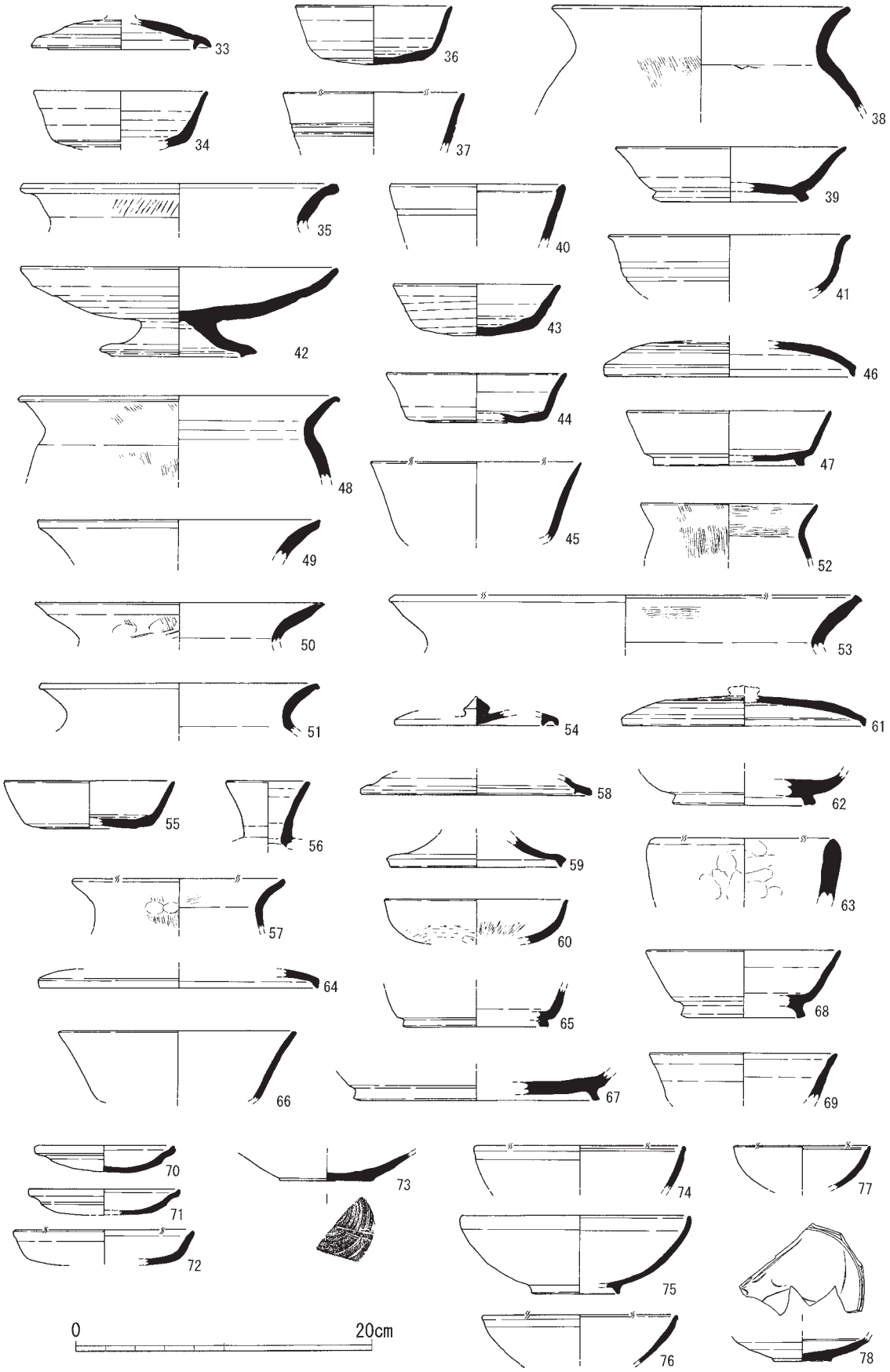
④その他の柱穴群　上記の柵に復原した柱穴以外の柱穴からもこの時期の遺物が出土している（第63図44～53・55・56・59～69）。44～47・55・56・59・61・62・64・65・67～69は須恵器である。48～53・57・60・66は土師器である。63は製塩土器である。44はＳＰ60から出土した杯Ａである。45はＳＰ35から出土した杯である。46はＳＰ196から出土した杯Ｂ蓋である。47はＳＰ57から出土した杯Ｂである。48～53は甕である。48はＳＰ200から、49･52はＳＰ37から、50はＳＰ84から、51はＳＰ70から、53はＳＰ139から出土した。55は杯Ａ、56は平瓶の口縁、57は甕で、ＳＰ52から出土した。59はＳＰ65から出土した高杯脚部である。60は杯で、内面に放射状暗文がみられる。ＳＰ67から出土した。61は杯Ｂ蓋、62は杯Ｂ、63は製塩土器で、ＳＰ72から出土した。64はＳＰ204から出土した杯Ｂ蓋の口縁端部の破片である。65はＳＰ20から出土した杯Ｂである。66は杯、67は杯Ｂで、ＳＰ15から出土した。68はＳＰ118から出土した杯Ｂである。69はＳＰ62は出土した。

（４）中世の遺構・遺物

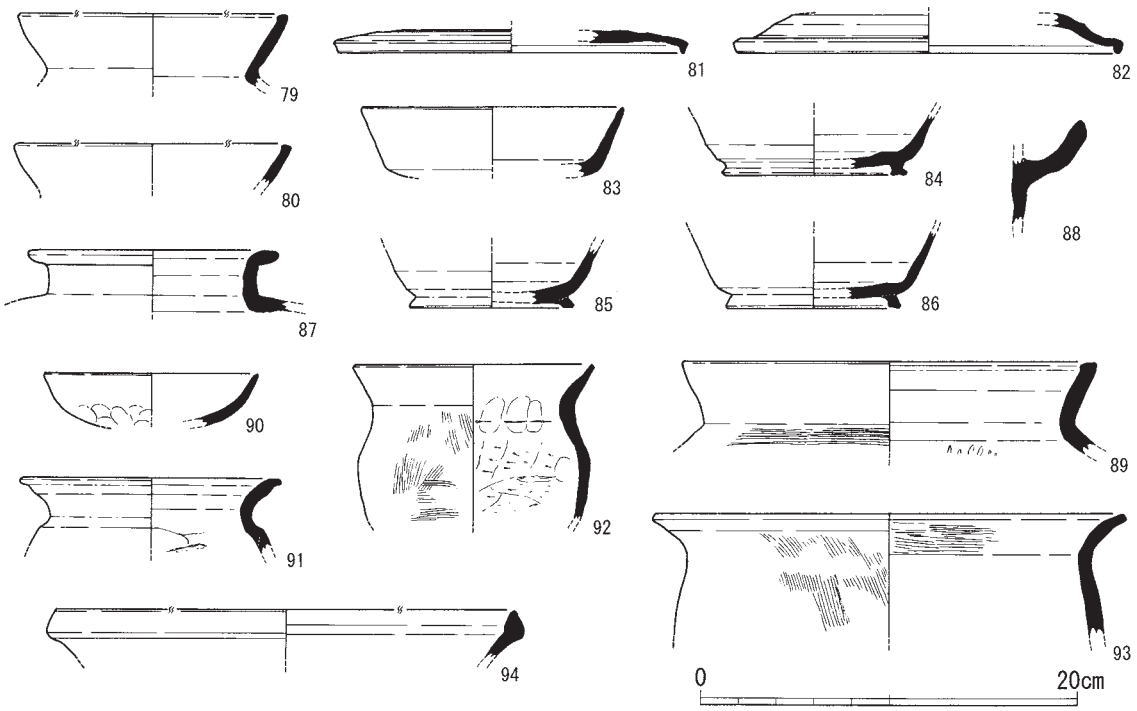
中世の遺構として掘立柱建物跡２棟のほか、柱穴を多数検出した。

①掘立柱建物跡ＳＢ11（第60図上）　調査区の南西部で検出した。桁行４間（約8.2m）、梁行２間（約4.8m）の総柱の建物である。ただし北西角の柱穴を検出することはできなかった。柱穴はおおむね円形を呈し、直径25～30cm、深さ10～50cmを測る。建物の方位は北に対して約４°西に振る。柱穴ＳＰ89から丹波型瓦器椀の小破片が出土した（第63図74）。口縁内端部に沈線がめぐらされる。全体に磨滅が著しく、調整が観察できないが、外面にはヘラミガキがみられる。

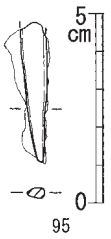
②掘立柱建物跡ＳＢ13（第60図下）　調査区の南東部で検出した。桁行３間（約6.6m）、梁行２間（約4.2m）の総柱の建物である。ただし北西と北東の角の柱穴を検出することはできなかった。柱穴はおおむね円形を呈し、直径25～30cm、深さ15～30cmを測る。柱筋や柱間は不揃いだが、建物の方位はおおむね南北方向である。遺物は出土しなかったが、柱穴の規模や埋土などの状況



第 63 図　A 4 地区出土遺物実測図（3）



第64図　Ａ４地区出土遺物実測図（４）



第65図　Ａ４地区出土遺物実測図（５）

から掘立柱建物跡ＳＢ11と同時期と判断した。

（筒井崇史・森島康雄）

③その他の柱穴群　上記の建物以外にも中世の遺物を出土する柱穴を確認している。以下、遺物についてのみ報告する（第63図70～73・75～78）。70～72は土師器皿である。70・71は「て」字状口縁をもつ。73は回転台土師器皿である。体部に回転糸切り痕跡がみられる。75～77は丹波型瓦器椀である。77は口縁内端部に沈線がめぐらされる。全体に磨滅が著しく、調整が観察できない。77は小椀である。78は白磁皿である。見込みにヘラ描き文が施される。70・76はＳＰ121から、71はＳＰ50から、72はＳＰ79から、73はＳＰ116から、75はＳＰ92から、77はＳＰ49から、78はＳＰ179から出土した。

（森島康雄）

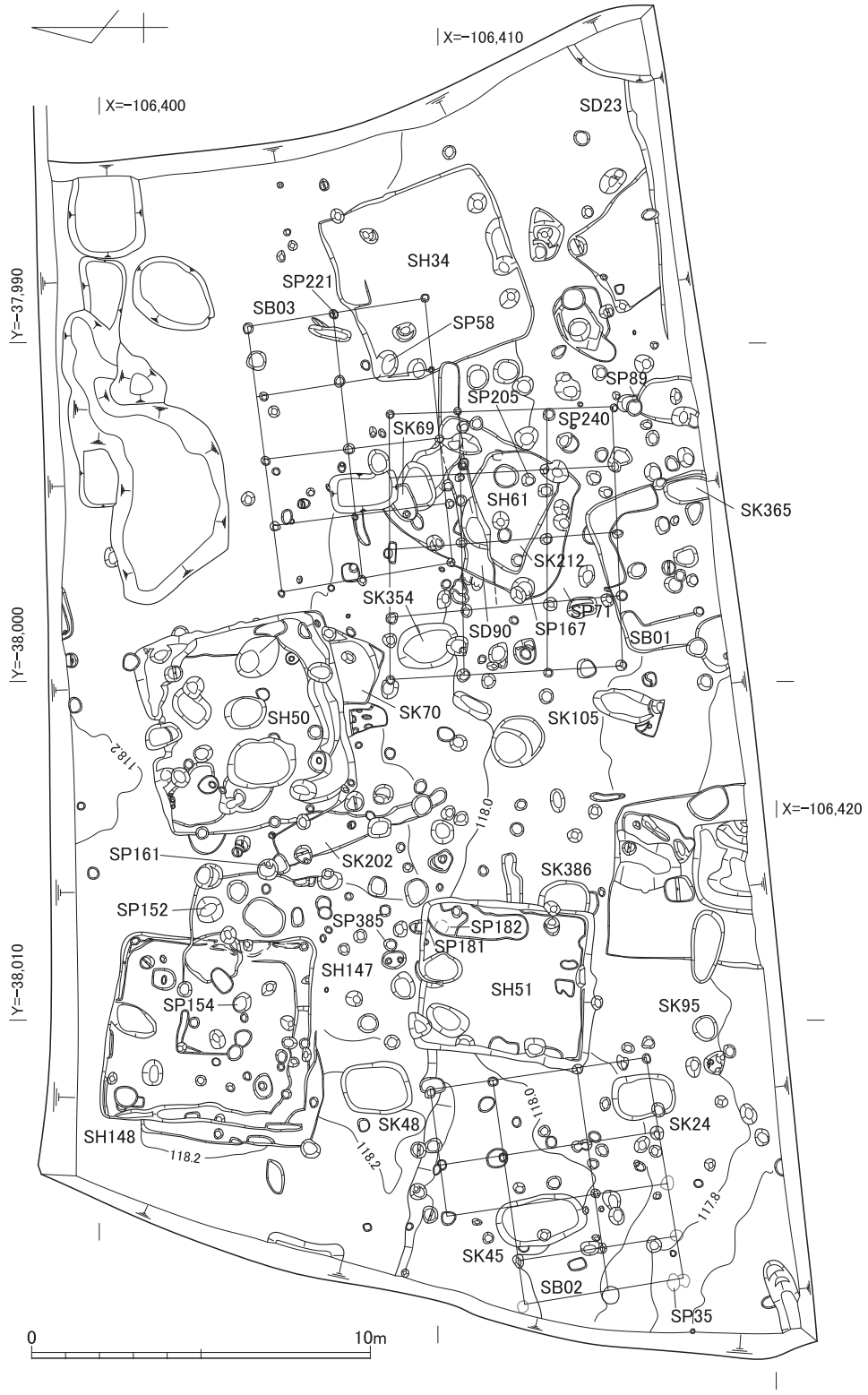
（５）包含層出土遺物

遺物包含層や遺構面の精査中に出土した遺物について報告する（第84図79～94）。81～89・94は須恵器、79・80・90～93は土師器である。79・80は布留式甕の口縁部である。81は杯Ｂ蓋である。82は大型の蓋である。口縁端部が大きく屈曲する。83は杯、84～86は杯Ｂである。高台の形状から古い様相を示すと考えられる。87は短頸壺の口縁部である。口縁端部を大きく外方へ屈曲する。88は甕などの把手である。89は甕の口縁部である。90は椀状を呈する杯である。91～93は甕である。92は体部内面にヘラケズリ調整がみられる。94はいわゆる東播系須恵器の鉢である。

（筒井崇史）

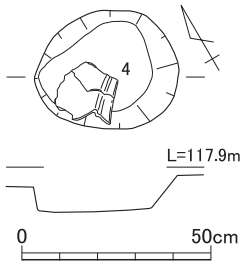
15. Ａ５地区の調査

Ａ４地区の南側に設定した調査区である。地形的にはＡ４地区から引き続き南に向かって傾斜しているが、北半部では水田面の造成によって、黒褐色粘質土（黒ボク層）は削平されたようで、床土の直下で地山を検出した。一方、南半部では黒褐色粘質土が厚く堆積をしていた。他の地区



第 66 図　Ａ５地区検出遺構配置図（1/200）

と同様に、この上面で中世の遺構を検出した。また、地山上で古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の遺構を検出した（第66図）。



第67図　土坑ＳＫ205実測図

（１）古墳時代の遺構・遺物

古墳時代と思われる土坑は３基ある。隣接するＡ４・Ａ６地区では当該期の竪穴式住居跡を検出したが、Ａ５地区では検出されなかった。

①土坑ＳＫ365　調査区の南辺中央付近で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ10cmを測る。土師器片が出土した（第75図１・２）。１は小型丸底土器もしくは小型壺の口縁部、２は布留式甕の口縁部である。古墳時代前期のものであろう。

②土坑ＳＫ205（第67図）　調査区の南東部、竪穴式住居跡ＳＨ61の下層で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径35cm前後、深さ10cmを測る。土師器や土錘などが出土した（第75図３～６）。３は二重口縁壺の口縁部、４は複合口縁を呈する甕である。４は口縁部の特徴から山陰系の甕と考えられる。５・６は土錘である。３・４は古墳時代前期に位置づけられる。

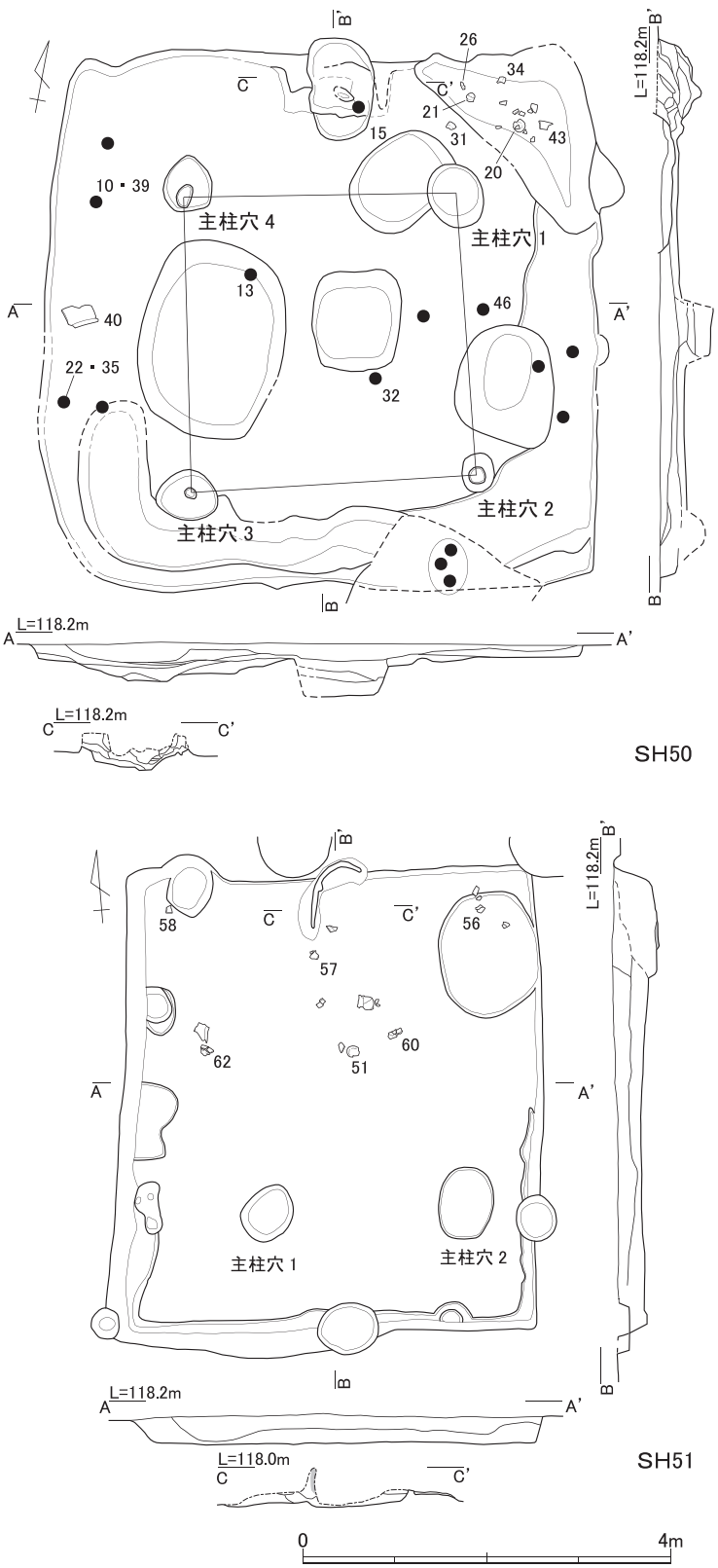
③土坑ＳＫ105　調査区の南辺中央付近で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.9m、幅0.9m、深さ約40cmを測る。出土遺物としては土師器や須恵器の破片がある（第75図７・８）。７は土師器布留式甕の口縁部である。８とは時期差があるので、混入であろう。８は須恵器杯蓋である。口縁端部が面状に内傾し、外面にやや明瞭な稜がめぐる。陶邑編年のＭＴ15型式に相当する[注7]と思われるが、当該期の遺物は今回の調査地全体においても出土例はわずかである。調査地周辺に当該期の集落等が存在した可能性がある。なお、ＳＫ105は今回の調査対象地で検出した唯一の古墳時代後期の遺構である。

（２）飛鳥・奈良時代の遺構・遺物

飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構として、竪穴式住居跡６基のほか、土坑、柱穴などを多数検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ50（第68図上）　調査区の中央部やや北寄りで検出した。平面形は方形を呈し、一辺5.8～6.0m、深さ約25cmを測る。住居の遺存状況は、今回の調査で検出した当該期の住居の中でも最もよいものの１つで、後述するように多量の遺物が出土した。北辺の中央にカマドを有する。幅60～80cm、深さ５～15cmを測る周壁溝が住居の南辺と東辺に認められる。主柱穴は４基確認した。平面形は円形を呈し、直径50～70cm、深さ20～30cmを測る。住居の方位は北に対して約11°西に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器などがある（第75図９～第76図46）。９～26は須恵器である。９～12は杯Ｈ蓋、13は杯Ｇ蓋で、住居の時期よりも少し古い時期の遺物と考えられる。14～18は杯Ｂ蓋であるが、14・15はかえりを有する。19は杯Ａ、20は杯Ｂ、21～26は杯Ｇもしくは杯Ａである。27は製塩土器である。28～46は土師器である。28は皿、29は杯Ａ、30は在地系の杯、31は高杯の杯部である。29は内面に暗文がみられる。32～42は甕である。口縁部の形状の違いがわかるように図示したが、体部の形状については不明なものが多い。32は球形、40は長胴の



第68図　竪穴式住居跡ＳＨ50・51実測図

形状を呈する。43・44は鍋である。45は甑等の口縁部であろうか。46は器種不明の製品である。甑の可能性もあるが、内傾する形態や鍔状の突帯など、一般的な甑とは異なる特徴もみられる。類似した製品として、京田辺市薪遺跡で出土した円筒形土製品がある。(注8) 14～26がおおむねＳＨ50の時期を示すと考え、飛鳥時代後半から奈良時代の初めに位置づけられる。

②竪穴式住居跡ＳＨ51（第68図下）　調査区の西部、竪穴式住居跡ＳＨ50の南西約４ｍで検出した。平面形は方形で、一辺4.5～5.0m、深さ約30cmを測る。ＳＨ50同様、遺構の遺存状況は非常によく、多量の遺物が出土した。北辺の中央にカマドを有する。幅15～25cm、深さ５cm前後の周壁溝が住居の南半部に認められる。主柱穴は本来４基と考えられるが、南側の２基を確認するに留まった。平面形はほぼ円形を呈し、直径60～75cm、深さ10cm前後を測る。住居の方位は北に対して約４°東に振る。

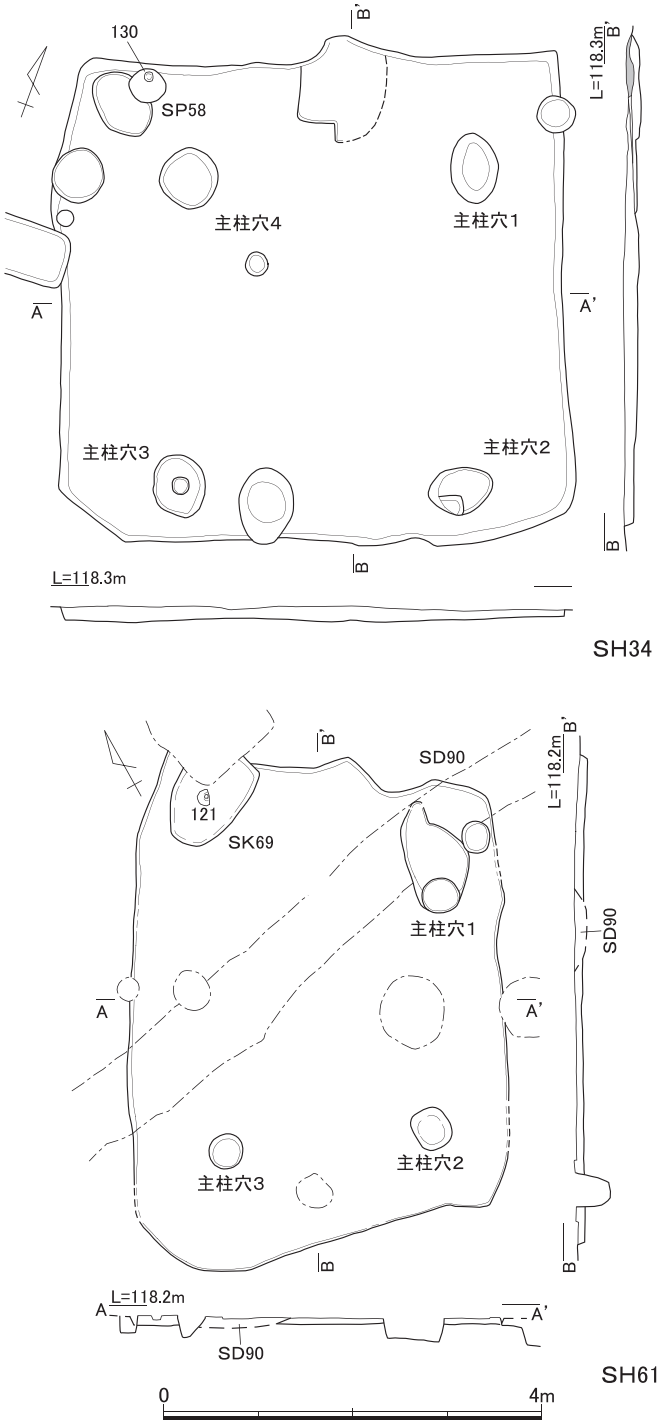
出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器、鉄器などがある（第76図47～62・第82図236～238）。47～56は須恵器である。47～49は杯Ｂ蓋、50～52は杯Ｂ、53・54は杯Ａである。55は長頸壺の口縁部、56は類例をあまりみないが、壺の体部であろう。57は製塩土器である。58～62は土師器甕である。62は長胴の体部を有する。236は刀子の刃部と茎

で、木質が遺存する。237･238も刀子で、中央部分を欠損するが同一個体と考えられるものである。47～54は竪穴式住居跡ＳＨ50の出土遺物に比べ、わずかに新しい要素が認められ、奈良時代初め頃に位置づけられる。

③竪穴式住居跡ＳＨ34（第69図上）

調査区の東部で検出した。平面形は方形で、一辺5.2～5.4m、深さ約15cmを測る。北辺の中央にカマドの痕跡を確認した。周壁溝は検出されなかった。主柱穴は４基確認した。平面形は円形を呈し、直径60～70cm、深さ35cm前後を測る。住居の方位は北に対して約20°西に振る。

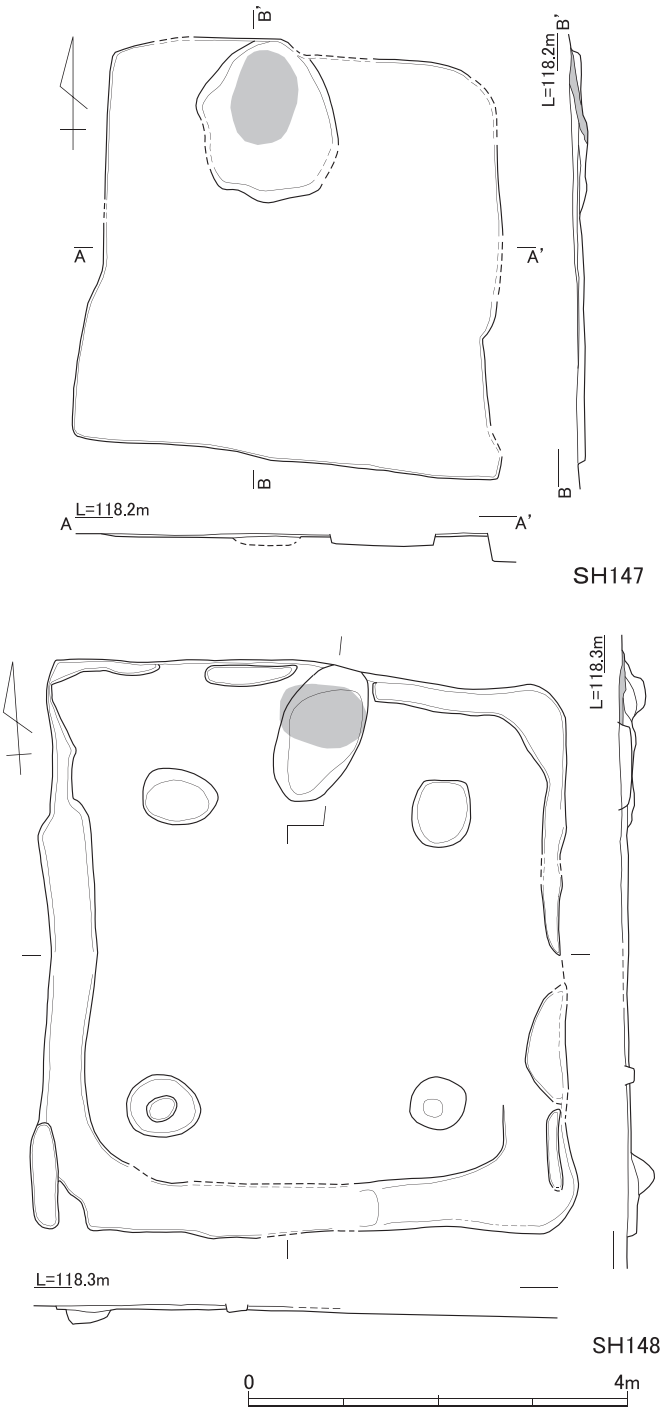
出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図63～72）。63～69は須恵器である。63は杯Ｇ蓋である。64～66は杯であるが、64と65・66は形態が異なり、区別できる。67は破断箇所から斜め下方に伸びていくので、瑕の可能性がある。68は口縁部の形態から提瓶の可能性がある。69は器種不明であるが、横瓶の口縁部の可能性もある。67～69は63～66に比べるとやや古い特徴をもつが、共伴していてもよいと考える。70～72は土師器である。70は器種不明、71は杯Ｃ、72は甕である。63・65・66・71がこの住居の時期を示すと考えられ、飛鳥時代後半に位置づけられる。



第69図　竪穴式住居跡ＳＨ34・61実測図

④竪穴式住居跡ＳＨ61（第69図下）　調査区の中央部、やや東寄りで検出した。平面形は不整形な方形で、一辺3.9～4.9mを測るが、南西隅はやや広がる。カマドの有無は不明である。周壁溝は検出されなかった。主柱穴は本来４基と考えられるが、３基を確認したに留まる。平面形は円形を呈し、直径35～45cm、深さ10cm前後を測る。住居の方位は北に対して約29°東に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図82～90）。82～89は須恵器である。82・83は杯



第70図　竪穴式住居跡ＳＨ147・148実測図

Ｂ蓋、84～86は杯Ｂの底部、87は杯Ａの底部、88は杯の口縁部、89は片口の鉢の口縁部である。90は土師器杯Ａである。奈良時代初め頃に位置づけられる。

⑤竪穴式住居跡ＳＨ147（第70図上）

調査区の北西部で検出した。平面形は方形で、一辺4.4mを測り、深さは５～６cmと非常に浅い。北辺の中央でカマドの痕跡を確認した。周壁溝や主柱穴は、削平が著しいことや、周辺に多数の柱穴がみられることから確認することはできなかった。住居の方位はほぼ南北方向である。

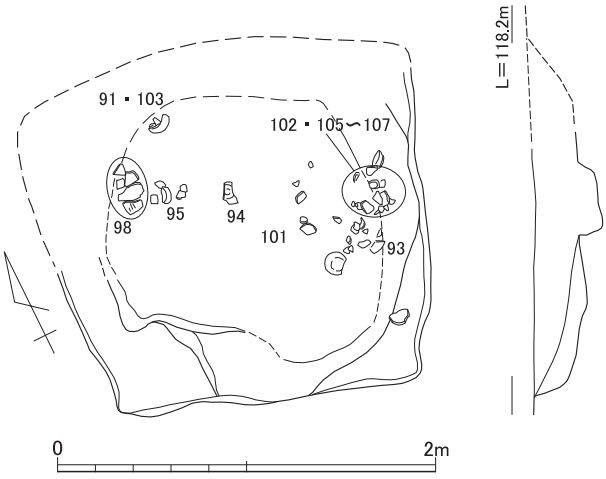
出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図73～79）。73～75は須恵器である。73は杯Gまたは杯Ｂの蓋と推定され、内面にかえりを有する。74は壺または甕の口縁部、75は杯の口縁部である。76～79は土師器である。76は短頸壺と推定される。77は高杯の脚部、78・79は甕の口縁部である。73から飛鳥時代後半に位置づけられよう。

⑥竪穴式住居跡ＳＨ148（第70図下）

調査区の北西部、竪穴式住居跡ＳＨ147と重複して検出した。切り合い関係や出土遺物からＳＨ148の方が新しい。平面形は隅丸方形で、一辺5.4～6.0mを測り、深さは５cm程度と非常に浅い。北辺の中央にカマドを有する。周壁溝は幅30～50cm、深さ５～10cmを測り、断続的にめぐる。主柱穴は４基検出した。平面形は円形を呈し、直径60～80cm、深さ20～50cmを測る。住居の方位はほぼ南北方向である。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図80・81）。80は須恵器杯Ｂ蓋である。81は土師器甕の口縁部である。80から奈良時代初め頃に位置づけられ、竪穴式住居跡ＳＨ51とほぼ同時期と考えられる。

⑦**土坑ＳＫ70**（第71図）　調査区の中央部で検出した。竪穴式住居跡ＳＨ50と重複しており、ＳＫ70の方が新しい。ＳＨ50との切り合いから北辺が不明瞭であるが、平面形は隅丸方形を呈する。長辺3.3m以上、短辺3.3m、深さ50～70cmを測る。主軸は北に対して約22°東に振る。



第71図　土坑ＳＫ70実測図

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器などがある（第77図91～第78図109）。91～98は須恵器である。91～96は杯Ａ、97は杯である。98は平底を呈する鉢Ａである。99～103は土師器である。99・100は杯Ａ、101～103は甕の口縁部である。104～109は製塩土器である。須恵器杯Ｂ蓋を欠くが、須恵器杯Ａや土師器杯Ａの特徴から奈良時代前半頃に位置づけられる。

⑧**土坑ＳＫ354**　調査区の中央、土坑ＳＫ70の南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸1.3m、深さ30～40cmを測る。

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器がある（第78図110～120）。110～115は須恵器である。110・111は杯Ｂ蓋で、110は内面にかえりを有する。112は杯Ａ、113・114は長頸壺の口縁部、115は盤である。116～119は土師器甕の口縁部である。120は製塩土器である。土坑ＳＫ70よりも少し古い様相を示し、奈良時代初め頃に位置づけられる。

⑨**土坑ＳＫ69**　竪穴式住居跡ＳＨ61の北辺に重複して検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ約30cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第78図121・122）。121は杯Ｂ蓋、122は杯Ｂである。121は竪穴式住居跡ＳＨ61出土の83とおおむね同時期と考える。

⑩**土坑ＳＫ212**　竪穴式住居跡ＳＨ61と重複して検出した。平面形は隅丸長方形で、長辺3.4m、短辺2.4m、深さ25～35cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第78図123～125）。123・124は杯Ｂ蓋、125は杯Ｂである。出土した遺物からはＳＨ61との前後関係は不明であるが、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

⑪**土坑ＳＫ95**　調査区の南西部で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ約30cmを測る。出土遺物としては須恵器杯Ｂ蓋がある（第78図126）。

⑫**土坑ＳＫ202**　調査区の中央部、竪穴式住居跡ＳＨ50の西側で検出した。平面形はやや不整形な長方形を呈し、長軸2.7m以上、短軸1.3m、深さ約10cmを測る。出土遺物としては須恵器杯Ｇ蓋がある（第78図127）。

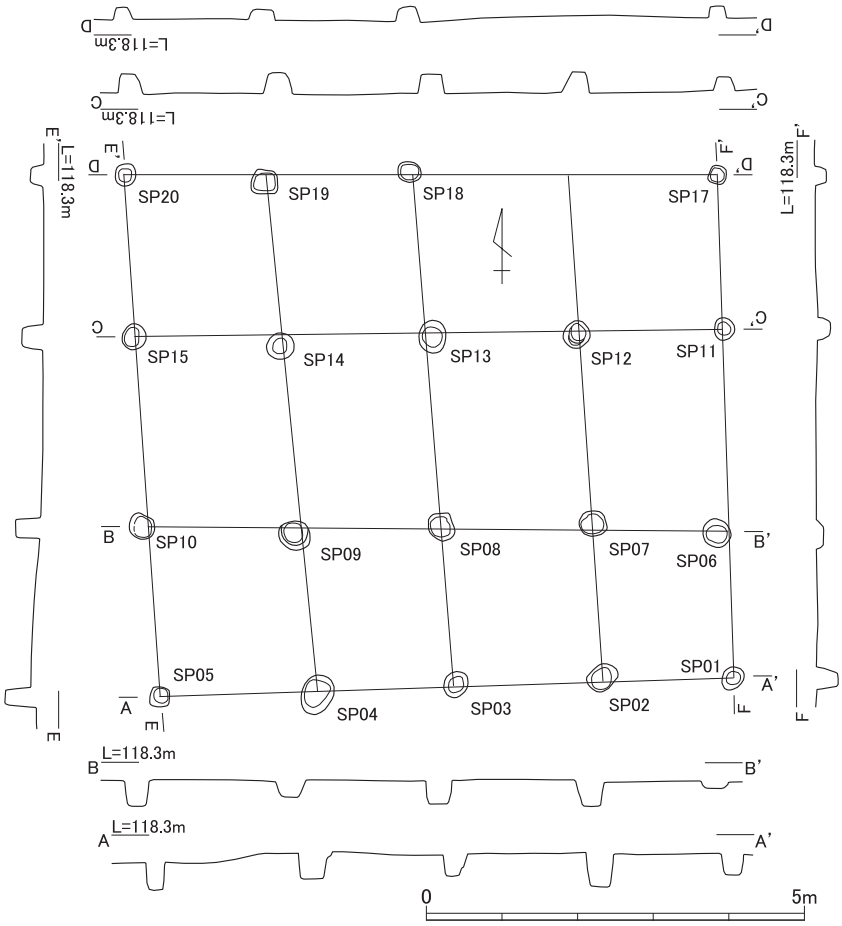
⑬**土坑ＳＫ386**　調査区の中央部、竪穴式住居跡ＳＨ51の東側に接して検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸0.9m以上、深さ約30cmを測る。出土遺物としては土師器高杯の杯部がある（第78図128）。外面にヘラケズリ調整、内面に暗文を施す。

⑭**溝ＳＤ90**　調査区の中央部、竪穴式住居跡ＳＨ61と重複して検出した。全長9.8m、幅0.3～0.8m、深さ約15cmを測る。出土遺物としては土師器甕や製塩土器、鉄器がある（第78図129・第82図235）。235は鉄鏃である。

⑮**柱穴群**　Ａ５地区では多数の柱穴を検出したが、建物や柵としてまとまるものを確認することはできなかった。柱穴はおおむね平面形が円形で、直径30～50cm、深さ20～30cmのものが多い。平面形が方形で、一辺が50cmを超えるような柱穴は検出しなかった。

出土遺物としては須恵器や土師器などがある（第78図130～140）。130は柱穴ＳＰ58から出土した須恵器杯Ｈ蓋である。131～133は須恵器杯Ｂ蓋である。131は柱穴ＳＰ385から、132は柱穴ＳＰ181から、133は柱穴ＳＰ182から、それぞれ出土した。134も柱穴ＳＰ182から出土した須恵器壺の口縁部である。135は柱穴ＳＰ161から出土した須恵器杯Ａである。136は柱穴ＳＰ167から出土した須恵器杯である。137は柱穴ＳＰ71から出土した土師器杯Ａである。内面に暗文、外面にミガキ調整を施す。138・139は土師器甕である。138は柱穴ＳＰ152から、139は柱穴ＳＰ154から出土した。140は柱穴ＳＰ221から出土した須恵器椀である。底部外面に糸切り痕が認められることから平安時代のものである。

（筒井崇史）

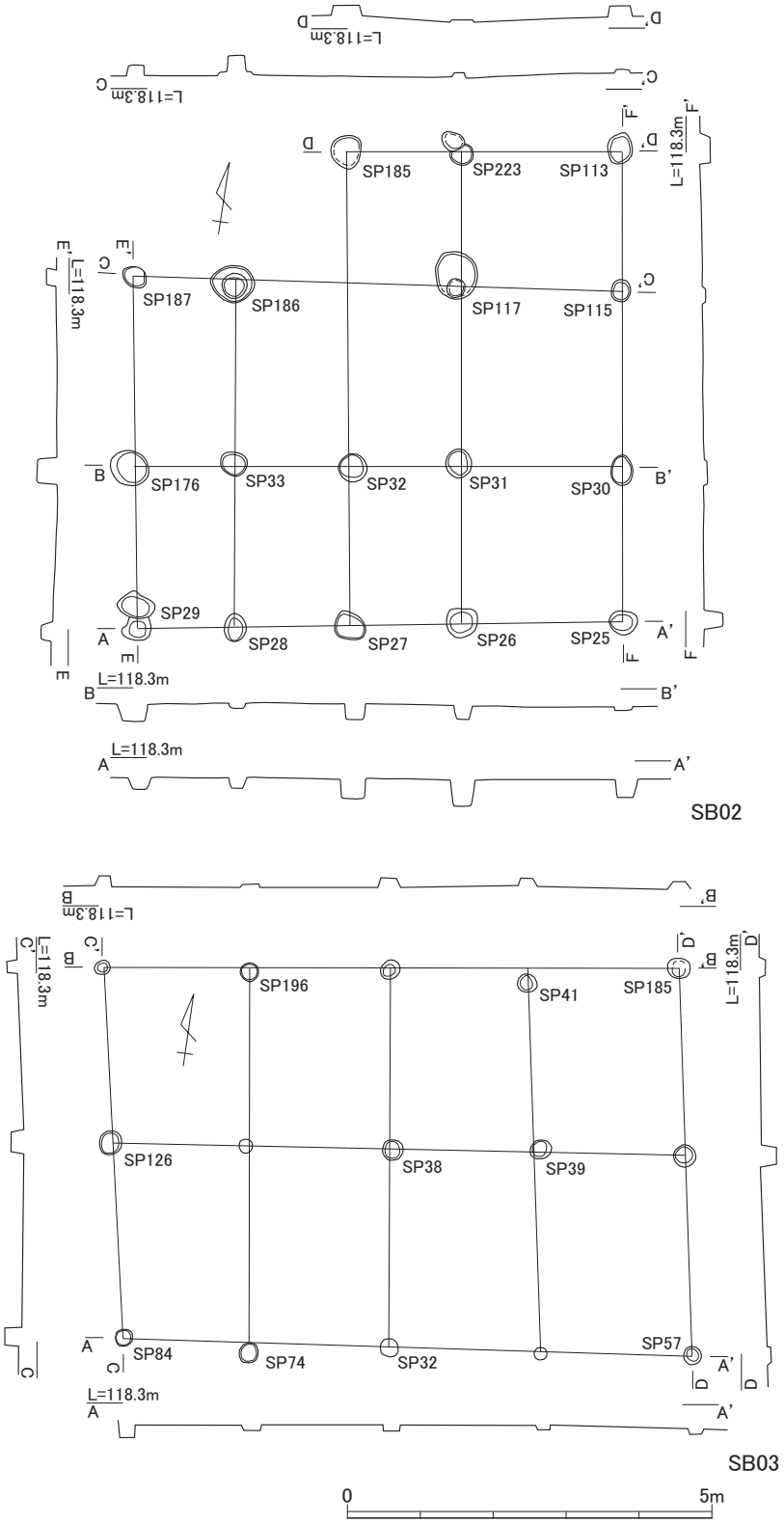


第72図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

（３）中世の遺構

中世の遺構として、掘立柱建物跡３棟、土坑３基、溝１条のほか、多数の柱穴を検出した。

①**掘立柱建物跡ＳＢ01**（第72図）　調査区の東半部で検出した。桁行４間（約7.8m）、梁行３間



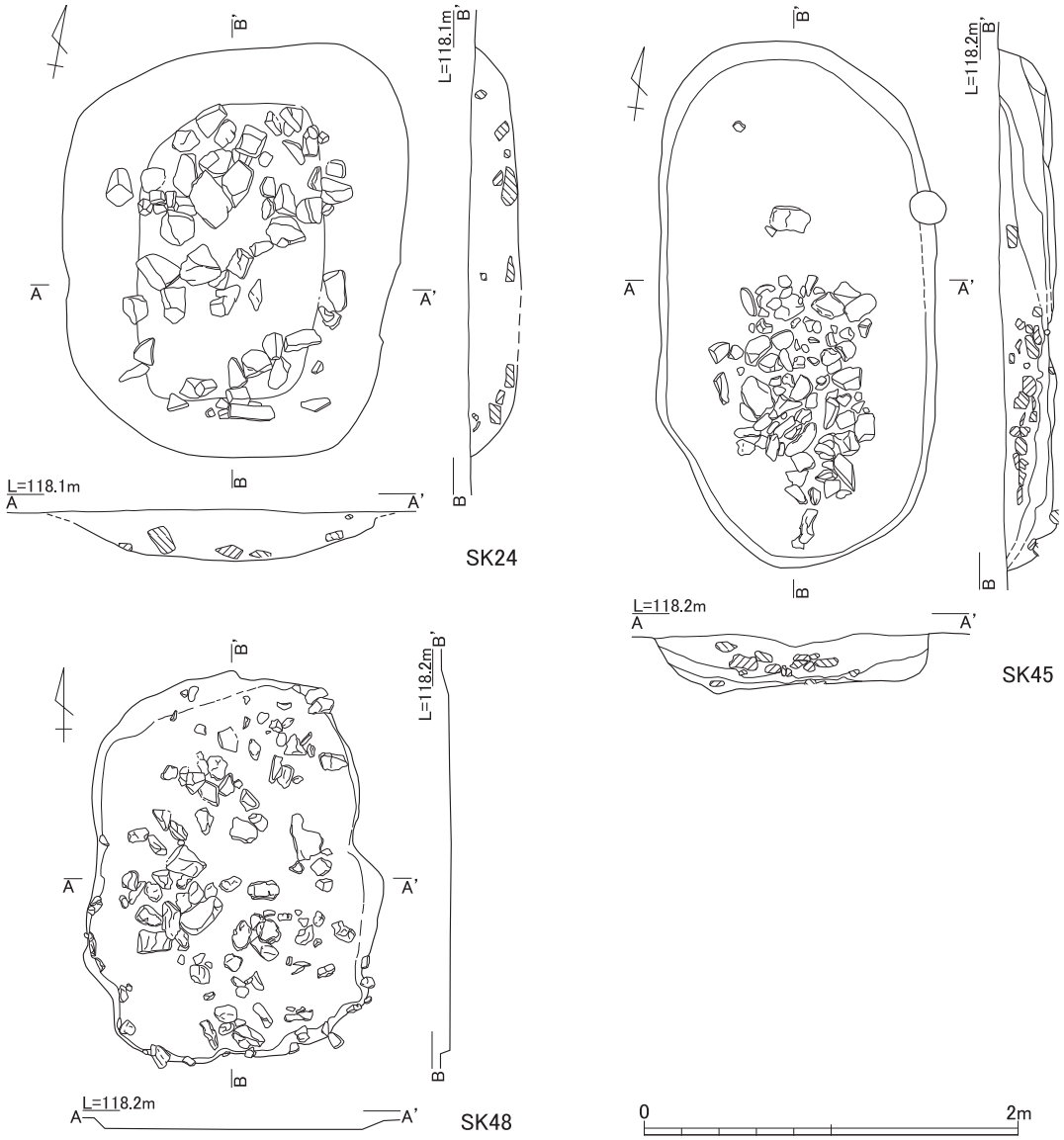
第73図　掘立柱建物跡ＳＢ02・03実測図

（約6.7m）の総柱の建物である。柱穴の平面形はおおむね円形で、直径25～40cm、深さ10～30cmを測る。建物の方位は北に対して約１°30′西に振る。

出土遺物としては瓦器や土師器がある（第79図141・142）。141は土師器皿である。142は丹波型瓦器椀である。141は柱穴ＳＰ11から、142は柱穴ＳＰ03から出土した。

②掘立柱建物跡ＳＢ02（第73図上）　調査区の西半部で検出した。桁行４間（約6.6m）、梁行３間（約6.5m）の総柱の建物である。柱穴の平面形はおおむね円形で、直径30～40cm、深さ10～30cmを測る。建物の方位は北に対して約８°西に振る。

出土遺物としては瓦器や土師器がある（第79図143～155）。143・144は土師器皿である。145～155は丹波型瓦器椀である。全体に磨滅が著しいが、145の内面には密な圏線ミガキ、148・151・153の内面に粗い圏線ミガキがみられる。152の内面には縦方向のハケ調整がみられる。146・149は器表面が灰橙色～淡灰色を呈する。143･148は柱穴ＳＰ33から､144･146･147は柱穴ＳＰ32から、



第74図　土坑ＳＫ24・45・48実測図

145は柱穴ＳＰ186から、149～155は柱穴ＳＰ30から出土した。

③**掘立柱建物跡ＳＢ03**（第73図下）　調査区の東半部で検出した。掘立柱建物跡ＳＢ01と重複する。桁行４間（約7.8m）、梁行２間（約5.2m）の総柱の建物である。柱穴の平面形はおおむね円形で、直径25～30cm、深さ10～25cmを測る。建物の方位は北に対して約７°西に振る。

出土遺物としては土師器がある（第79図156）。156は土師器甕である。外反する短い口縁部の端部を内側に折り曲げる。体部内面は板ナデ、外面はナデ調整で指押さえがみられる。柱穴ＳＰ38から出土した。

④**土坑ＳＫ24**（第74図左上）　調査区の南西部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺約2.2m、短辺約1.8m、深さ約15～25cmを測る。土坑内から一辺８～15cm大の角礫が多量に出土した。角礫の間から細片化した土師器や瓦器が出土した（第79図162～175）。

162～168は土師器皿である。162～164は口縁部が緩やかに立ち上がり端部を尖り気味に納めるもの、165～168は口縁部の上半がやや外反して端部をわずかに内側に折り曲げるものである。169～174は丹波型瓦器椀である。いずれも磨滅が著しいが、内面に粗い圏線ミガキが施されるものである。175は瓦質土器羽釜である。やや外傾する短い口縁部をもつ。

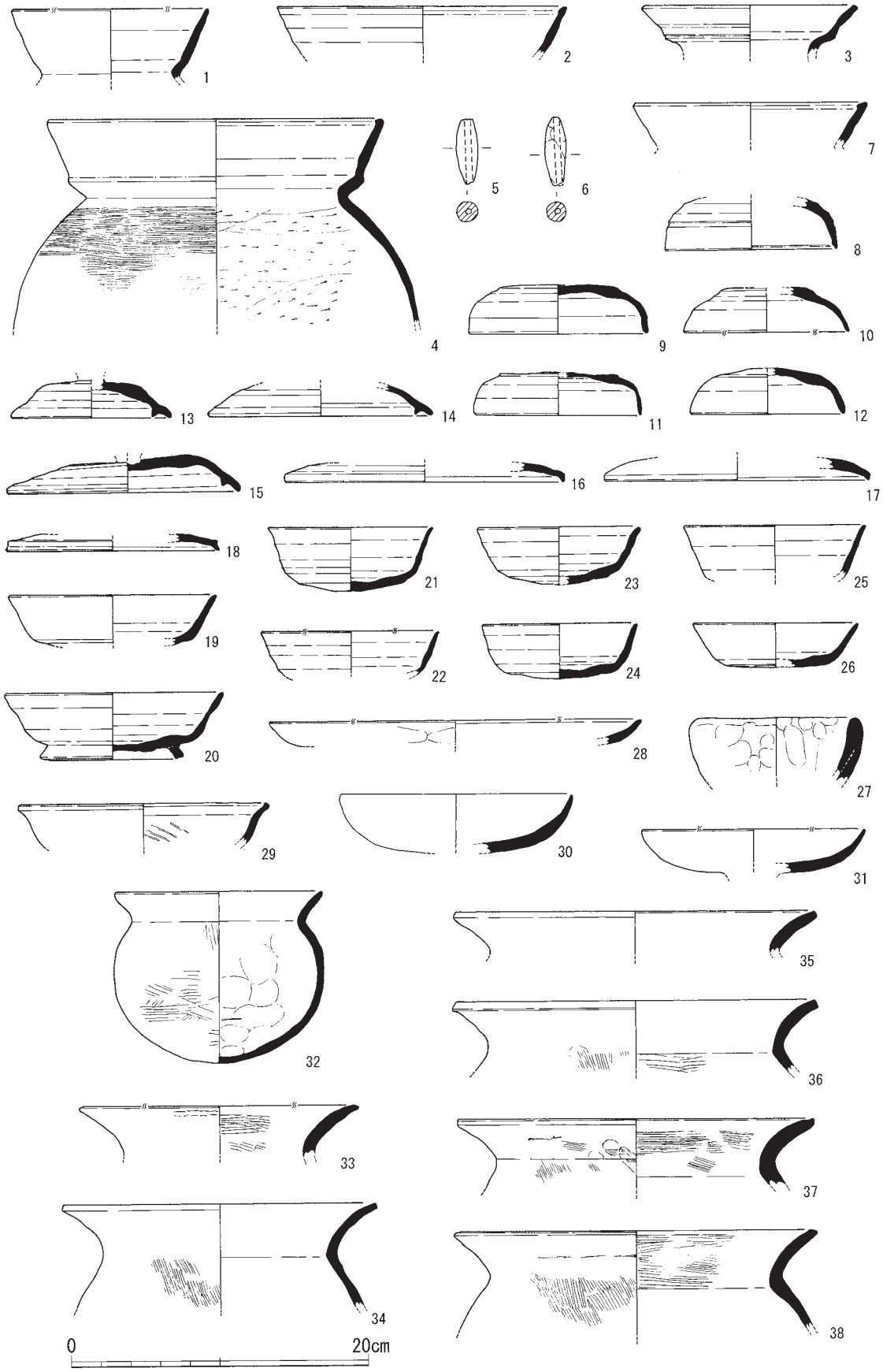
⑤**土坑ＳＫ45**（第74図右）　調査区の西端部、中央付近で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸2.8m、短軸1.5m、深さ約30cmを測る。土坑ＳＫ24同様に一辺10～20cm大の角礫が多量に出土した。角礫の間から細片化した瓦器や須恵器が出土した（第79図176～178）。176・177は丹波型瓦器椀である。器表面が剝離して調整は観察できないが、剝離の様子や色調が近似し、同一個体である可能性がある。178は篠窯産須恵器鉢である。口縁端部は玉縁状で、色調は淡灰色を呈する。

⑥**土坑ＳＫ48**（第74図左下）　調査区の西端部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺2.1m、短辺1.5m、深さ約12cmを測る。土坑ＳＫ24・ＳＫ48同様に一辺10～25cm大の角礫が多量に出土した。

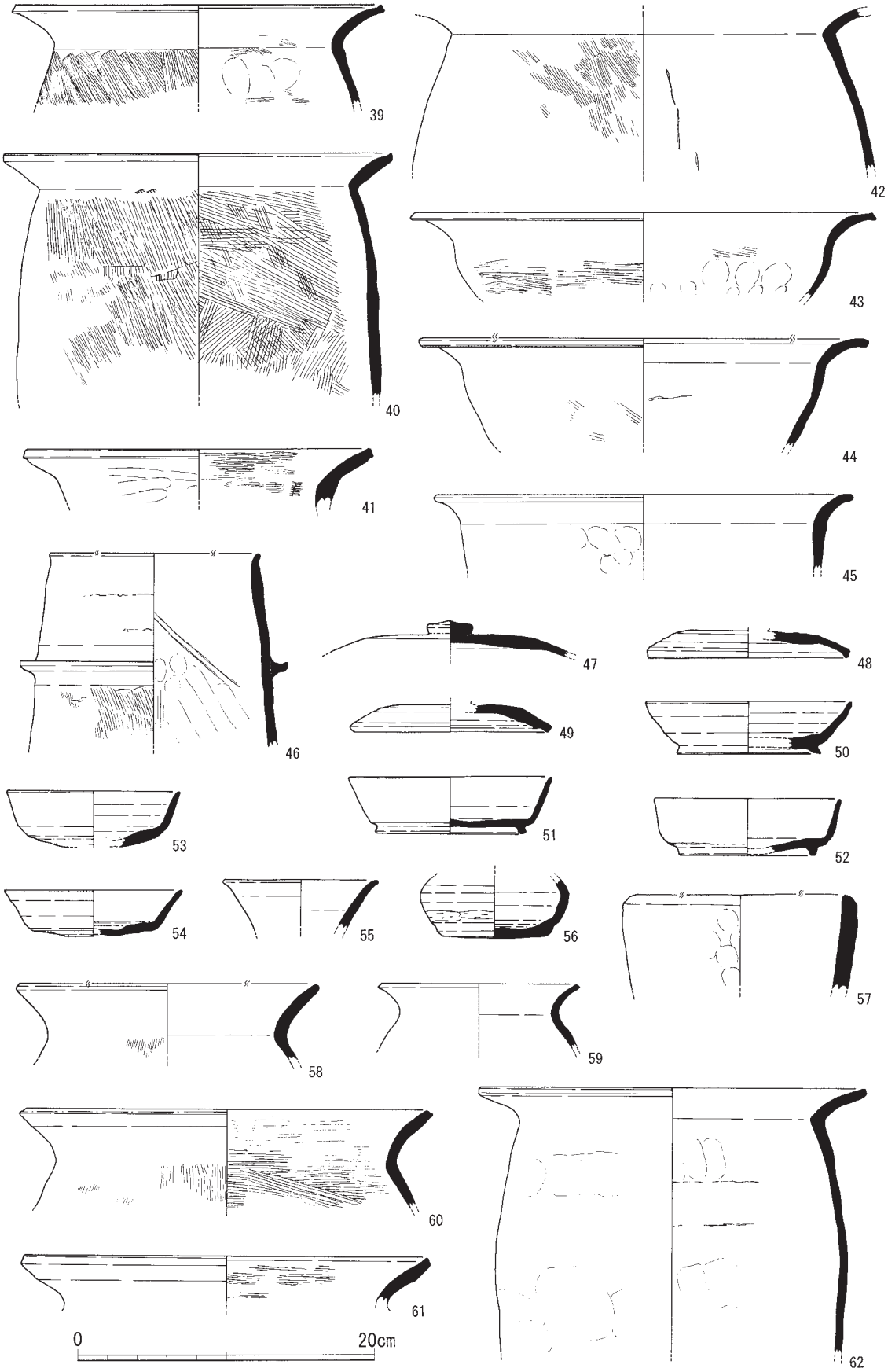
角礫の間から細片化した土師器や瓦器・須恵器・瓦質土器が多量に出土した（第80図179～213）。179～204は土師器皿である。179～189は短い口縁部が屈曲して立ち上がるもので、端部は尖り気味に納める。190～196は口縁部が緩やかに立ち上がるものでやや深手になる。197～204は大皿で、立ち上がり部に強い指押さえがみられる。204の内面外面には放射状の線が刻まれている。205～211は丹波型瓦器椀である。全体に磨滅が著しいが、205は内面に間隔の開いた圏線ミガキが、見込みにはジグザグ状暗文がみられる。212は瓦質土器羽釜である。外面は指押さえによる凹凸が著しい。213は東播系須恵器鉢である。内面は使用により胎土中の砂礫が脱落してアバタ状を呈する。214は瓦質土器甕である。外面は斜格子タタキ、内面はハケ調整が施される。丸底の底部片は接合しないが同一個体である。内外面にヘラケズリが施される。

⑦**溝ＳＤ23**　調査区南壁に沿って検出した。検出長33m、幅0.4～0.9m、深さ10cm前後を測る。

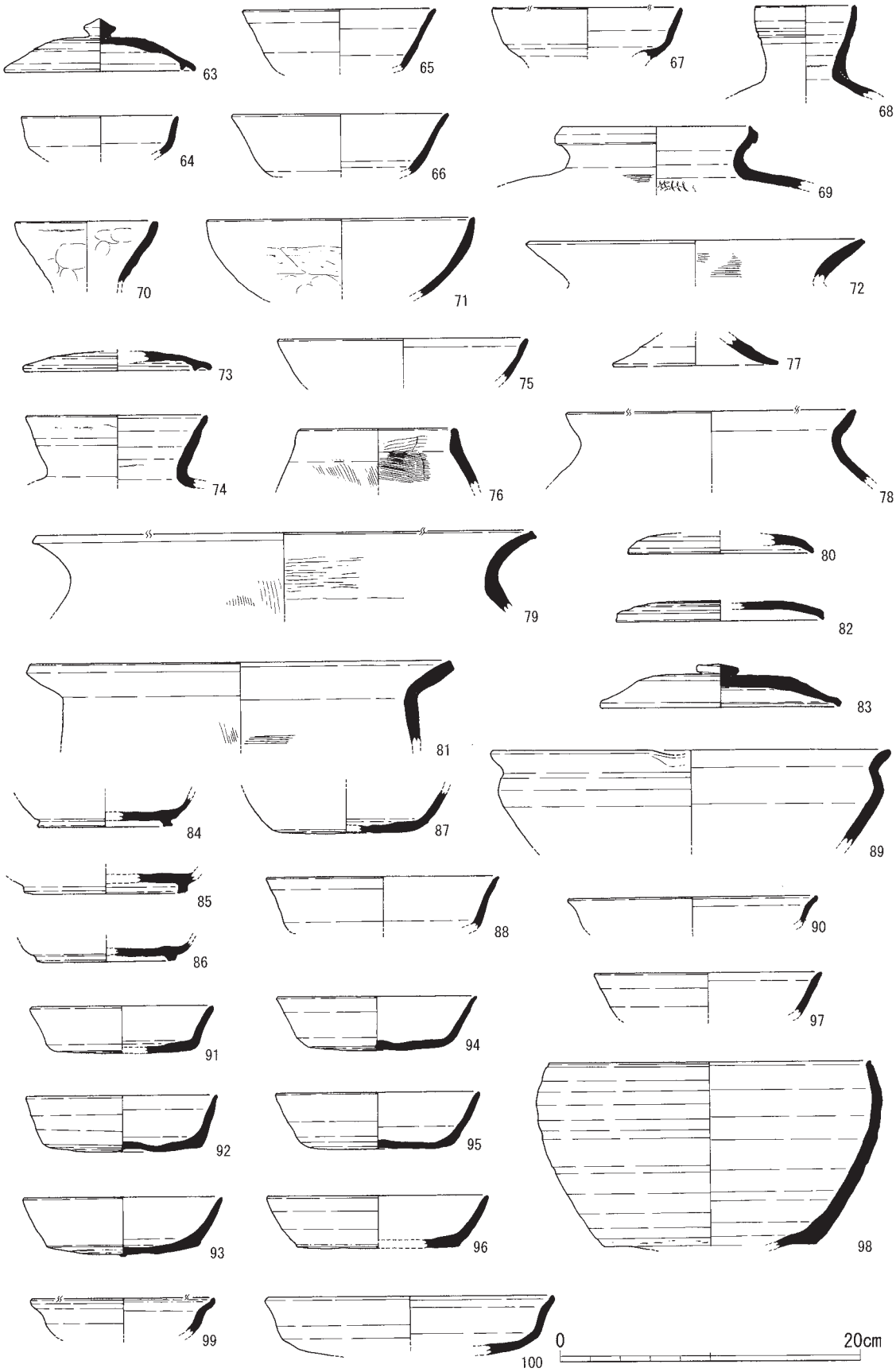
出土遺物としては緑釉陶器椀がある（第80図215）。215は平高台から丸みを持って立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。ヘラミガキの後全面に施釉されている。胎土は暗灰色を呈し、硬



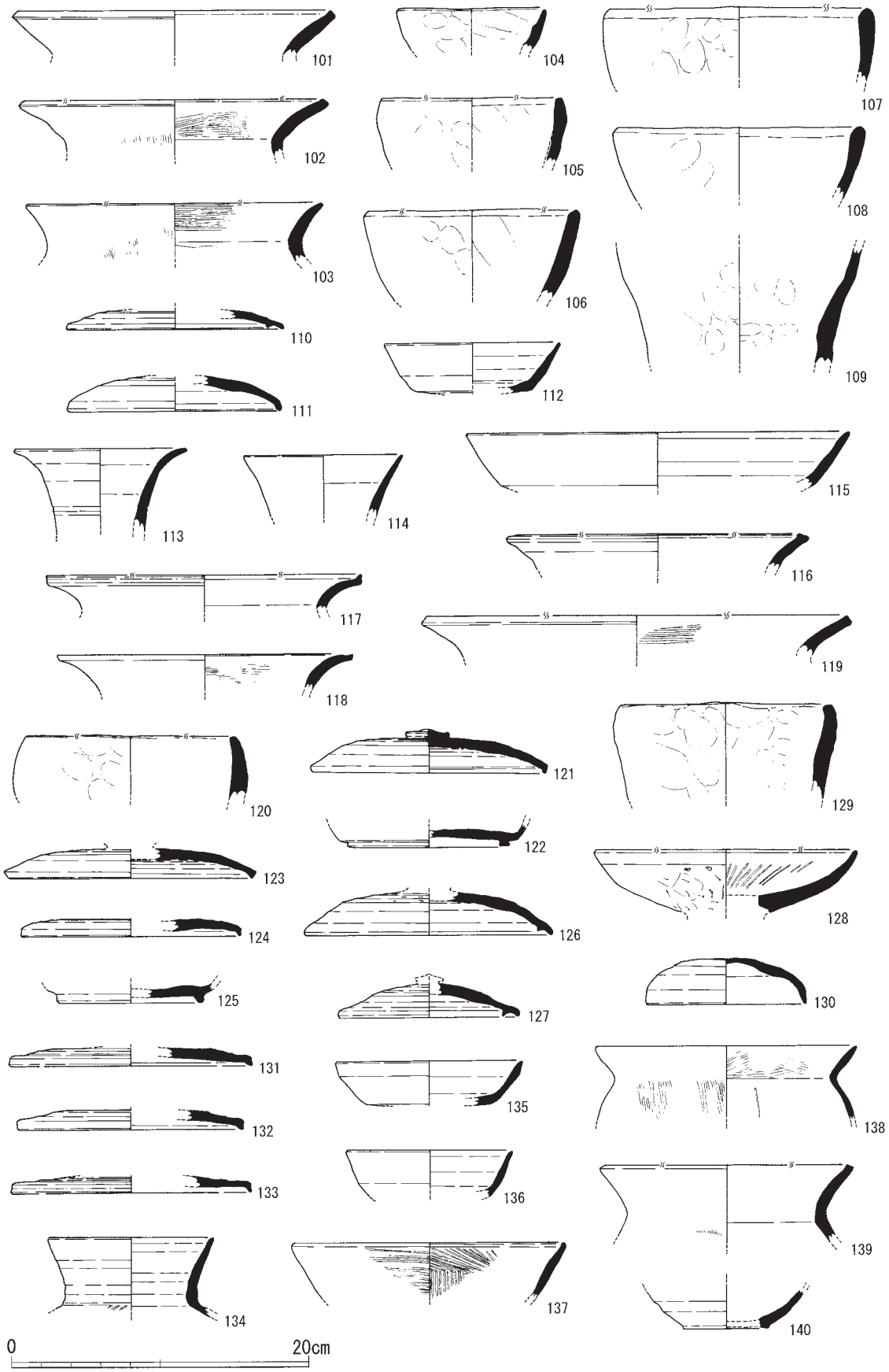
第 75 図　Ａ５地区出土遺物実測図（１）



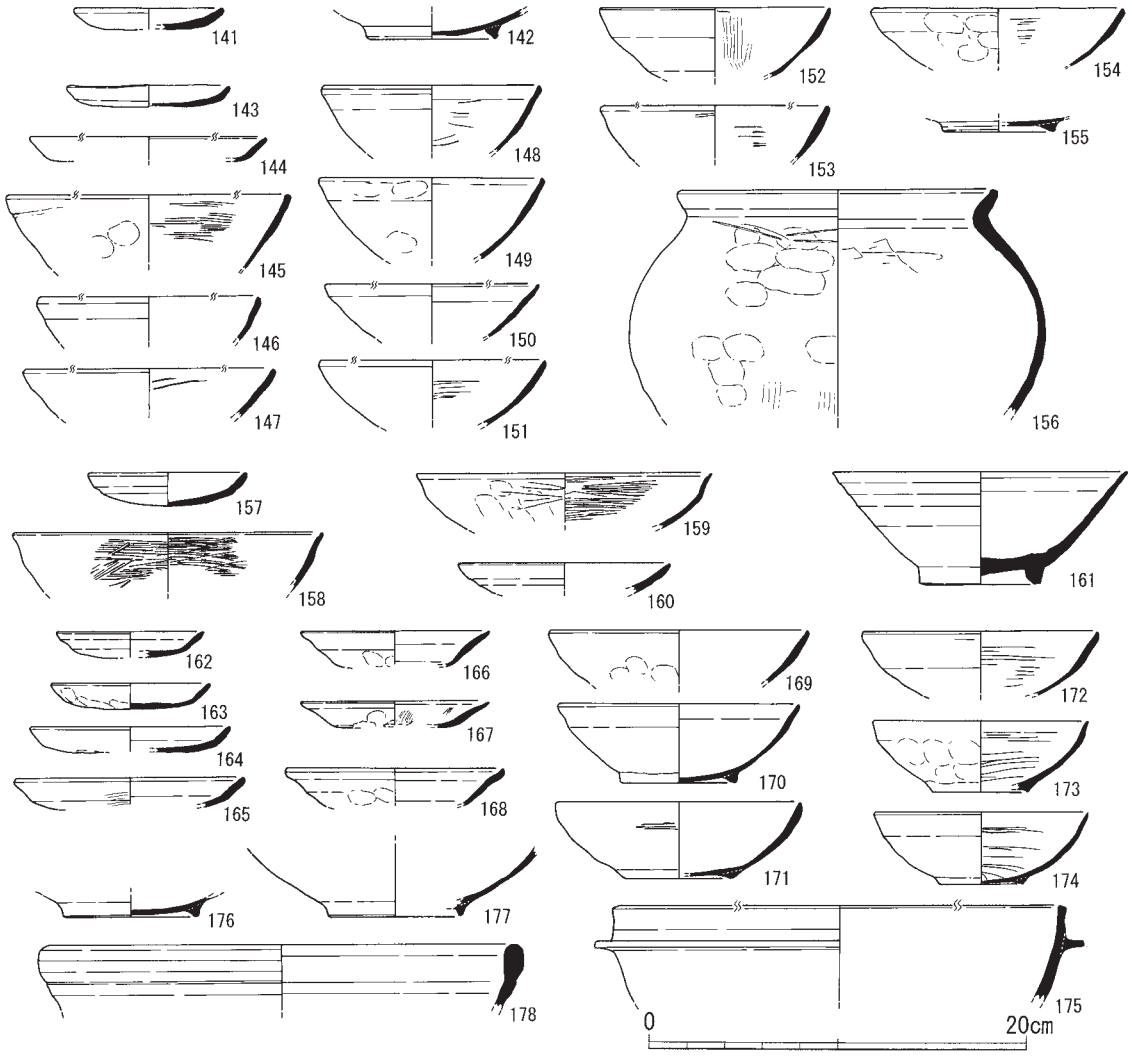
第 76 図　A５地区出土遺物実測図（２）



第 77 図　Ａ５地区出土遺物実測図（３）



第 78 図　A５地区出土遺物実測図（４）



第79図　Ａ５地区出土遺物実測図（５）

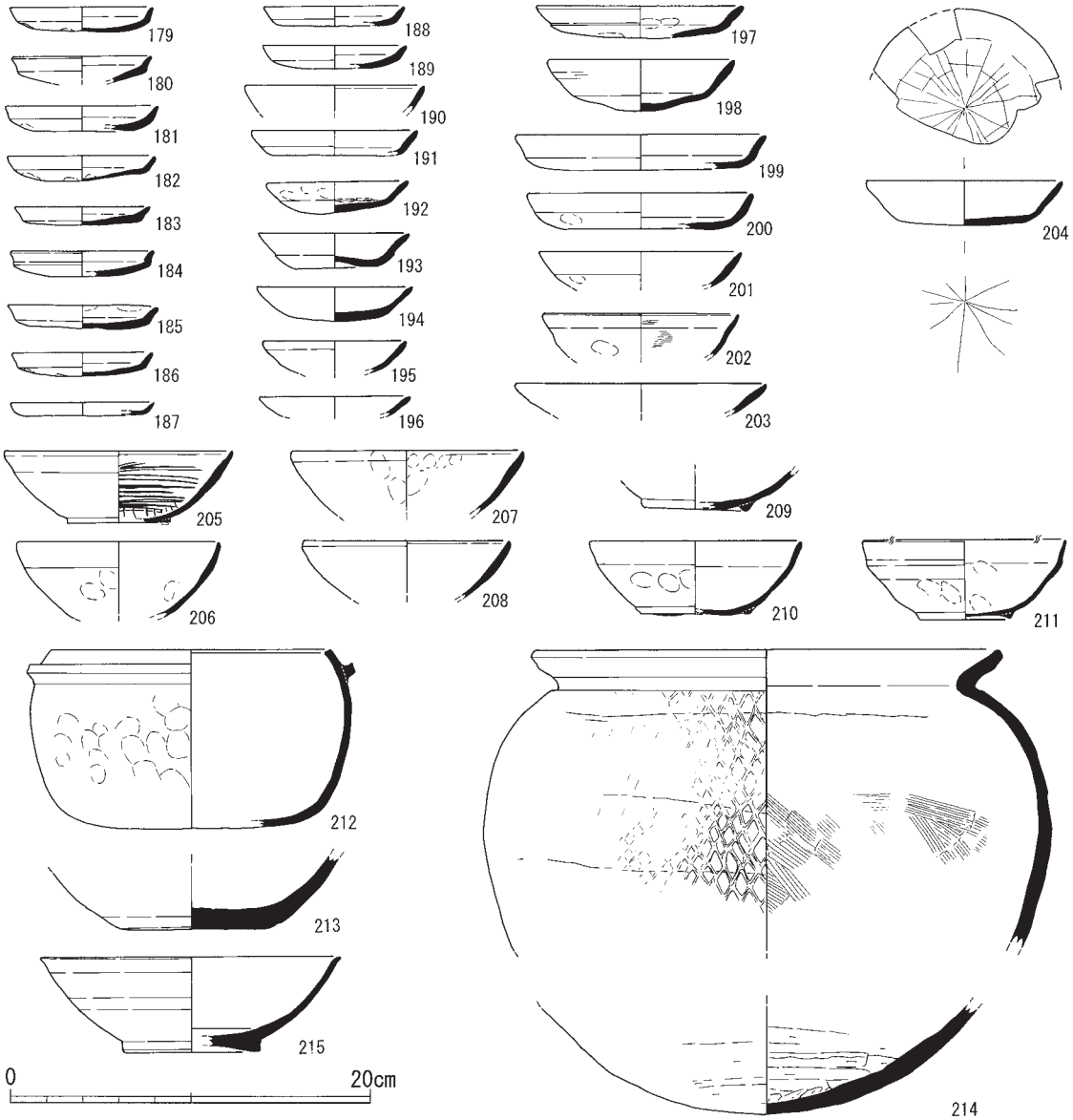
質である。

⑧**柱穴群**　建物や柵などを構成しない柱穴については上述のとおりであるが、ここでは中世の遺物について報告する（第79図157～161）。157は土師器皿である。158は黒色土器Ｂ類椀である。159は瓦器椀である。外反する口縁部の内端面に沈線がめぐらされること、内面に施される密な圏線ミガキが細いことなどから、大和型と考えられる。160は白磁皿である。外面に漆状の黒色物質が付着している。161は白磁椀である。見込みは輪状に釉剝ぎされる。157～159は柱穴ＳＰ89から、160は柱穴ＳＰ35から、161は柱穴ＳＰ240から出土した。

（森島康雄）

（４）包含層出土遺物

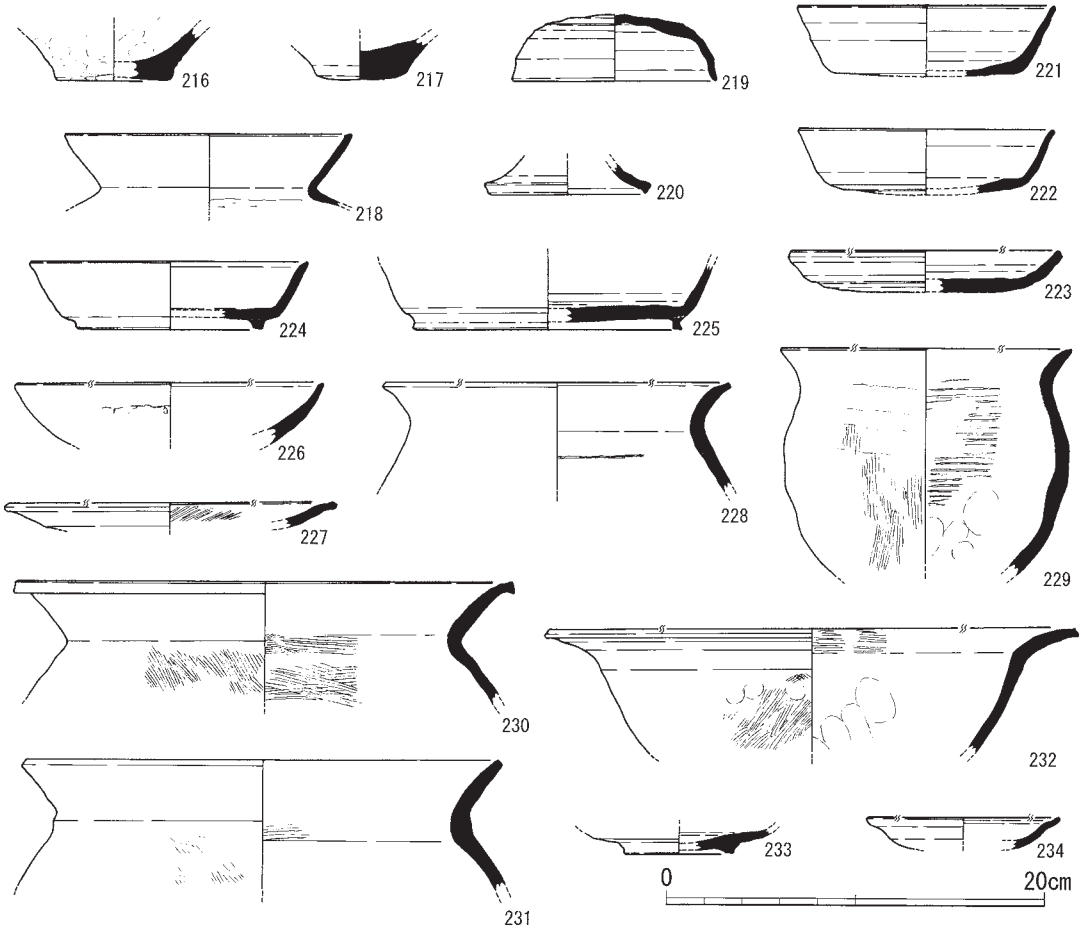
遺物包含層や遺構面の精査中に出土した遺物について報告する（第81図216～234）。216・217は弥生土器の底部と思われる破片である。218は布留式甕の口縁部である。口縁端部の肥厚はわずかである。219は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施さないことから、飛鳥時代の須恵器杯Ｈ



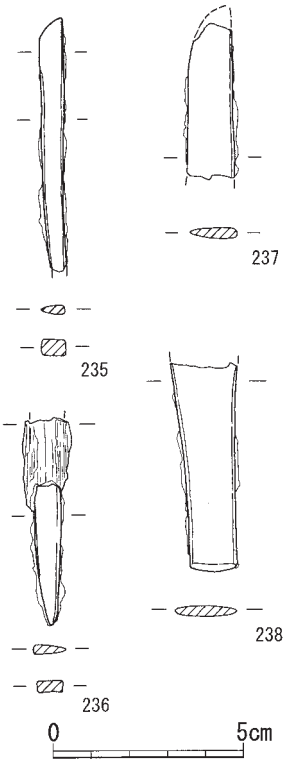
第80図　Ａ５地区出土遺物実測図（６）

蓋である。220は219とほぼ同時期の須恵器高杯脚部である。221・222はほぼ同形同大の須恵器杯Ａである。223はやや厚手の須恵器皿である。224・225は須恵器杯Ｂである。221～225は奈良時代のものと思われる。226は土師器杯で、飛鳥時代のものと思われる。227は土師器高杯の杯部である。内面に放射状暗文を施す。奈良時代に属するであろう。228～231は土師器甕である。229は内面に３～４本/cmの粗いハケ調整を横方向に施す。232は土師器鍋である。228～232は飛鳥ないし奈良時代のものであろう。233は緑釉陶器椀の底部の破片である。234は「て」字状口縁を呈する土師器皿である。233・234は平安時代のものである。

（筒井崇史）



第 81 図　Ａ５地区出土遺物実測図（７）



第 82 図　Ａ５地区出土遺物実測図（８）

16. Ａ６地区の調査

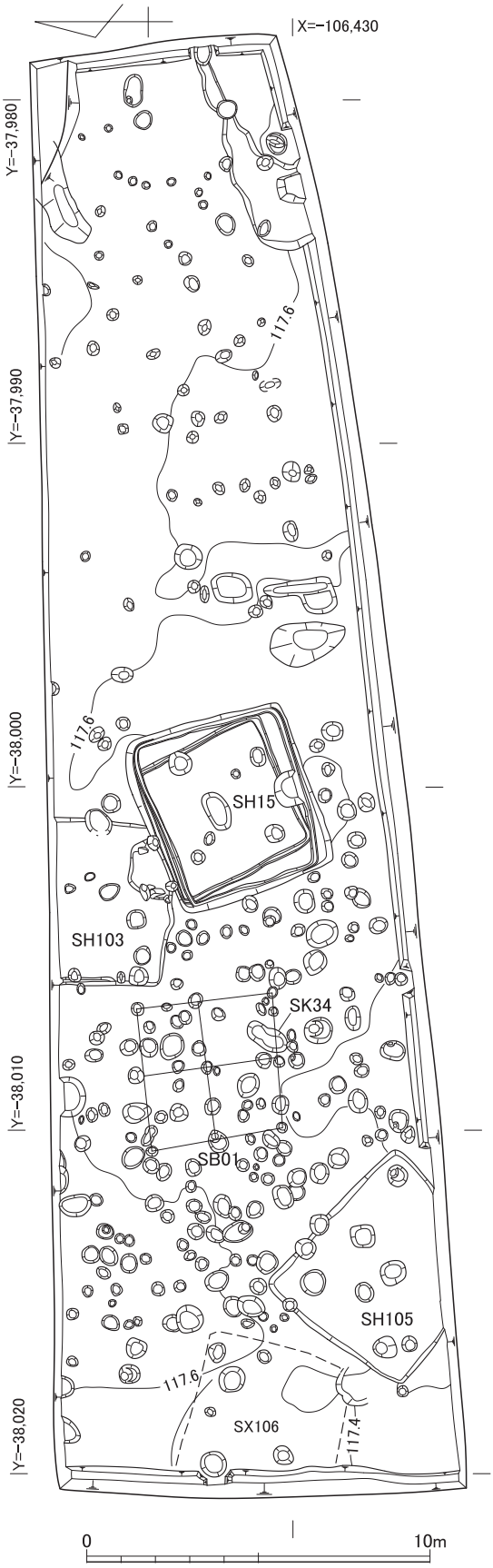
Ａ５地区の南側に設定した調査区である。古墳時代、奈良時代、中世の各時期の遺構・遺物を検出した。調査地全体に黒褐色粘質土(黒ボク層)が堆積しており、奈良時代や中世の遺構を検出した(第83図)。

(１)古墳時代の遺構・遺物

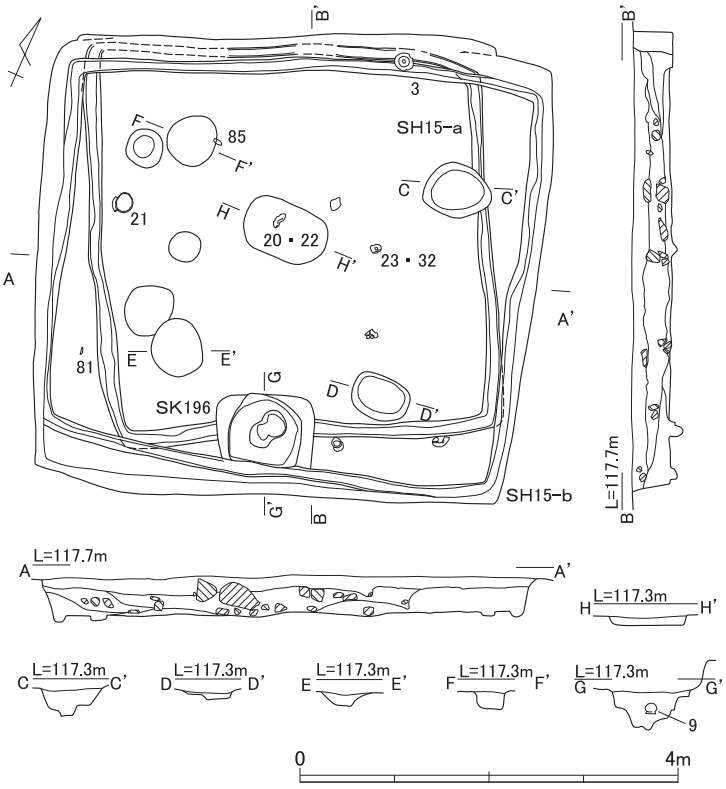
古墳時代の遺構として竪穴式住居跡３基・土坑１基・柱穴多数を検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ15(第84図)　調査区の中央部で検出した。ほぼ同じ位置で建て替えが認められる(ＳＨ15－ａ・ＳＨ15－ｂ)。ＳＨ15－ａは、平面形がほぼ方形で、一辺4.2m、深さ40cmを測る。住居の遺存状況は非常によい。ＳＨ15－ｂに壊されているところを除き、幅15cm程度、深さ５～15cmの周壁溝が全周する。ＳＨ15－ａに伴う主柱穴は確認できなかった。住居の方位は北に対して約27°西に振る。ＳＨ15－ｂは、一辺4.7m、深さ40cmを測る。幅15～20cm、深さ10cm前後の周壁溝が全周する。主柱穴は４基確認した。直径30～60cm、深さ10～25cmを測る。南辺中央で貯蔵穴と思われる土坑ＳＫ196を検出した。住居の方位は北に対して約17°西に振る。

出土遺物としては土師器や鉄器、石杵がある(第86図１～第87図35、第89図81～83・86)。１・２は複合口縁状を呈する壺の口縁部、３・４は二重口縁状を呈する壺の口縁部である。５～７は直口壺の口縁部である。７から予想される体部径は30cm以上と、大型品になる可能性がある。８は有段の口縁を有する壺と考えるが、鼓形器台の可能性もある。内面はナデ調整、外面に縦方向の暗文風のヘラミガキ調整が施される。９～11は小型丸底土器である。11は口縁部を欠損するが、９・10は短い口縁部を有する。ほぼ同形同大で、調整法もほぼ同じである。９は土坑ＳＫ196から出土



第83図　Ａ６地区検出遺構配置図(1/200)



第84図　竪穴式住居跡ＳＨ15実測図

した。12は平底の壺の底部である。13～23は甕である。13は短い口縁部を有する在地系と考えられるもの、14は口縁端部に外傾する面を持つもの、15～23は口縁端部内面が肥厚する、いわゆる布留式の範疇でとらえられるものである。19は磨滅が著しく、口縁部の肥厚が不明瞭である。いずれも体部は基本的に球形を呈し、外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。なお、22は体部外面にハケ調整に先行してタタキ調整が施された痕跡がみられる。14も体部の特徴は布留式甕に準じる。24～30は高杯である。24は大型高杯の杯部で、杯底部中央の充填状況がよくわかる。磨滅が著しいが、ヘラミガキ調整を施す。25～27は高杯杯部である。28～30は高杯杯底部である。いずれも杯底部外面側に直径３～４mm程度の刺突痕が認められる。30は明瞭にヘラミガキ調整を確認できるが、25～29についてはハケ調整を主体とする可能性が高い。31は椀状の杯部をもつ高杯の可能性が高いものである。32はやや低脚で中実の高杯脚部である。33・34は中空の高杯脚部である。外面にハケ調整を施す。35は小型器台の脚部である可能性が高い。81～83は鉄器である。81は先端を欠損する鉈である。残存長12.4cmを測る。82は刀である。83は鉄鏃の茎であろう。86は石杵である。住居の掘削作中に出土した。床面から20cmほど上位で出土したことから、住居の埋没過程で混入したものと考えられる。残存長7.7cm、残存最大径4.8cmを測る。

②竪穴式住居跡ＳＨ103（第85図上）　調査区の中央部、北壁寄りで検出した。竪穴式住居跡ＳＨ15と重複し、ＳＨ103の方が古い。南東隅をＳＨ15に切られ、北半部は調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。一辺5.9m、深さ約20cmを測る。周壁溝は西辺のみに認められ、幅15cm、深さ５cm程度を測る。床面で多数の柱穴を確認したが、主柱穴と判断するには至らなかった。住居の方位はほぼ南北方向である。時期の判断できるような遺物は出土していないが、竪穴式住居跡ＳＨ15よりも古いことから、古墳時代前期の竪穴式住居と考えられる。

③竪穴式住居跡ＳＨ105（第85図下）　調査区の南西隅で検出した。南角が調査区外となるが、平面形は方形を呈すると考えられる。一辺4.9～5.4m、深さ約25cmを測る。周壁溝は確認されなかった。主柱穴は３基確認した。直径60cm前後、深さ20～30cmを測る。住居の方位は北に対し

て約40°東に振る。

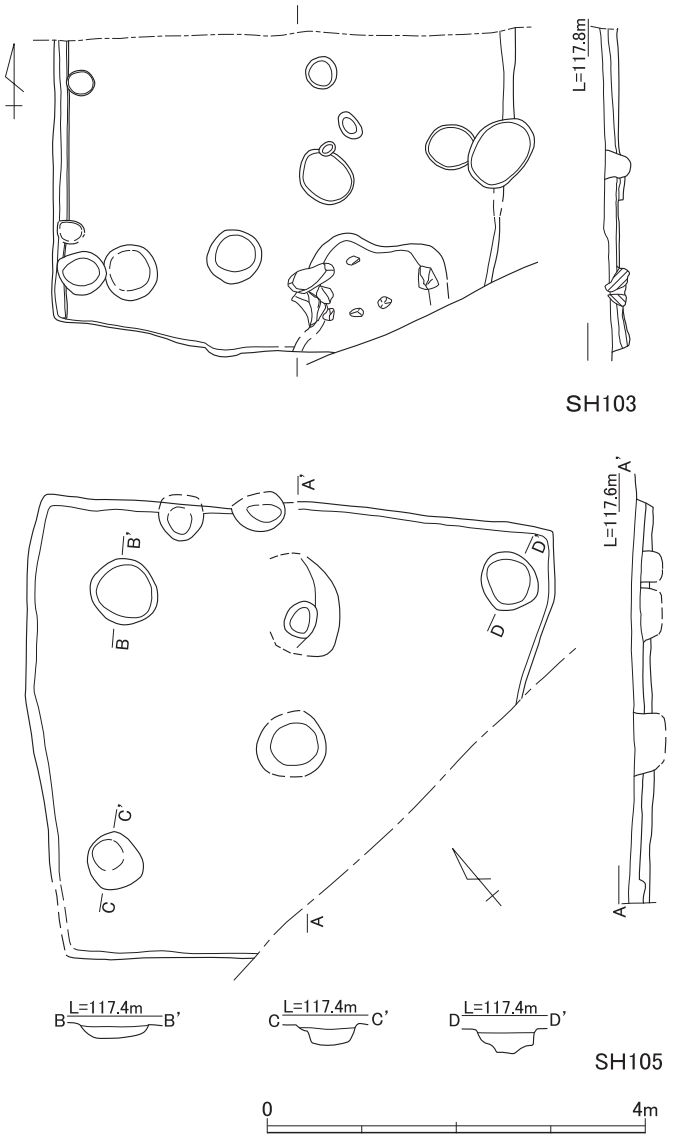
④**不明遺構ＳＸ106**　調査区の西端で検出した。当初、竪穴式住居跡と考えたが、明確な掘形を検出することはできなかった。土坑もしくは自然地形の可能性がある。

出土遺物として土師器や鉄器がある。土器で図示できたのは高杯脚裾部の１点のみである（第87図36）。また鉄器として、図示しなかったが鉄鏃が１点出土している。

（２）奈良時代の遺構・遺物

明らかに奈良時代といえる遺構はほとんどない。ただ、奈良時代の遺物が一定量出土しているので、当該期の遺構が存在したと考えられる。

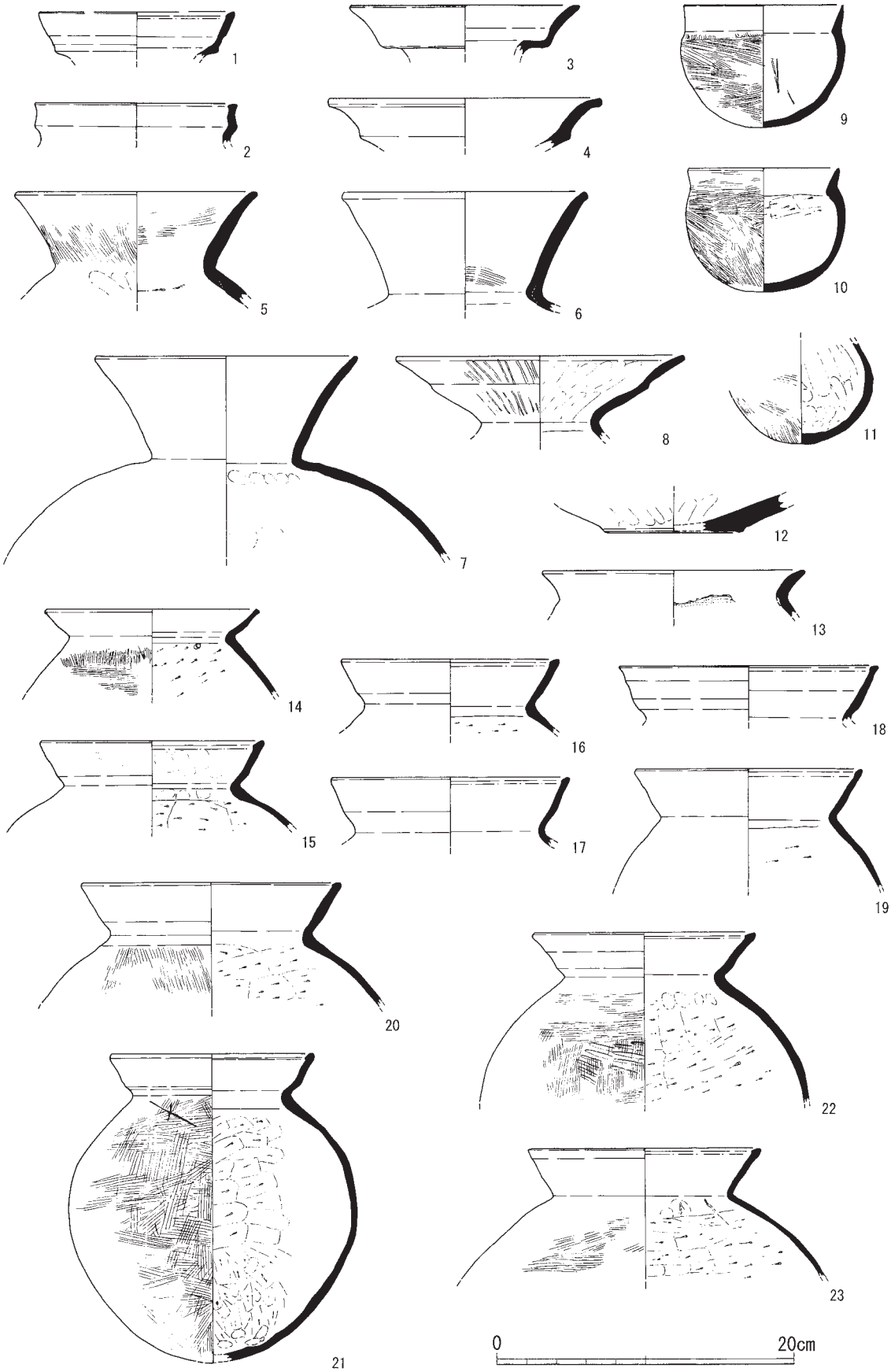
①**土坑ＳＫ34**　調査区の西半部で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、全長1.5m、幅0.6m、深さ約40cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第87図37・38）。37は杯Ｂ蓋、38は杯である。



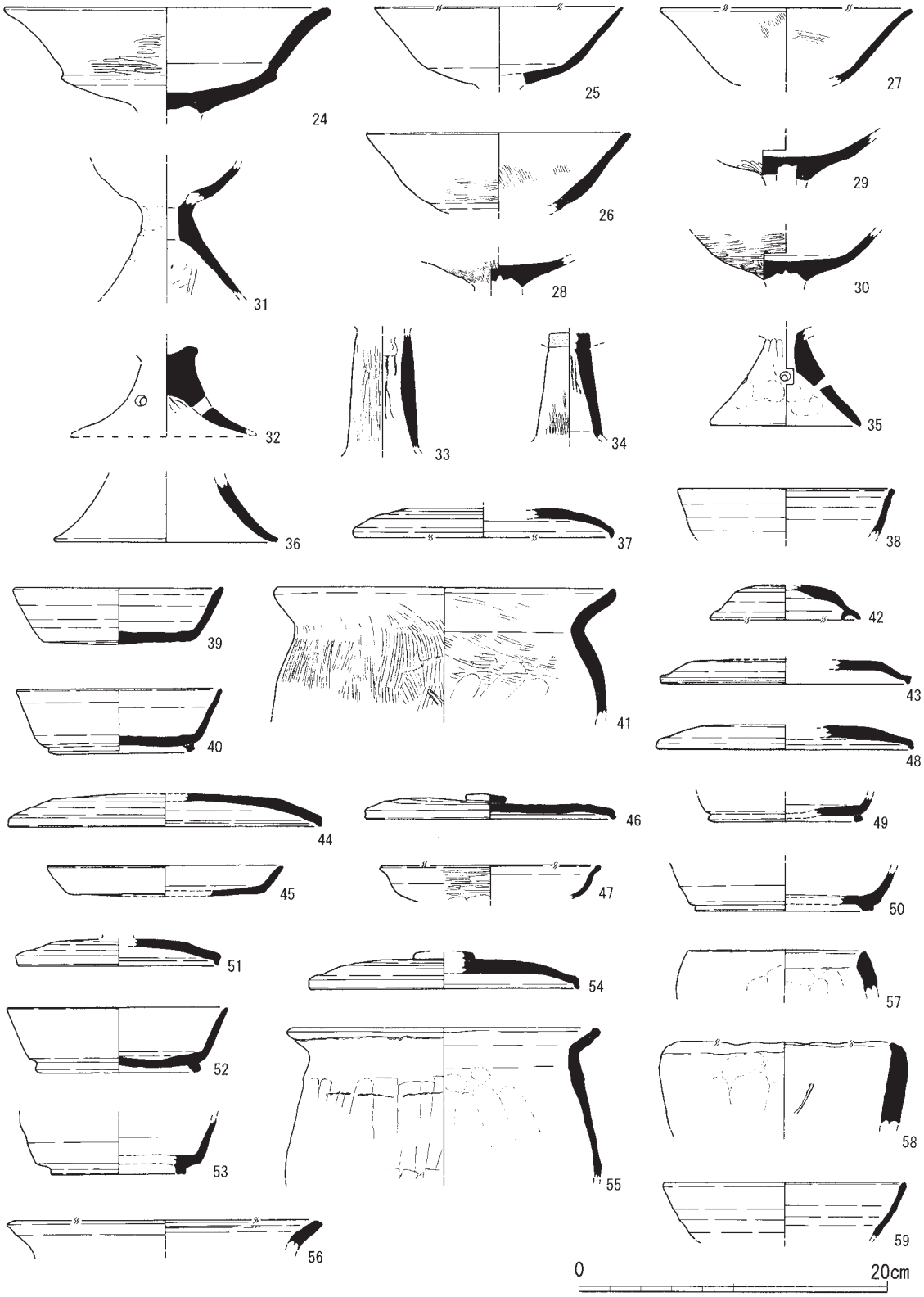
第85図　竪穴式住居跡ＳＨ103・105実測図

②**柱穴群**　Ａ６地区では多数の柱穴を検出した。これらは掘立柱建物跡ＳＢ01として復原したもの以外は、建物や柵としてのまとまりを確認することはできなかった。

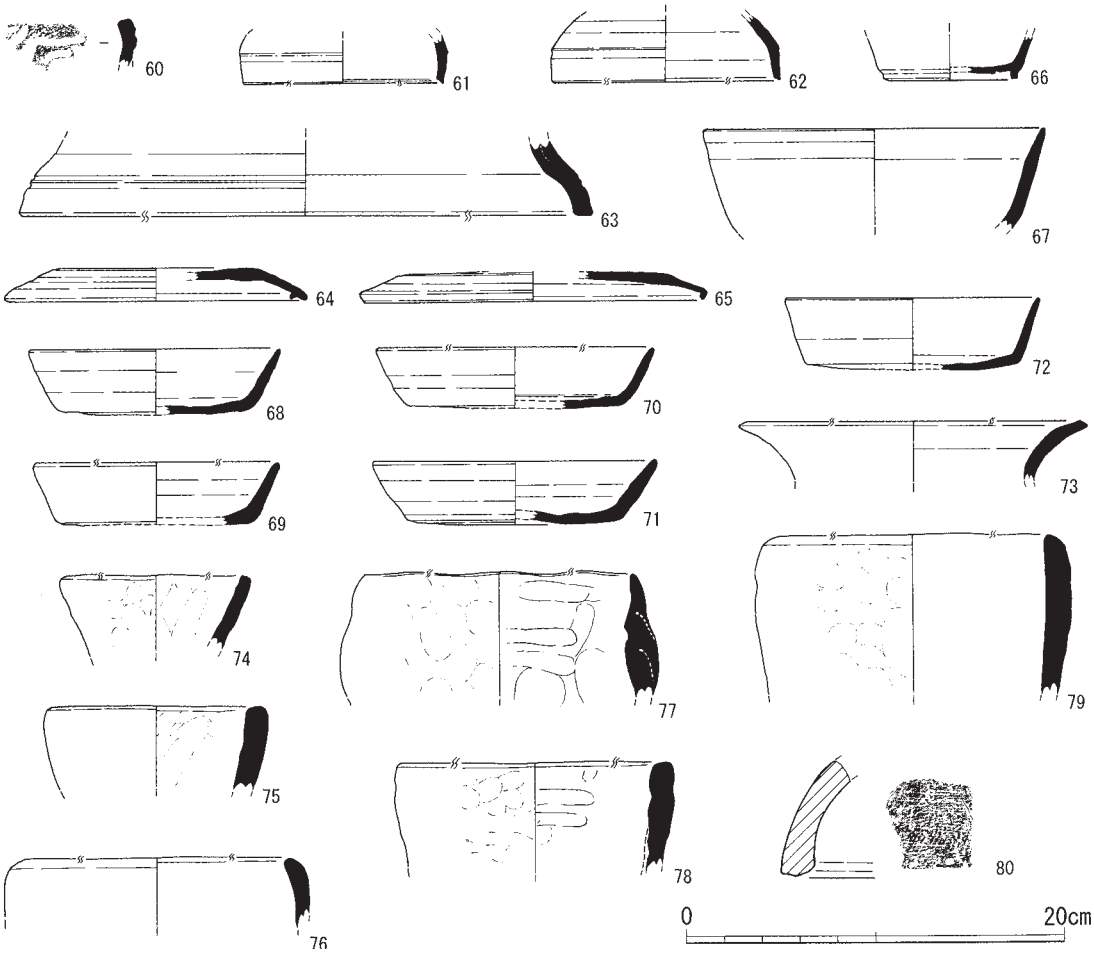
なお、柱穴からは比較的多数の遺物が出土した（第87図39～59、第89図84）。柱穴ＳＰ１から須恵器杯Ａ（39）が出土した。柱穴ＳＰ16からは須恵器杯Ｂ（40）、土師器甕（41）が出土した。柱穴ＳＰ27からは須恵器杯Ｇ蓋（42）・杯Ｂ蓋（43）が出土した。柱穴ＳＰ13からは須恵器杯Ｂ蓋（44）・皿Ａ（45）が出土した。柱穴ＳＰ137からは須恵器杯Ｂ蓋（46）、土師器杯Ａ（47）が出土した。47は外面にヘラミガキ調整を施す。柱穴ＳＰ182からは須恵器杯Ｂ蓋・杯Ｂ（48～50）が出土した。柱穴ＳＰ25からは須恵器杯Ｂ蓋（51）が出土した。柱穴ＳＰ43からは須恵器杯Ｂ（52）と鉄器（84）が出土した。84は刀子の茎と思われる。柱穴ＳＰ28からは須恵器杯Ｂ（53）が出土した。柱穴ＳＰ156からは須恵器杯Ｂ蓋（54）が出土した。柱穴ＳＰ46からは土師器甕（55）が出土した。外面にヘラ状の工具で強く粘土をケズリ取ったような痕跡が認められる。柱穴ＳＰ170・ＳＰ29からは製塩土器（57・58）が出土した。柱穴ＳＰ32からは須恵器椀の口縁部と思われれる破片（59）が出土した。42



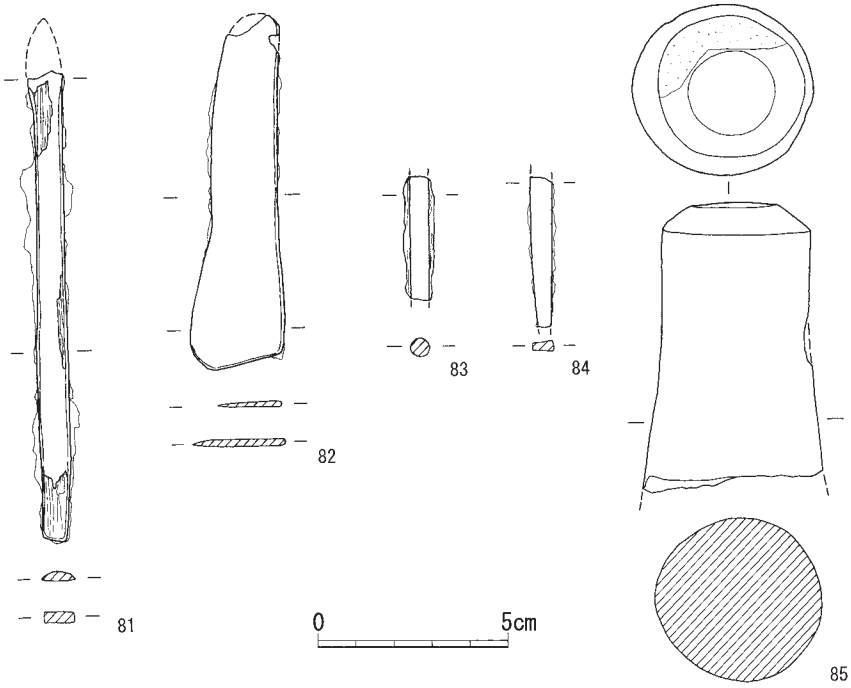
第 86 図　A 6 地区出土遺物実測図（1）



第 87 図　A 6 地区出土遺物実測図（2）



第 88 図　Ａ６地区出土遺物実測図（３）



第 89 図　Ａ６地区出土遺物実測図（４）

が飛鳥時代、59は平安時代のものと思われるほかは、おおむね奈良時代のものである。42は43と同じ柱穴から出土しているので混入であろう。

（３）包含層出土遺物

Ａ６地区では、遺構面の精査中や黒褐色粘質土の掘削中などにも遺物が出土した。これらの遺物としては、縄文土器、須恵器、土師器、製塩土器、瓦などがある（第88図60～80）。

60は縄文土器の破片である。後期のものであろうか。61・62は須恵器杯蓋である。ともに口縁端に面を持ち、口縁部と天井部の境には緩いながらも稜を有する。陶邑編年のＭＴ15～ＴＫ10型式に相当すると考える。63は須恵器器台の脚端部であろうか。63は古墳時代のものであろう。64・65は須恵器杯Ｂ蓋である。64は内面にかえりを有する。66は須恵器杯Ｂの底部である。67は大型の須恵器杯の口縁部である。68～72は須恵器杯Ａである。口径13cm前後、器高3.5cm前後のものが多い。73は土師器甕の口縁部であろう。74～79は製塩土器である。Ａ６地区ではＡ５地区などにくらべると製塩土器の出土例が多い。80は丸瓦である。内面に布目圧痕が認められる。

（筒井崇史）

17.　Ａ１地区の調査

Ａ地区で最も南に設定した調査区で、Ａ６地区の南約30mに位置する。農道を挟んで、東側にはＣ１地区が位置する。古墳時代や奈良時代の遺構・遺物を検出した（第90図）。遺構面までの堆積土が比較的厚く、奈良時代から中世にかけての遺物包含層を形成していた。

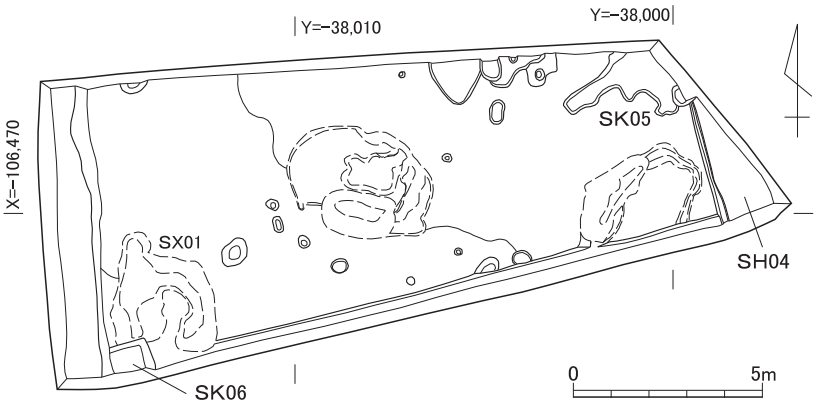
（１）古墳時代の遺構・遺物

竪穴式住居跡１基、土坑１基のほか、風倒木痕から当該期の遺物が出土した。

①竪穴式住居跡ＳＨ04　調査区の東端で検出した。西辺を検出したのみで、規模等は不明である。深さは約10cmである。幅14～26cm、深さ５cm前後の周壁溝がめぐる。出土遺物としては土師器布留式甕などがあるが、小片のため図示していない。

②土坑ＳＫ06　調査区の南西隅で検出した。土坑の一部を検出したのみで、全容は不明である。竪穴式住居跡の可能性もあるが、周壁溝は未検出である。深さは約20cmである。出土遺物としては、土師器甕（第91図１）がある。布留式の甕であるが、やや厚ぼったい個体である。

③その他　風倒木痕（ＳＸ01）を掘削したとこ



第90図　Ａ１地区検出遺構配置図（1/200）

ろ、土師器小型丸底土器（第91図２）の体部片が出土した。風倒木の時期を示すと考えられる。外面全体にヘラケズリ調整を施す。

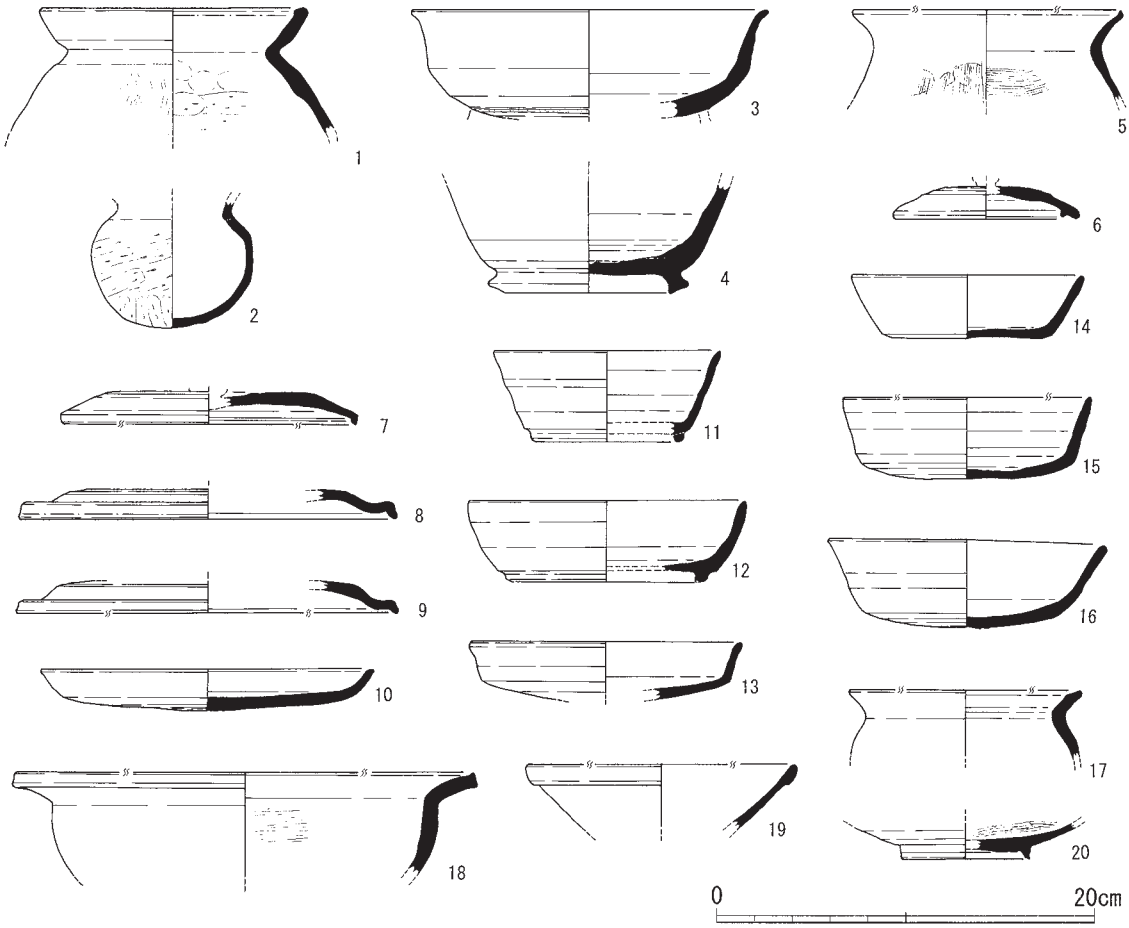
（２）奈良時代の遺構・遺物

①土坑ＳＫ05　調査区の北東隅で検出した。不整形な平面形を呈する。深さは５～10cmである。出土遺物として須恵器杯ＦまたはＬ、須恵器壺底部、土師器甕（第91図３～５）などがある。

（３）包含層出土遺物

第91図６～20は遺物包含層や遺構面の精査中に出土した土器である。奈良時代の須恵器が多いが、飛鳥時代の須恵器や平安時代の無釉陶器、中世の白磁椀などがある。６～16は須恵器である。６は内面にかえりを有する杯Ｇ蓋である。７～９は杯Ｂ蓋である。10は皿Ａである。11・12は杯Ｂである。13～16は杯Ａである。ただし13は皿の可能性がある。17は小型の土師器甕である。口縁部内面に２条の強いナデの痕跡が認められる。いわゆる「青野型」甕[注9]の特徴を有するものと考えられる。18は土師器鍋である。19は白磁椀である。20は須恵質で、内面にミガキ調整を施し、高台は削り出し高台であることから、いわゆる無釉陶器椀と考えられる。

（筒井崇史）



第91図　Ａ１地区出土遺物実測図

18. Ｂ１地区の調査

Ａ３地区の西約60mに設定した調査区である。対象地は複数の水田からなるため、水田ごとに枝番号を付した(Ｂ１－１～４地区)。地形的には南西に向かって低くなっており、調査地の南側ほど黒褐色粘質土(黒ボク層)が厚く堆積し、その上面で中世の遺構を検出した。一方、北側では、地山面直上で、中世や平安時代の遺構を検出した(第94・95図)。

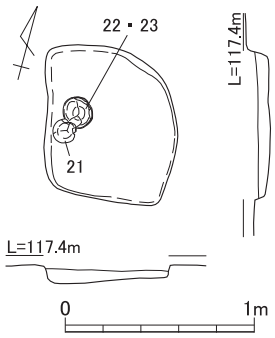
また、黒褐色粘質土を除去して土坑や柱穴を検出したが、形態的に不明瞭なものが多く、建物や柵としてのまとまりは認められなかった。また、時期を示すような遺物もほとんど出土しなかった。

(１)平安時代の遺構・遺物

確実に平安時代の遺構といえるのは土坑１基のみである。

①**土坑ＳＫ115**(第92図)　Ｂ１－２地区の東辺中央付近で検出した。平面形は一辺0.7～0.8mを測るやや不整形な方形を呈する。深さは15cm程度である。土坑から土師器皿２点と黒色土器椀１点が出土した(第98図21～23)。22と23は重なった状態で出土した。

21･22は土師器皿である。器壁は薄く、口縁部は「て」字状を呈する。胎土にクサリ礫を含む。23は黒色土器Ａ類椀である。見込みと内面に、やや隙間のあるヘラミガキが施され、口縁内端部には沈線がめぐらされる。体部外面は指押さえのみで、特に調整は施されない。10世紀中葉に位置付けられる。



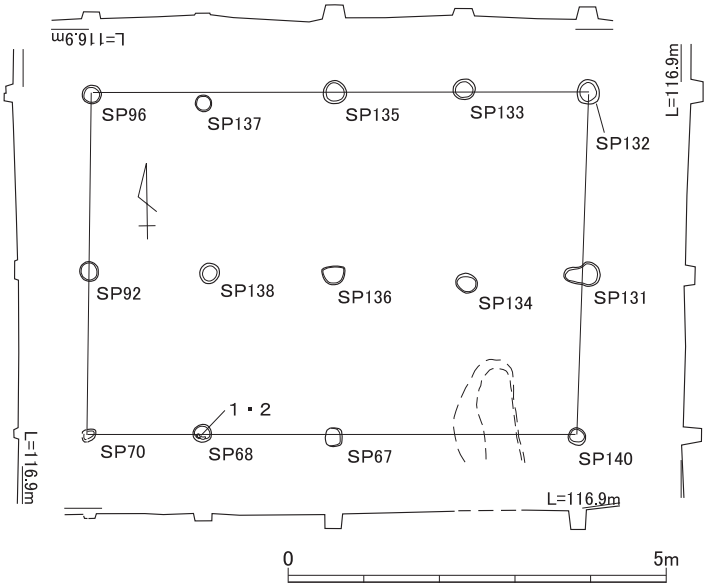
第92図　土坑
ＳＫ115実測図

(２)中世の遺構・遺物

検出した遺構としては、掘立柱建物跡２棟、柵１条、土坑２基以上、柱穴多数がある。

①**掘立柱建物跡ＳＢ01**(第93図)　Ｂ１－４地区の北半部で検出した。桁行４間(約6.5m)、梁行２間(約4.6m)の東西方向の総柱の建物である。柱間は、桁行が1.5～1.7m、梁行が2.2～2.4mと、梁行の方が少し長い。柱筋や柱間はやや不揃いである。建物の方位は北に対して１°東に振る。

出土遺物としては土師器や瓦器がある(第98図１～５)。１は土師器皿である。大きな底部から口縁部が短く立ち上がる。口縁端部はやや屈曲して直立気味に終わる。２～５は丹波型瓦器椀である。い



第93図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

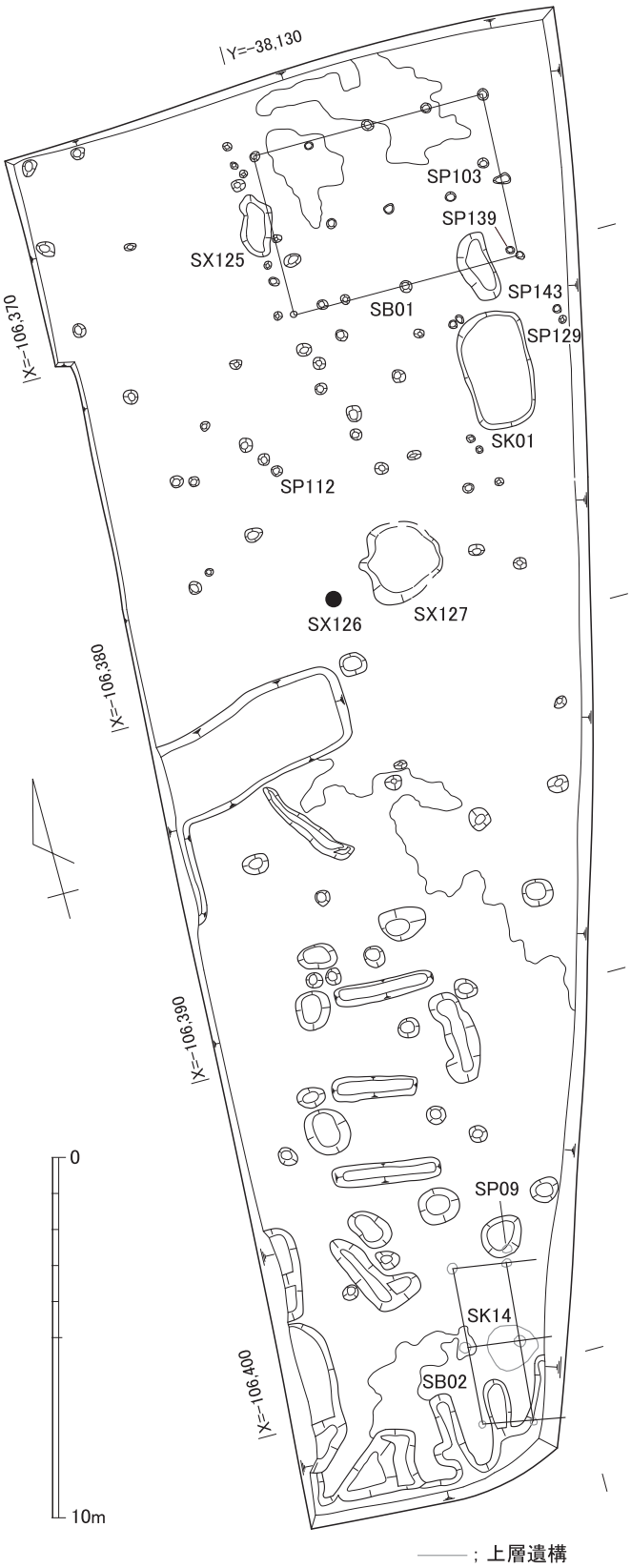
ずれも磨滅が著しく、ヘラミガキなどは不明であるが、13世紀前半頃までにおさまると思われる。１・２は柱穴ＳＰ68から、３は柱穴ＳＰ136から、４・５は柱穴ＳＰ140から出土した。

②**掘立柱建物跡ＳＢ02**　Ｂ１－４地区の南端付近で検出した。桁行２間（約4.5m）、梁行１間以上（約1.4m以上）の総柱の建物である。柱穴のうち１基は後述する土坑ＳＫ14と重複しており、ＳＢ02の方が新しい。

③**土坑ＳＫ01**（第96図上）　Ｂ１－４地区の北半部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長3.3m、幅1.85m、深さ約20mを測る。埋土から細片化した土器が出土した。また検出面で、鉄刀１点が出土した。

出土遺物としては土師器や瓦器、須恵器、瓦質土器、鉄刀などがある（第98図25～44、第97図51）。25～30は土師器皿である。いずれも口縁部にヨコナデが施される。32～37は丹波型瓦器椀である。内面の圏線ミガキの比較的密なものから大きく間隔が開いたものまでがみられる。38～42は瓦質土器羽釜である。胴部内面は横方向の粗いハケもしくは板ナデ調整であるが、38のみは縦方向の粗いハケ調整がみられる。42は口縁部外面に２条の沈線がめぐらされる。43・44は東播系須恵器鉢である。44は淡紫赤色を呈する。51はＳＫ01検出面で出土した鉄刀である。残存長16.1cm、幅1.2cmを測る。

④**土坑ＳＫ14**（第96図下）　Ｂ１－４地区の南端付近で検出した。平面形は



第94図　Ｂ１－４地区検出遺構配置図（1/200）

第 95 図　Ｂ１－１～３地区検出遺構配置図（1/200）

不整形な楕円状を呈し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ10～15cmを測る。

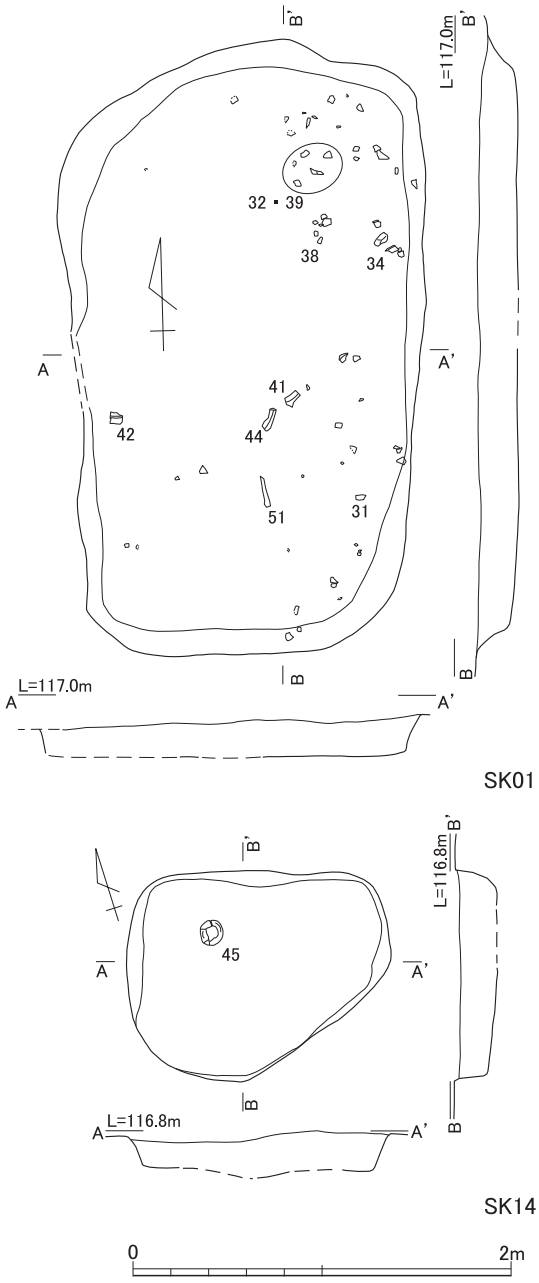
出土遺物として土師器皿１点がある（第98図45）。内面は底部中心部付近までヨコナデが施されるが口縁部内面の一部はヨコナデが弱く、粗いハケ調整が残っている。

⑤柱穴群　柱穴は調査区全体において多数検出したものの、建物や柵としてのまとまりはあまり認められなかった。

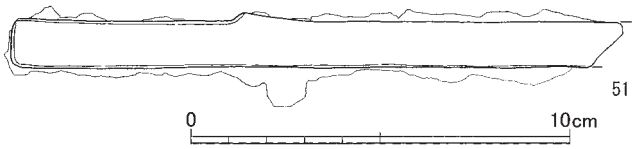
出土遺物としては土師器や瓦器などがある（第98図６～20）。６はＢ１－４区柱穴ＳＰ09から出土した「て」字状口縁の土師器皿である。７～12は丹波型瓦器椀である。８は内面に粗い圏線ミガキ、見込みにジグザグ状暗文が施されているが、他は磨滅が著しく不明である。７・８はＢ１－４区柱穴ＳＰ103から、９はＢ１－４区柱穴ＳＰ139から、10はＢ１－４区柱穴ＳＰ129から、11はＢ１－４区柱穴ＳＰ112から、12はＢ１－４区柱穴ＳＰ143から出土した。13～15はＢ１－２区柱穴ＳＰ12から出土した土師器皿である。15は口縁部のヨコナデが施されない。16～19はＢ１－２区柱穴ＳＰ06から出土した土師器皿である。18・19は薄手で直線的に開く口縁部をもつものである。20はＢ１－２区柱穴ＳＰ118から出土した黒色土器Ｂ類椀である。見込みに密なジグザグ状ヘラミガキが直交する２方向に施されたのち、体部内外面に密なヘラミガキが施される。口縁内端部には沈線がめぐらされる。

⑥土坑ＳＫ169　Ｂ１－２区の北西隅で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.2m、深さ25cmを測る。丹波型瓦器椀が出土した（第98図24）。磨滅により調整は不明であるが、断面三角形の高い高台をもつ。

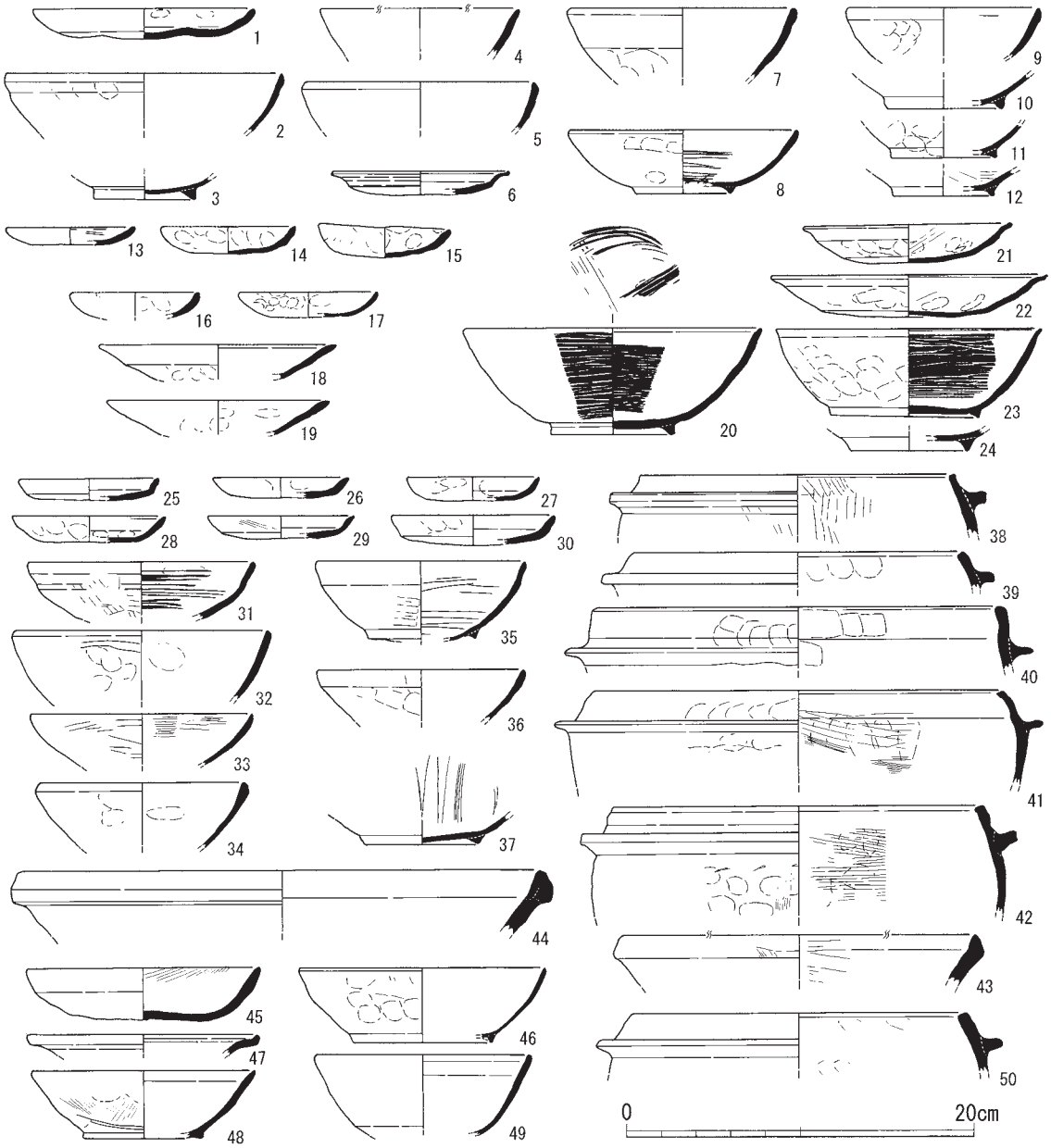
⑦不明遺構ＳＸ125　Ｂ１－４地区の掘立柱建物跡ＳＢ01の西側に接して検出した。不整形な形状を呈する。土器が少量出土した（第98図46・47）。46は丹波型瓦器椀である。内面にやや粗い圏線ミガ



第96図　土坑ＳＫ01・14実測図



第97図　Ｂ１－４地区出土鉄器実測図



第98図　Ｂ１地区出土遺物実測図

キが施される。47は古瀬戸折縁皿である。

⑧不明遺構ＳＸ126　Ｂ１－４地区の中央部で検出した。明確な遺構の形状を確認することはできなかったが、丹波型瓦器椀が出土した地点である（第98図48・49）。48の外面には粗いハケ調整がみられる。磨滅が著しく、ヘラミガキは失われている。

⑨不明遺構ＳＸ127　Ｂ１－４地区の中央部で検出したが、風倒木の可能性がある。瓦質土器羽釜（第98図50）が出土した。砂粒を多く含む粗い胎土で、焼成は甘い。

（筒井崇史・森島康雄）

19. 116トレンチの調査

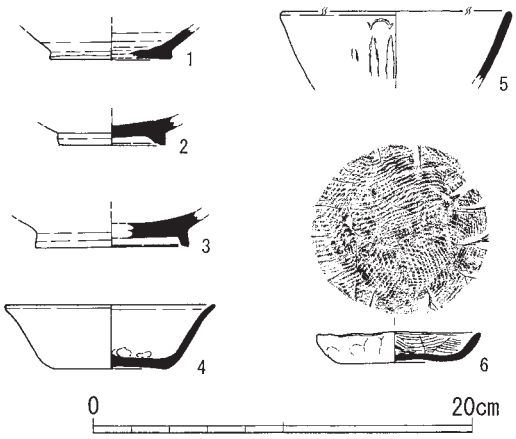
Ｂ１地区の北西側、東西方向に伸びる用水路部分に設定したトレンチである。調査区は西に向かって傾斜しており、西側では暗茶褐色土や黒褐色土が堆積していた。遺構は上層と下層の２面で検出した（第99図）。

上層遺構としては溝２条、土坑１基などを検出した。このうち、東端で南北方向の溝ＳＤ01を検出した。幅２ｍ、深さ40cmを測る。規模等から当時の区画溝の可能性がある。

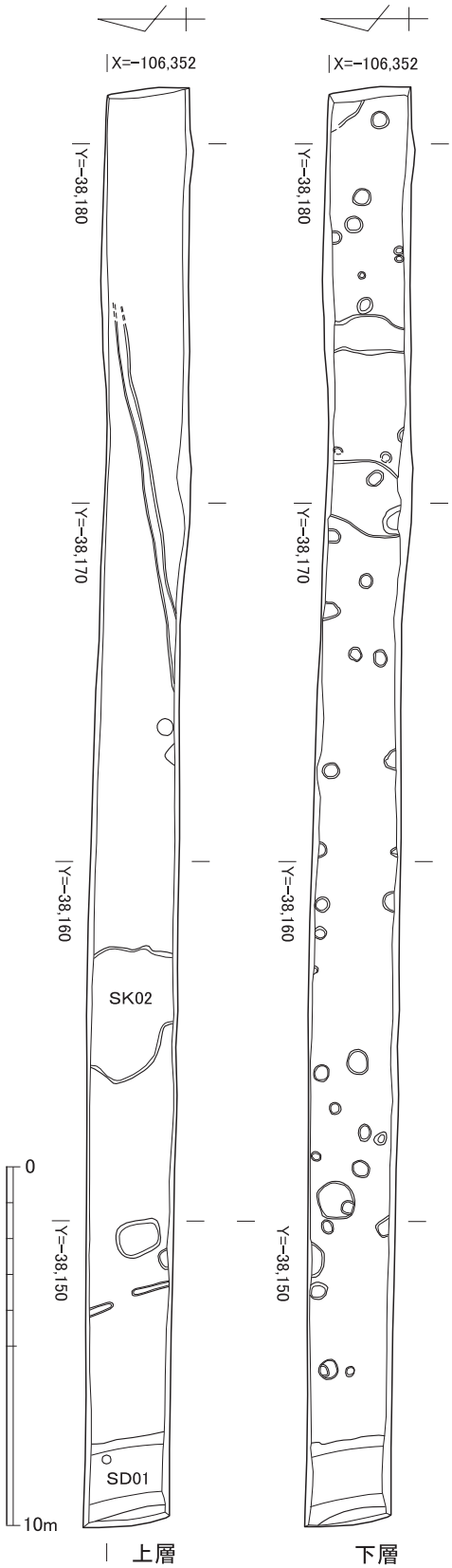
下層遺構としては時期不明の柱穴を多数検出した。

遺物は重機掘削中や包含層から少量出土した（第100図１～６）。１は底部に糸切り痕の残る須恵器椀である。２は高台を削り出す緑釉陶器椀である。３も削り出し高台と考えられる灰釉陶器の椀である。４は釉薬が緑灰色に近い発色をするが、白磁杯である。５は小破片であるが、青磁椀である。６は内面にハケ調整が明瞭に残る土師器皿である。

（伊野近富・筒井崇史）



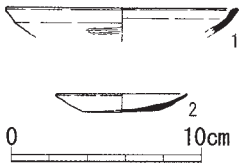
第100図　116トレンチ出土遺物実測図



第99図　116トレンチ
検出遺構配置図（1/200）

20. 132～134トレンチの調査

Ｂ１地区から南に伸びる用水路部分に設定したトレンチである。北部と南部の２つのトレンチに分かれており、北部のほうが40cmほど高い。耕作土と床土を除去するとすぐに地山であった。柱穴を40基以上検出したものの、建物や柵として復原することはできなかった(第102図)。



第101図　132～134トレンチ出土遺物実測図

出土遺物としては須恵器や土師器がある(第101図１・２)。遺構に伴うものではなく、精査中に出土した。１はヘラミガキ調整が認められる須恵質の土器で、無釉陶器の皿と思われる。２は土師器皿である。

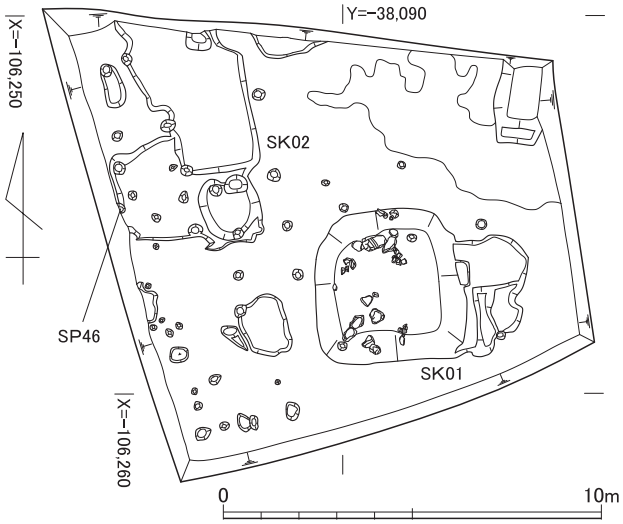
(伊野近富・筒井崇史)

21. Ｂ３地区の調査

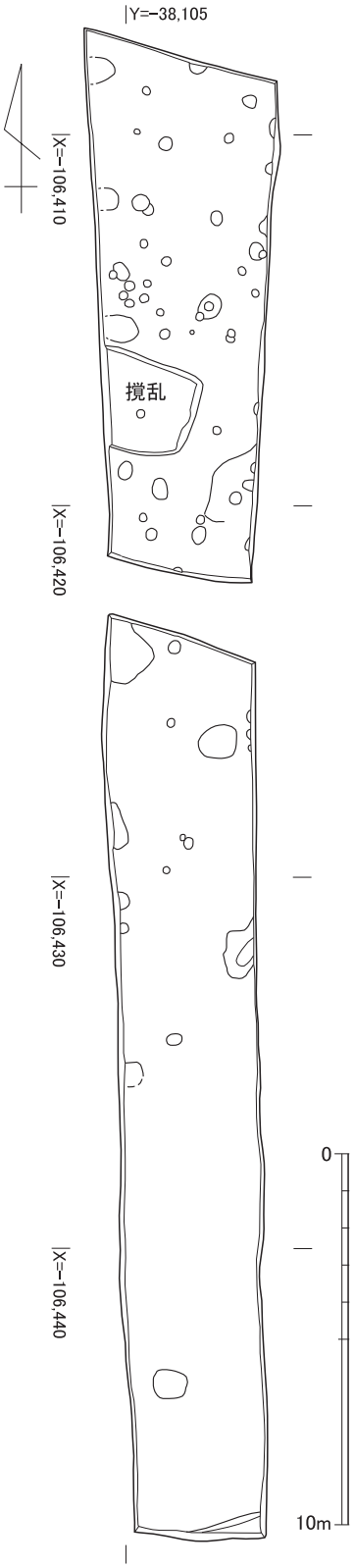
Ｂ１地区の北約100mに設定した調査区である。耕作土・床土を除去すると、おおむね地山となる。この上面で遺構を検出した。

検出した遺構としては、土坑２基以上、柱穴多数がある。柱穴は建物や柵として復原することはできなかった(第103図)。遺構はおおむね中世に位置づけられる。

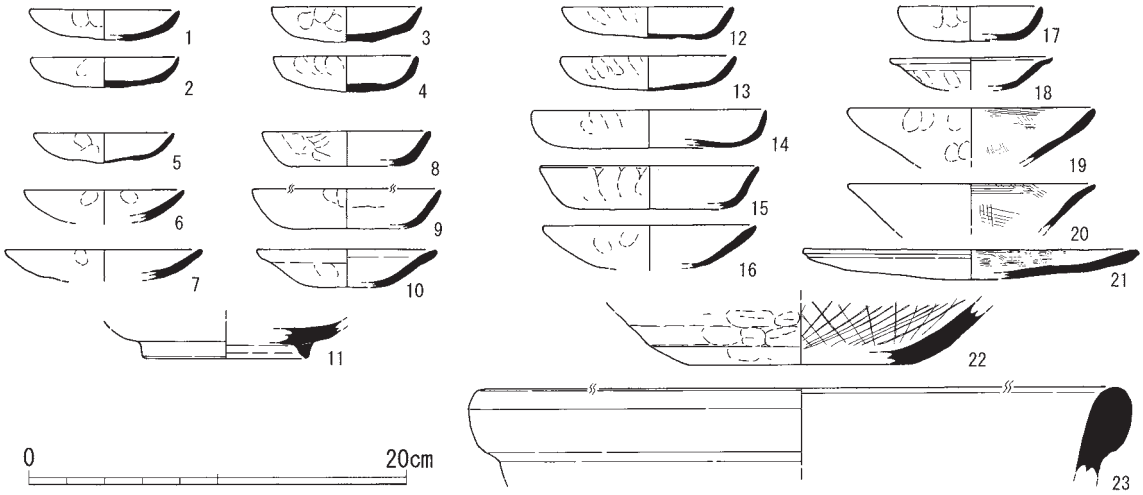
①土坑ＳＫ01　調査区の中央やや南寄りで検出した。平面形は隅丸方形で、一辺3.8～4.1m、深さ35cm程度を測る。出土遺物としては土師器や青磁がある(第104図５～11)。５～10は土師器皿である。７～９は口縁部外面のヨコナデが施されない。11は



第103図　Ｂ３地区検出遺構配置図（1/200）



第102図　132～134トレンチ検出遺構配置図（1/200）



第104図　Ｂ３地区出土遺物実測図

青磁皿である。

②土坑ＳＫ02　調査区の北西隅で検出した。平面形は不整形で、長方形を呈する複数の土坑が重複したような形状を呈する。したがって、複数の土坑が切り合っている可能性が高い。長軸6.0m、幅2.8～4.0m、深さ10～25cmを測る。出土遺物としては土師器や瓦質土器、国産陶器などがある（第104図12～23）。12～21は土師器皿である。16・18は口縁部のヨコナデが明瞭で整った器形であるが、他は口縁部外面のヨコナデが施されず、歪みが大きい。19・20は内面に粗いハケ調整のみられるタイプである。21は口縁部が肥厚するのみでほとんど立ち上がらない。内面に粗いハケ調整がみられる。22は瓦質土器すり鉢である。内面に斜交するヘラ描きによるすり目が施される。外面は横方向のヘラケズリである。この遺構から出土した同種の破片がＢ５地区ＳＫ46出土のもの（第109図33）と接合した。22とはすり目の密度が異なることから別個体と思われる。23は備前焼甕である。器表面は光沢のある赤茶褐色、破断面は淡紫茶色を呈する。このほか、備前焼すり鉢片が出土している。

③柱穴ＳＰ46　調査区の西端、トレンチ壁面に重複して検出した。直径30cm、深さ15cmの円形を呈する小規模な柱穴である。土器は重なったような状態で出土した（第104図１～４）。いずれも土師器皿で、口縁部外面のヨコナデが施されず、指掌痕が残る。色調は１・２が茶灰色、３・４が灰橙色を呈する。

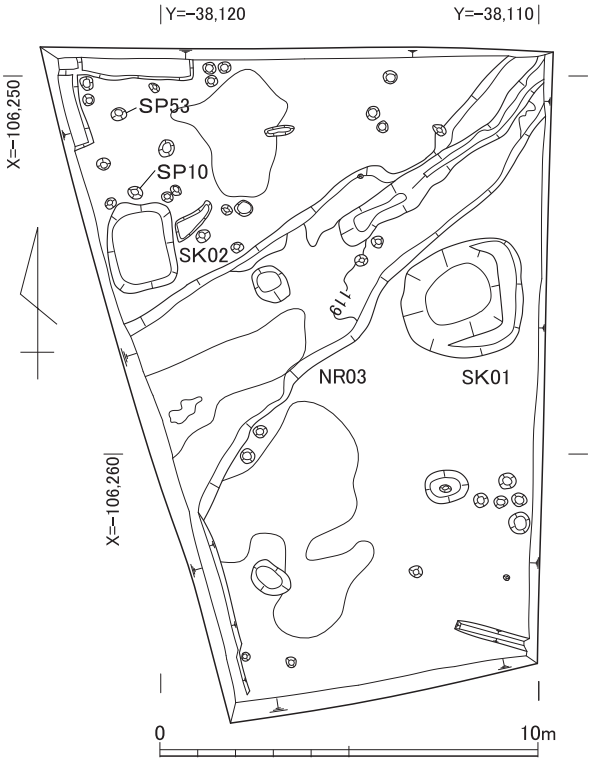
（筒井崇史・森島康雄）

22.　Ｂ４地区の調査

Ｂ３地区の西約10mに設定した調査区である。耕作土・床土を除去すると、耕作に伴うと思われる素掘り溝を多数検出した。これらを除去すると、おおむね地山となる。遺構はこの地山上で検出した（第105図）。検出した遺構としては、自然流路１条、土坑２基のほか、土坑や柱穴が多数ある。遺構は平安時代ないし中世に位置づけられる。

（１）平安時代の遺構・遺物

①自然流路ＮＲ03　調査区を北東から南西に向かって横断する自然流路である。検出長13.7m、幅1.9～5.5m、深さ25～70cmを測る。埋土は黒色粗砂礫混じり粘質土や暗褐色粗砂礫などである。埋土から少量ながら遺物が出土した（第106図１～３）。



第105図　Ｂ４地区検出遺構配置図（1/200）

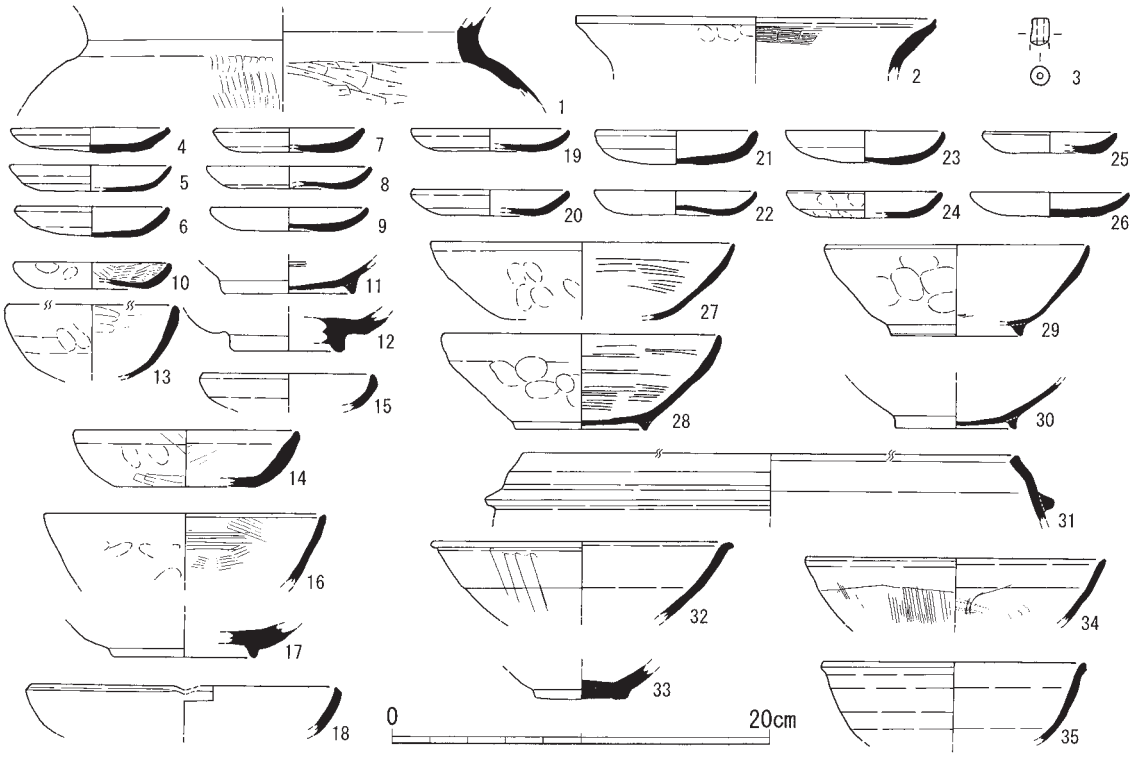
（２）中世の遺構・遺物

①土坑ＳＫ01　調査区の東半部、やや北寄りで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺2.9～3.2m、深さ約40cmを測る。出土遺物としては土師器・瓦器・国産陶器などがある（第106図13～18）。13・14は土師器皿である。口縁部はヨコナデ調整が施されない。15は瓦器皿である。ヘラミガキは認められない。口縁端部外面には面取りが施される。16は土師器椀である。内面に粗いハケ調整が施され、口縁部内端部には面取りが施される。17は無釉陶器椀である。内面は密なヘラミガキ、外面は粗いヘラミガキが施される。18は古瀬戸卸目皿である。口縁部外面は無釉である。

②土坑ＳＫ02　調査区の西半部、やや北寄りで検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、一辺1.8～2.3m、深さ20cmを測る。出土遺物としては土師器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器などがある（第106図19～32）。19～26は土師器皿である。口縁部はヨコナデ調整が施され、口縁端部は外面に面取りが施されるものと尖り気味に納めるものがある。27～30は瓦器椀である。31は瓦質土器羽釜である。32は同安窯系青磁椀である。口縁端部は外反し、体部外面に幅広の粗い櫛目文が施される。

③柱穴群　Ｂ４地区では約30基の柱穴を検出したが、建物や柵として復原できるものはなかった。ただ、これらの柱穴からは土師器や瓦器などが出土した（第106図４～９・11）。４～９は柱穴ＳＰ10から出土した土師器皿である。口縁部はヨコナデ調整が施され、口縁端部は外面に面取りが施されるものと尖り気味に納めるものがある。11は柱穴ＳＰ53から出土した丹波型瓦器椀である。内面に密な圏線ミガキが施される。

④その他の遺物　素掘り溝から出土した遺物として、土師器皿などがある（第106図10）。口縁部はヨコナデ調整が施されず、内面には粗いハケ調整、外面は指掌痕がみられる。第106図33～35は包含層から出土した。33は古瀬戸平椀である。高台は削り出し輪高台である。34・35は青磁椀である。34は同安窯系で外面に縦方向の細かい櫛目文、内面には櫛描きのジグザグ状点描文が施される。35は口縁部がわずかに外反する無文の椀である。　（筒井崇史・森島康雄）



第106図　Ｂ４地区出土遺物実測図

23.　Ｂ５地区の調査

Ｂ４地区の西約15mに設定した調査区である。耕作土･床土を除去するとおおむね地山となる。遺構は地山上で検出した。検出した遺構としては溝１条、土坑４基、柱穴多数がある（第107図）。遺構はおおむね中世に位置づけられる。

（１）中世の遺構・遺物

①溝ＳＤ61（第108図）　調査区の南端で検出した。検出長3.0m、幅0.8m、深さ0.9～1.0mを測る。溝の断面形は逆台形を呈することから、Ｂ４地区で検出したような自然流路ではなく、人工的な遺構と考える。溝底に一辺30～40cmほどの角礫を検出した。溝の用途については、検出範囲が狭く、不明な点が多いが、区画溝や基幹水路のようなものと考える。

出土遺物としては土師器や輸入陶磁器・国産陶器などがある（第109図12～25）。12～18は土師器皿である。13はヘソ皿である。16～18は口縁端部が外折するタイプで、18は粗製で内面に粗いハケ調整が残る。19は白磁椀である。20は青磁筒形香炉である。21～24は蓮弁文の青磁小椀である。25は備前焼甕である。

②土坑ＳＫ15　調査区の北端で検出した。平面形はやや楕円形を呈し、東側を土坑ＳＫ14に切られる。長軸0.8m以上、短軸0.7m、深さ35cmを測る。出土遺物として土師器皿がある（第109図26・27）。26は口縁部外面のヨコナデが弱く指掌痕が残る。

③土坑ＳＫ39　調査区の東辺で検出した。遺構の南東部分は調査区外に広がるが、平面形はやや不整形な長方形を呈する。全長3.7m、幅1.5～2.1mを測るが、深さはわずかに５cmと、非常に浅い。土坑内から多数の角礫が、無造作な状態で出土しており、埋没過程で廃棄等されたもの

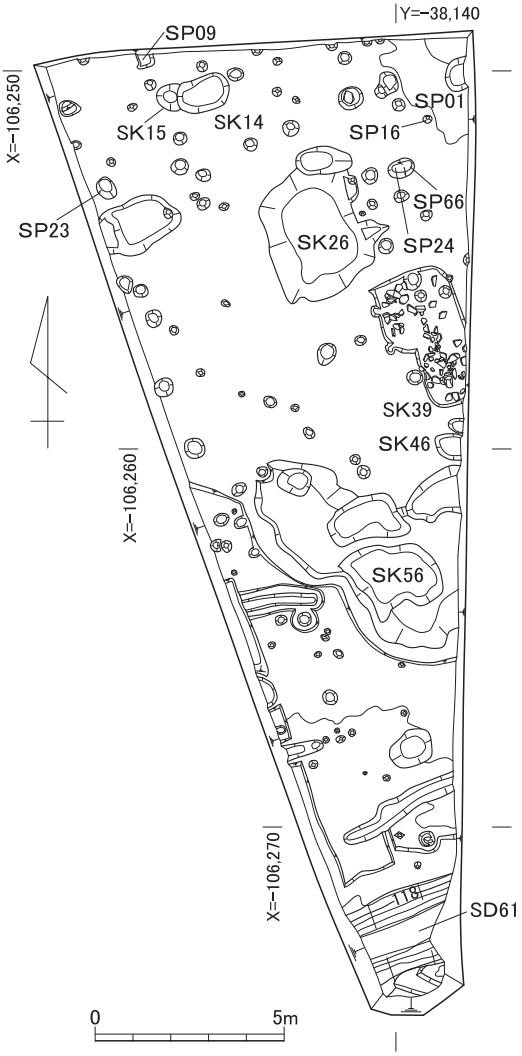
と考えられる。出土遺物として土師器や瓦質土器がある（第109図28・29）。28は土師器皿である。29は瓦質土器すり鉢である。内面は横方向の粗いハケ調整の後、細いヘラ描きによるすり目が施される。内面の下半は使用による磨滅でハケ調整とすり目が失われている。外面は指押さえで調整され、底部付近に横方向のヘラケズリ、口縁端部に強いヨコナデが施される。

④**土坑ＳＫ46**　調査区の東辺で検出した。遺構の東半部は調査区外に広がるが、平面形は楕円形を呈する。長軸0.7m以上、短軸0.6m、深さ10～15cmを測る。出土遺物として土師器や瓦質土器などがある（第109図30～33）。30～32は土師器皿である。30は口縁部外面のヨコナデが認められず、成形時の指掌痕がみられる。31・32は内面にヘラ状工具の痕跡がみられる。33は瓦質土器すり鉢である。29と同種であるが別個体と考えられる。Ｂ３地区ＳＫ02出土の破片と接合した。

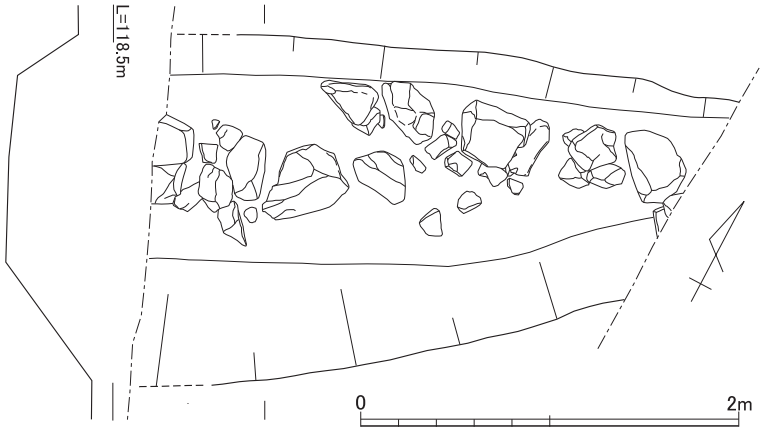
⑤**土坑ＳＫ26**　調査区の北半部、中央付近で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺は2.2～3.2m、深さ35cm前後を測る。出土遺物として土師器や山茶碗などがある（第109図34～38）。34～37は土師器皿である。35・36は口縁端部外面のヨコナデが不明瞭で、指掌痕がみられる。38は山茶碗である。内面は使用により極めて平滑になっている。

⑥**土坑ＳＫ56**　調査区のほぼ中央で検出した。平面形は不整形で、土坑の底面も一定にならないことから、多数の土坑が繰り返し掘削された結果と判断した。用途等は明らかでないが、粘土採掘のための土坑である可能性もある。

⑦**柱穴群**　Ｂ５地区では多数の柱穴を検出したが、建物や柵としては復原できなかった。ただ、これらの柱穴からは土師器などが出土した（第109図１～11）。１～４は柱穴ＳＰ01から出土した土師器皿



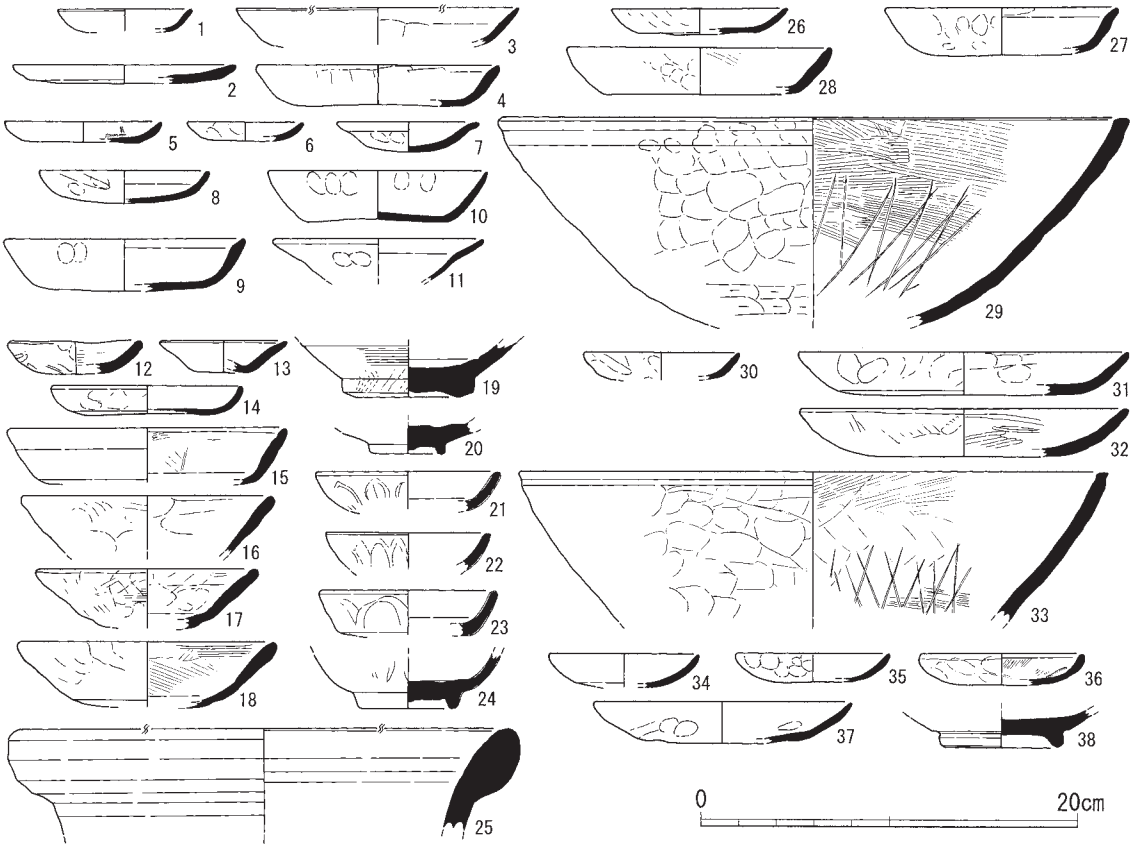
第107図　Ｂ５地区検出遺構配置図（1/200）



第108図　溝ＳＤ61実測図

である。いずれも焼成が甘く、器表面や断面が灰黒色を呈する。５は柱穴ＳＰ66から出土した土師器皿である。内面に粗いハケ調整がみられる。６は柱穴ＳＰ23から出土した土師器皿である。口縁部外面のヨコナデが弱く、粗いハケ調整や指掌痕がみられる。７は柱穴ＳＰ24から出土した土師器皿である。ほぼ完形で、口縁端部内面に浅い凹線がめぐらされる。乳白色の精良な胎土である。８・９は柱穴ＳＰ09から出土した土師器皿である。９は口縁部が緩やかに立ち上がり、端部は外折する。10は柱穴ＳＰ16から出土した土師器皿である。口縁部のヨコナデが弱く、指掌痕が残る。11は柱穴ＳＰ05から出土した土師器皿である。口縁端部が明瞭に外折するタイプである。

（筒井崇史・森島康雄）



第109図　Ｂ５地区出土遺物実測図

24. Ｂ６地区の調査

Ｂ４地区の南側に農道を挟んで設定した調査区である。柱穴や土坑、段状区画、溝などを検出した(第110図)。

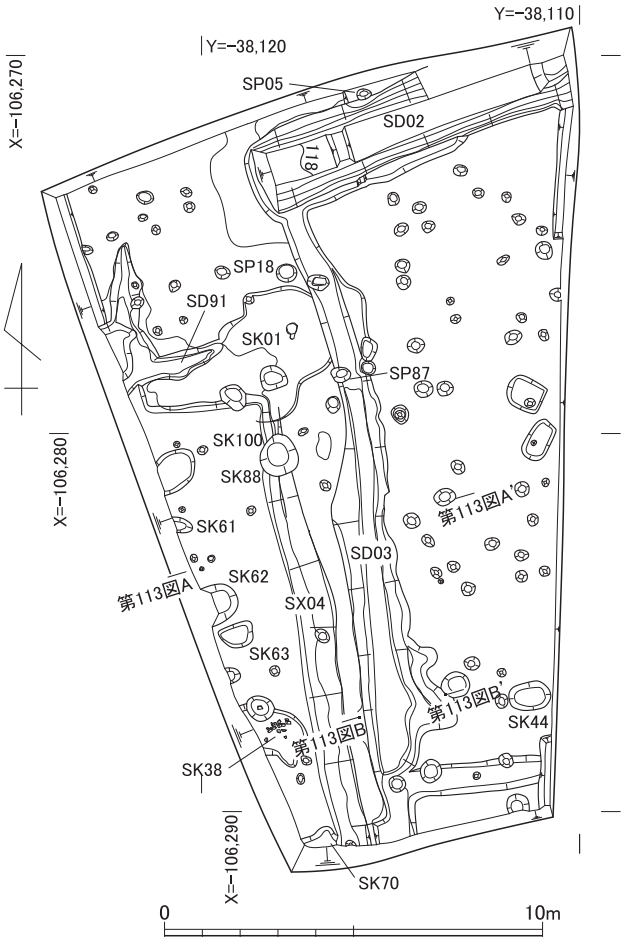
①柱穴群　直径20～30cmのものが大半で、黒褐色粘質土を埋土とする。調査区内において掘立柱建物跡は抽出できなかった。出土遺物として土師器皿がある(第114図１～４)。３・４は口縁部のヨコナデが施されない。３の口縁部内面には円周方向の粗いハケ調整が明瞭にみられる。１・２はＳＰ５から、３はＳＰ18から、４はＳＰ87から出土した。

②土坑ＳＫ61・62・63・38・70　これらは、後述する段状区画ＳＸ04が礫で埋め立てられる以前のもので、トレンチ西壁に沿って検出した。平面形は楕円形と方形のものがあり、礫を含む黒色粘質土を埋土とする。ＳＫ62は底面に炭と焼土がみられた。出土遺物として土師器皿がある(第114図５・６)。いずれも焼成が不十分で、破断面が灰黒色を呈する。５はＳＫ62から、６はＳＫ38から出土した。また、ＳＫ62では図示していないが、瓦器椀の破片が出土している。

③土坑ＳＫ44　平面形は隅丸方形で、大小の礫が多量に投げ込まれていた。長辺1.0m、短辺0.8m、深さ45cmを測る。

④土坑ＳＫ01　段状区画ＳＸ04の屈曲点に掘られた不整形な土坑である。長軸3.0m、短軸2.0m、深さ20～25cmを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物としては土師器・瓦質土器・国産陶器などがある(第114図７～15)。７～９は土師器皿である。７はヨコナデが施されず、口縁端部まで指押さえで成形される。８は口縁部が強いナデによって外反する。８は外反する口縁部が長く延びる京都系土師器皿に近いものである。10・11は瓦質土器羽釜である。10は炭素が吸着せず、全体に灰白色を呈する。11は大半が土師質焼成である。12は瓦質土器火鉢である。体部下端に１条の突帯がめぐらされる。突帯の下端に接してヘラ状工具でナデを施した痕跡が２条みられる。底部外面には離れ砂の痕跡が認められる。13は常滑焼壺である。14・15は青磁椀である。14は外面に蓮弁文が施される。15は無文である。

⑤土坑ＳＫ100　円形に近い平面形で、長辺105cm、短辺95cm、深さ35cmを測る。



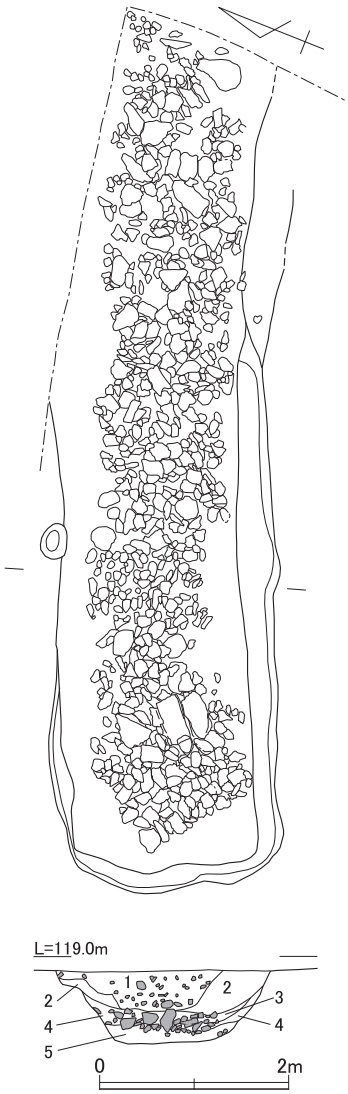
第110図　Ｂ６地区検出遺構配置図（1/200）

礫とともに土器類がまとまって出土した（第114図16～19）。16～19は備前焼甕である。口縁部の玉縁が小さいものから扁平化の進んだものまで差がみられる。18は溝ＳＤ02・土坑ＳＫ01出土の破片と接合した。19は溝ＳＤ03・土坑ＳＫ88出土の破片と接合した。色調は16～18は暗褐色～暗赤褐色、19は赤褐色を呈する。

⑥**土坑ＳＫ88**　土坑ＳＫ100を包括するように掘られ、長軸1.4m、短軸0.7m、深さ45cmを測る。備前焼甕が出土した（第114図20）。色調は赤褐色を呈する。なお、土坑ＳＫ88とＳＫ100から出土した土器が互いに接合することから、ほぼ埋没時期を同じくするものと考える。

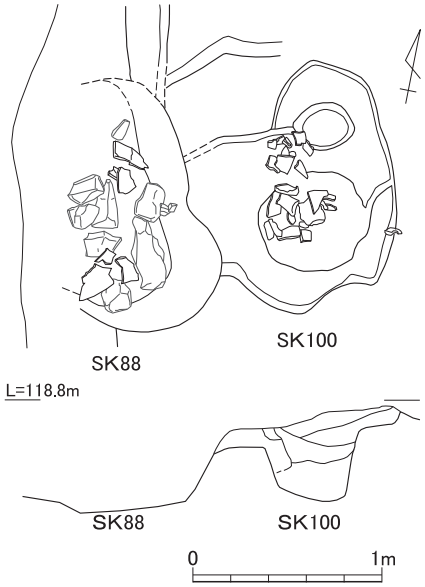
⑦**溝ＳＤ02**　調査区北東で部分的に検出した東西方向の溝である。検出長９m、幅2.3m、深さ75cmを測る。南から伸びてくる溝ＳＤ03を切っている。溝としての役割を終えて以後、大量の礫により埋め立てられている。礫面の表面レベルは118.8mで、ほぼ段状区画ＳＸ04の礫面レベルに等しい。

出土遺物としては土師器や瓦質土器、東播系須恵器、国産陶器などがある（第115図21～39）。21～31は土師器皿である。21～24は口縁部のヨコナデが施されず、外面は指掌痕、内面には板ナデやハケ調整の痕跡がみられる。25～31は深手のもので、26・30・31は口縁部上半が外折する。32は瓦質土器すり鉢である。内面には斜交する細いすり目が施される。外面は指押さえが目立つ。33・34は瓦質土器羽釜である。体部外面は指押さえで特に調整は施されない。35は東播系須恵器鉢である。口縁端部が内側に巻き込まれる。胎土に９mm程度の大きな礫がひとつ含まれている。36・37は丹波焼壺である。頸部の形状や厚みがやや異なり、別個体である。37の外面には緑色の自然釉が厚く掛かる。接合しない同一個体の破片が多数出土している。38は陶器すり鉢である。ほぼ水平な口縁端部を持ち、内面のやや下がった位置に１条の



1: 濁灰黄褐色粗礫混じり土
2: 濁暗褐色土（橙黄褐色土塊を斑に含む）
3: 暗黒褐色粘質土
4: 暗茶褐色粘質土（巨礫を多量に包含）
5: 暗濁赤灰褐色粘土（粗礫混じる）

第111図　溝ＳＤ02実測図



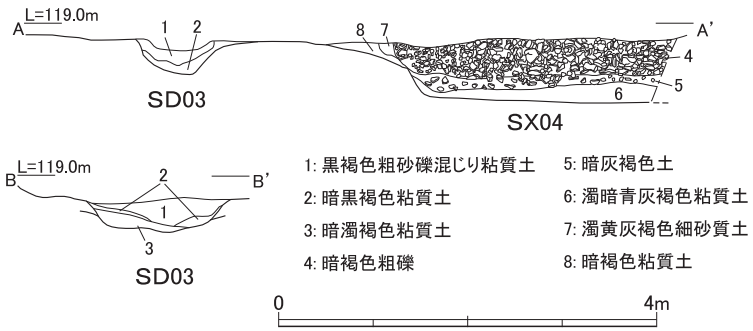
第112図　土坑
ＳＫ88・100実測図

凹線がめぐらされ、さらに下がった位置に２条の浅い沈線がめぐらされる。すり目は２条１単位か。色調は赤橙色を呈するが、内面の一部は灰黒色を呈する。39は青磁椀である

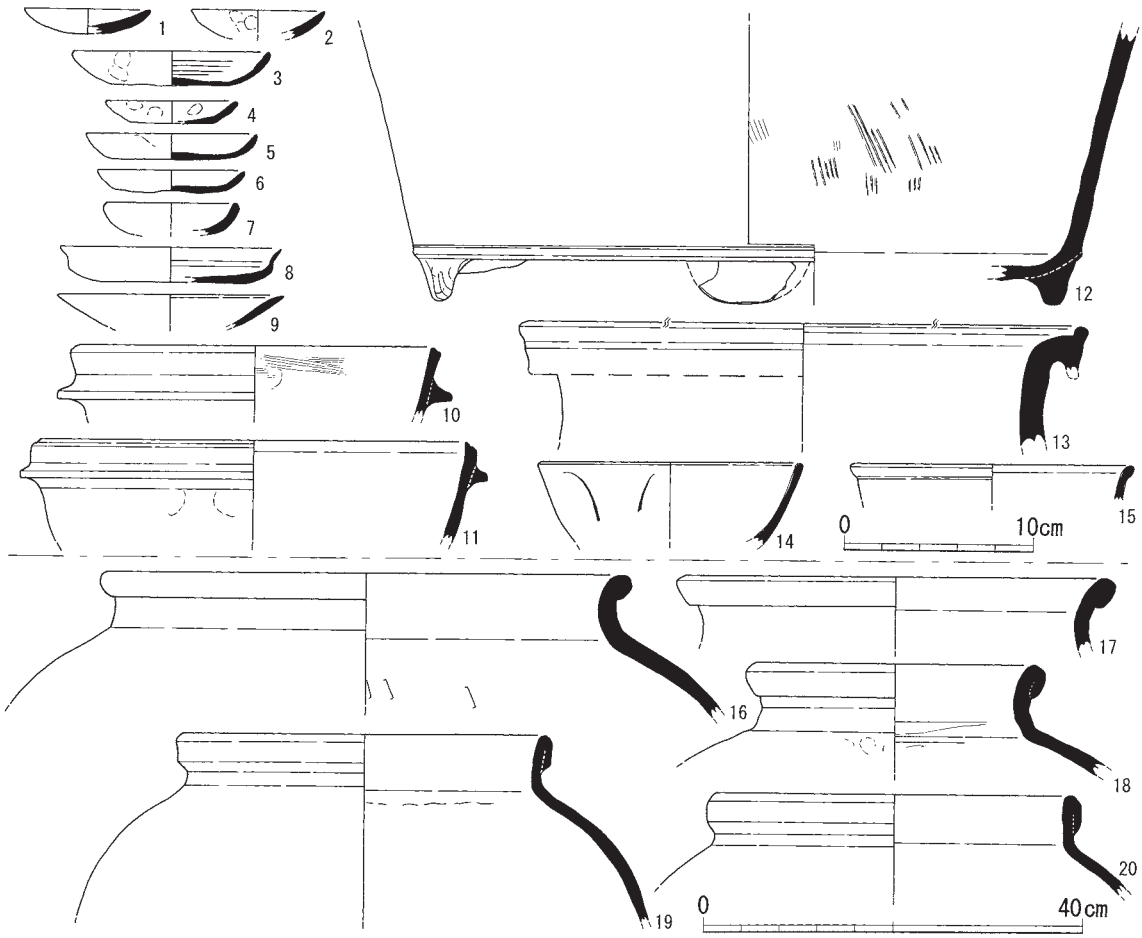
⑧溝ＳＤ91　40・41は土師器皿である。口縁部のヨコナデが施されず、指押さえが口縁端部付近までみられる。42は陶器甕である。胎土は比較的緻密で灰色を呈する。丹波焼か。

⑨溝ＳＤ03　段状区画ＳＸ04に平行する溝で、検出長15.5m、幅1～2.3m、深さ40cmを測る。調査区の南側で直角に屈曲し、その検出した東西辺は長さ４ｍ、幅0.8m、深さ15cmを測る。断面形は逆台形またはU字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土である。

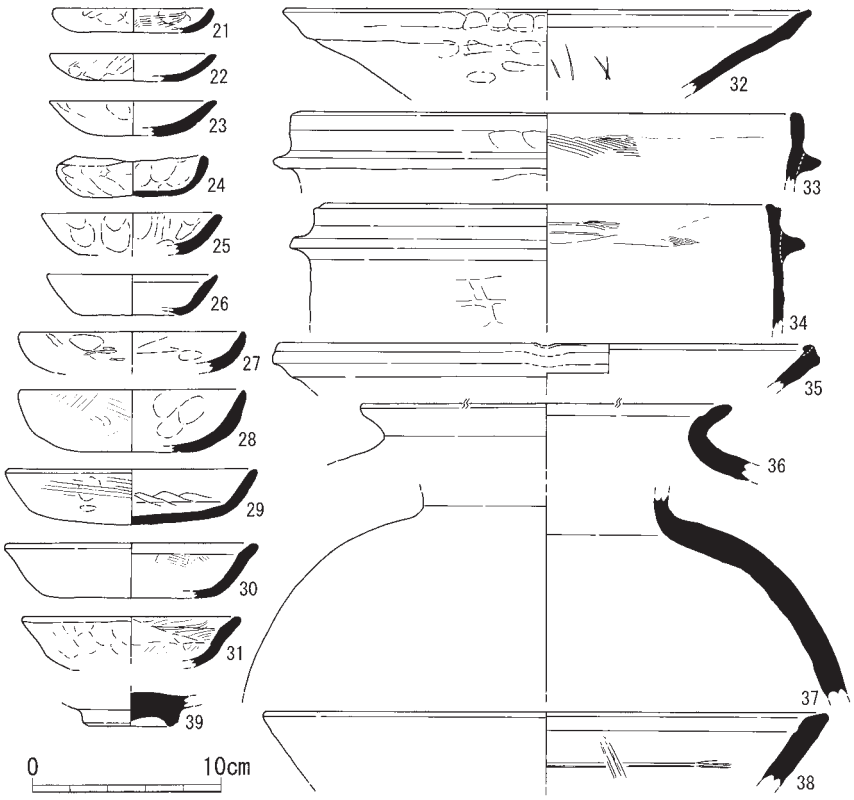
出土遺物として土師器や瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器などがある（第116図43～83）。43～75は土師器皿である。43は口縁部内面にヘラ状工具による１条の沈線が施される。44は内面の立ち上がり部に凹線状の圏線がめぐらされる。45は口縁部の



第113図　溝ＳＤ03・段状区画ＳＸ04土層断面図



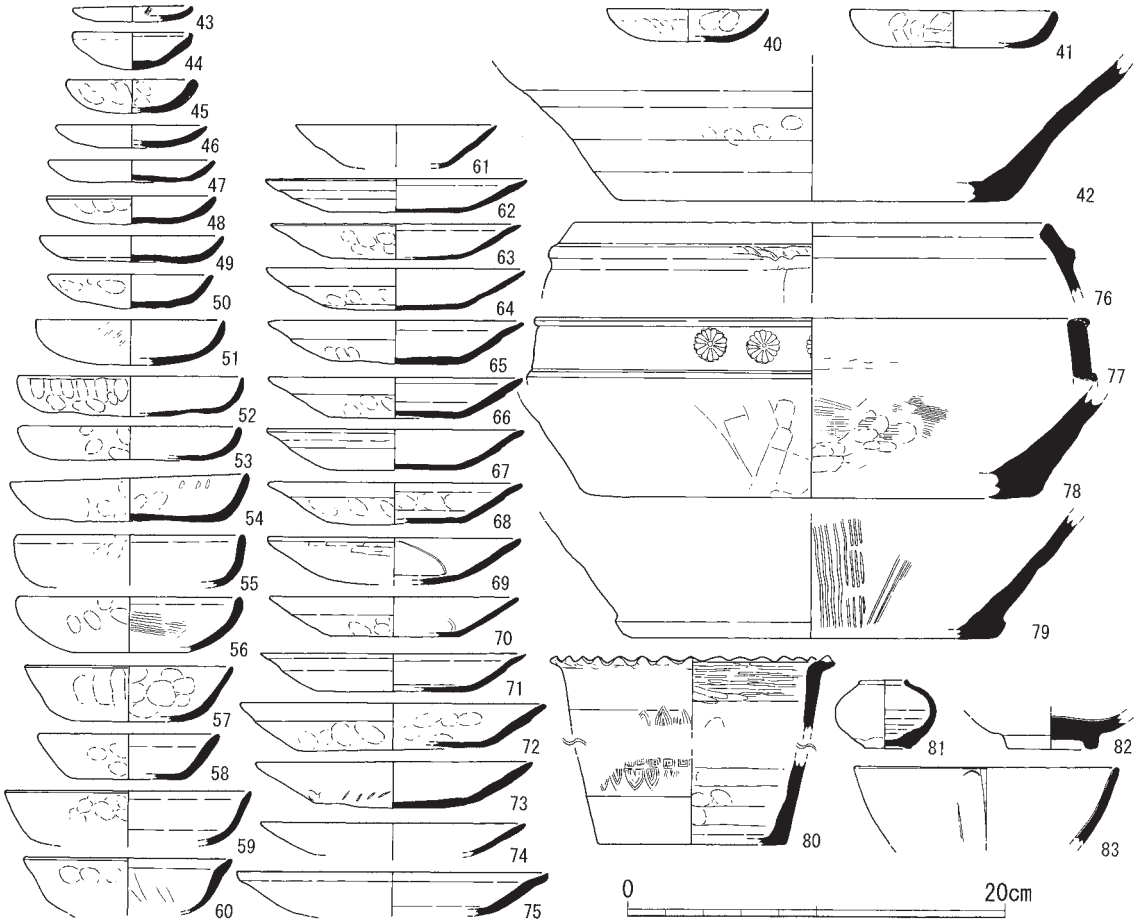
第114図　Ｂ６地区柱穴・土坑出土遺物実測図



第115図　Ｂ６地区溝ＳＤ02出土遺物実測図

ヨコナデが施されない。46～49は口縁部が短く立ち上がる浅い器形で口縁部にヨコナデが施される。50～57は口縁部のヨコナデが施されない。58～60は口縁部の上半が外折する。61～75は平らな広い底部から口縁部が直線的に延びるもので、口縁端部はやや外反する。口縁部にていねいなヨコナデが施され、ヨコナデの最後は周回方向から折り返す方向になで上げている。京都系土師器皿の特徴をよく写した器形で、16世紀中葉のものと考えられる。76は土師器羽釜である。白色の細粒を少量含む胎土で赤茶色を呈し、焼成は良好である。77は瓦質土器風炉である。口縁端面から口縁部外面はていねいなヘラミガキの後、菊花文のスタンプが押される。口縁部内面の下半はヘラケズリ、上半はヨコナデ調整が施される。口縁部と胴部との境目には突帯がめぐらされるが、突帯を貼り付ける前に１条の沈線がめぐらされている。胴部との接合面にはキザミが入れられている。突帯貼り付け後に突帯の上端部をヘラで押さえるなど、ていねいなつくりである。78は丹波焼甕である。胎土は砂粒を含みやや粗い。79は備前焼すり鉢である。胎土は精良で焼成は堅緻である。８条一単位のすり目が施される。80は瓦質土器火鉢である。口縁部は波状につくられる。外面から口縁部上半にかけてていねいなヘラミガキが施される。胴部外面に２条の細い沈線がめぐらされ、沈線に挟まれた区画にスタンプ文が押される。底部外面はヘラケズリが施される。81は古瀬戸合子である。内外面に灰釉が掛けられるが外面底部付近は露胎である。82・83は青磁椀である。

⑩段状区画ＳＸ04　調査区の西側を断面「Ｌ」字状に掘り込んで平坦面を設ける。この区画内の平坦面上に土坑ＳＫ61・62・38などが掘り込まれている。規模は南北辺15m、東西辺６ｍ、

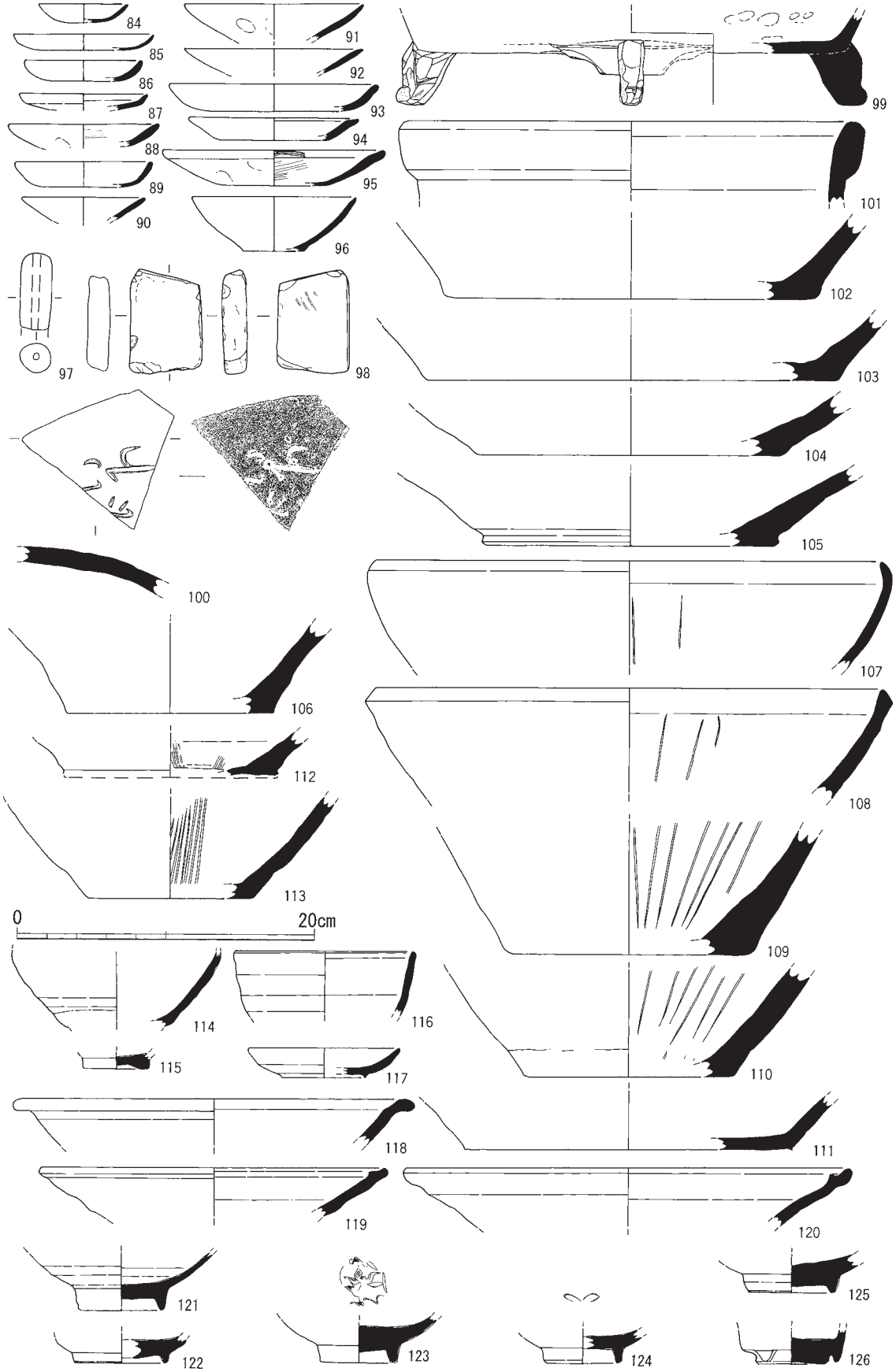


第116図　Ｂ６地区溝ＳＤ91・ＳＤ03出土遺物実測図

深さ60～70cmを測る。本遺構は、寺院や居館などの範囲の一画を区画する遺構である可能性がある。

また屈曲部や北辺は、土坑ＳＫ01や溝で壊され、さらに大小の角礫が大量に区画内を覆っている。礫の層は約50cmの厚さである。区画内の遺構群が役割を終えて以降、平坦面を確保する必要から、人工的に埋められたものといえる。

出土遺物として、土師器皿・備前焼の甕・仮名文字などの彫られた常滑焼の体部・石臼・中国製青磁の筒形香炉・中国製白磁椀などがある（第117図84～126）。84～95は土師器皿である。94・95は口縁部上半が外折するものである。84～86は口縁部のヨコナデが施されない。96は丹波型瓦器椀である。97は土錘である。98は須恵器甕片を加工したもので、３面が研磨されている。99は瓦質土器火鉢である。内面はヨコナデ、外面はヘラミガキが施される。底部外面は離れ砂痕がみられる。100は丹波焼壺である。肩部に「いろ」「に」と読めるヘラ描きがみられる。101は備前焼甕である。102～106は丹波焼甕である。このほか接合しない破片が多数出土している。107～110は丹波焼すり鉢である。110は良く使い込まれてすり目の一部が失われている。111は丹波焼鉢である。112・113は備前焼すり鉢である。113は８条一単位のすり目が施される。114～120は瀬戸系陶器である。114・115は天目茶碗である。116は鉄釉筒形椀である。117は灰釉丸皿である。118～120は古瀬戸折縁深皿である。118・119は灰釉、120は鉄釉である。121は白磁椀で



第 117 図　B 6 地区段状区画 S X 04 出土遺物実測図

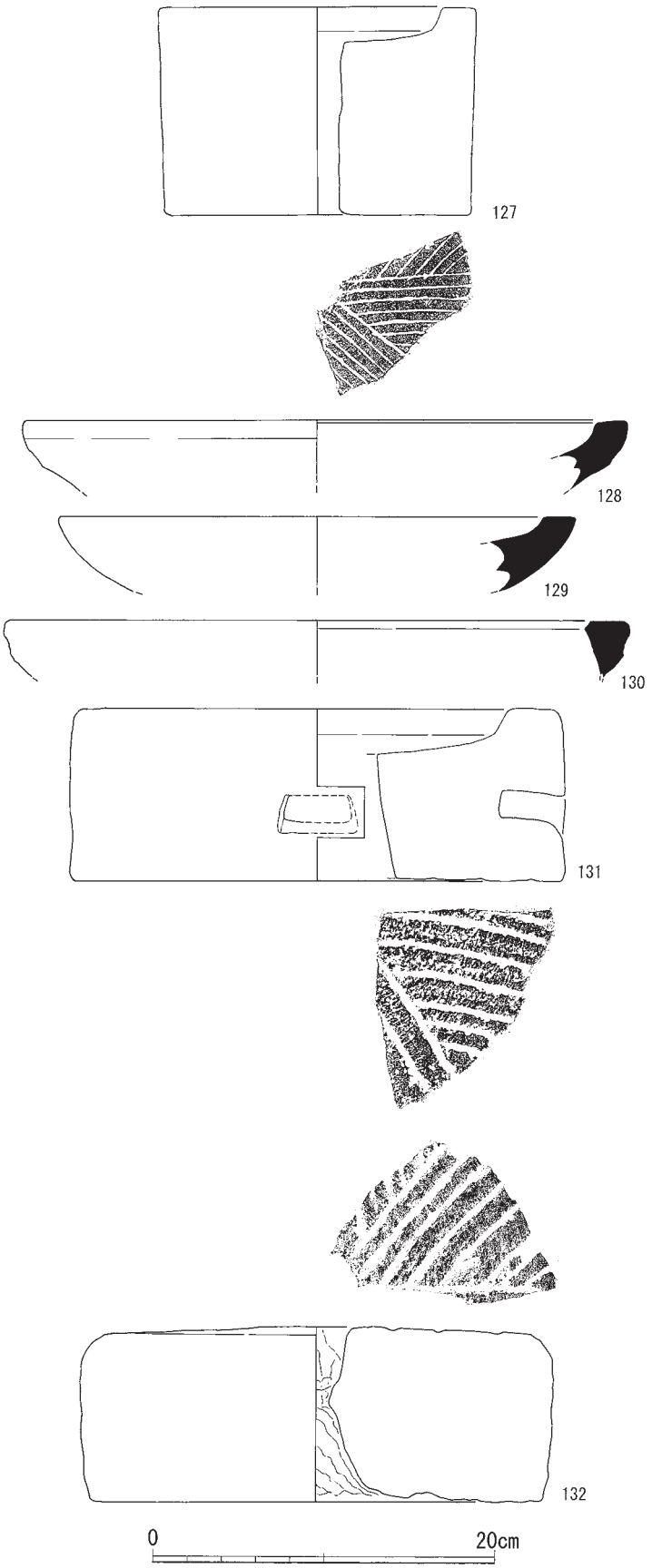
ある。122～125は青磁椀である。123は高台内に赤色顔料が付着する。122～124は畳付まで施釉している。125は畳付から高台内に掛けて露胎である。126は青磁香炉である。底部内外面は露胎である。

⑪Ｂ６地区出土石製品

ここではＢ６地区の各遺構から出土した石製品を一括して取り上げる（第118図）。

127～130は茶臼である。127～129は砂岩製、130は安山岩製である。129の外面はタタキ成形の凹凸を研磨して平滑にしている。131・132は安山岩製の粉引臼である。127･130～132は溝ＳＤ02から、129は段状区画ＳＸ04から出土した。なお、128はＳＤ02とＳＸ04から出土した破片が接合した。

（黒坪一樹・森島康雄）



第118図　Ｂ６地区出土石製品実測図

25. 110・112トレンチの調査

110・112トレンチはＢ３地区の東側および南東側に設定した用水路部分のトレンチである。110トレンチでは、土坑１基、自然河道１条、柱穴多数などを検出した。また、112トレンチでは土坑や柱穴を多数検出した（第119図）。

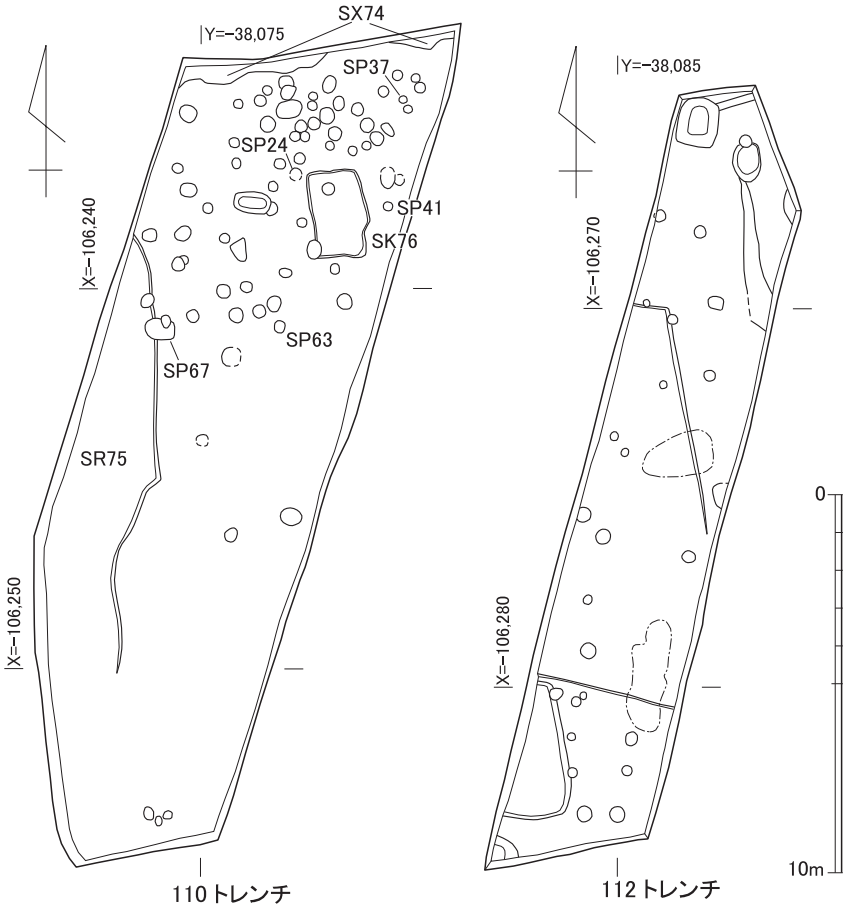
以下では110トレンチで検出した遺構・遺物について報告する。

①柱穴群　トレンチの北半部において多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物や柵として復原することはできなかった。柱穴から出土した遺物について報告する（第120図２～５・７）。２は柱穴ＳＰ63から出土した小型の土師器皿である。３は柱穴ＳＰ24から出土した土師器杯である。歪みが激しい。４は柱穴ＳＰ67から、５は柱穴ＳＰ37から出土した中型の土師器皿である。２～５の土師器はいずれもナデ調整やユビオサエなどで整形する。７は柱穴ＳＰ41から出土した瓦器椀である。全体に磨滅が著しい。

②自然河道ＳＲ75　トレンチの西辺に沿って検出した。おおむね北から南に向かって流れると思われる。検出長11.5m、検出幅2.2m以上、深さ15～20cmを測る。埋土は暗灰褐色粗礫混じり細砂質土である。出土遺物としては土師器皿・須恵器、青磁などがある（第120図８～12）。８・９は土師器の杯、10は土師器の皿である。２～５と同じく、ナデ調整やユビオサエなどで整形する。11はいわゆる東播系の須恵器鉢である。12は青磁壺である。上半部を欠損する。

③その他の遺構　不明遺構ＳＸ74はトレンチの北辺で検出した落ち込み状の遺構である。自然地形の可能性がある。出土遺物としては土師器皿がある（第120図１）。土坑ＳＫ76はトレンチ北半部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長2.35m、幅1.5m、深さ約15cmを測る。出土遺物としては白磁椀がある（第120図６）。

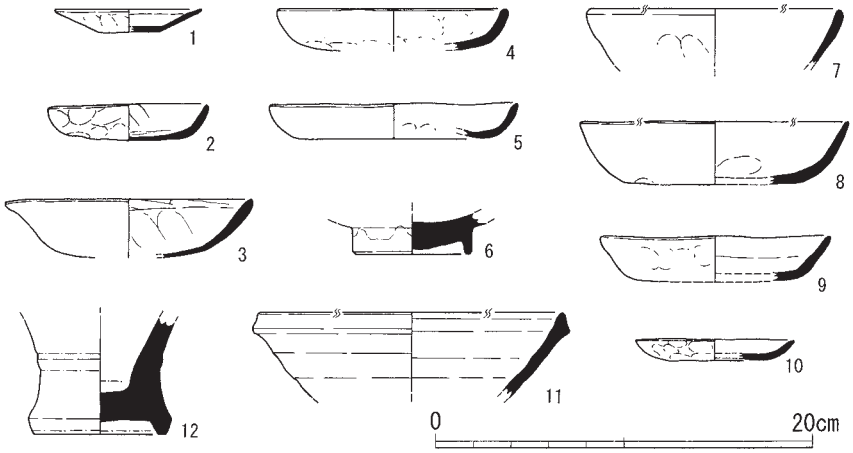
（筒井崇史）



第119図　110・112トレンチ検出遺構配置図（1/200）

26. ３・４トレンチの調査

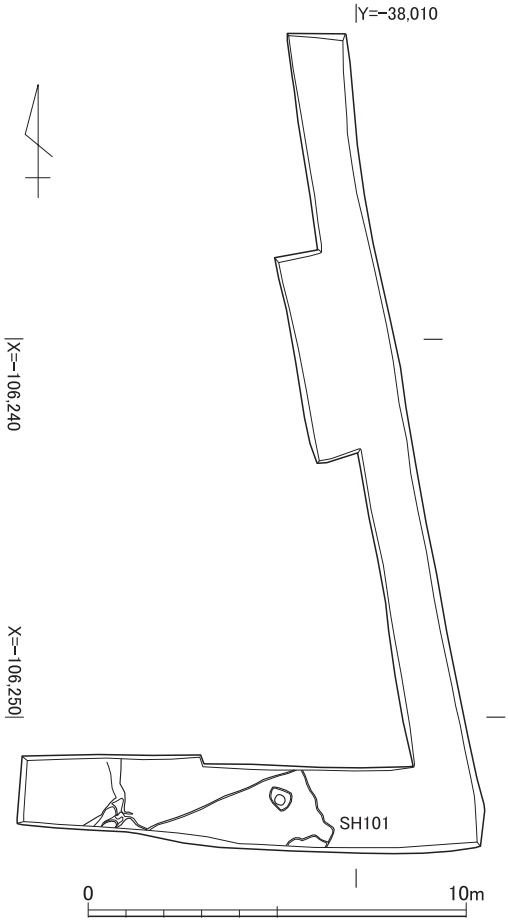
３・４トレンチは110トレンチの東約60ｍに設定した用水路部分のトレンチである。３・４トレンチでは耕作土や床土を除去すると、北半部では直ちに地山となり、素掘り溝などを検出した。南半部では若干の堆積土があり、これを除去すると、竪穴式住居跡１基や自然地形と思われる落ち込みなどを検出した（第121図）。



第120図　110トレンチ出土遺物実測図

①竪穴式住居跡ＳＨ101　トレンチの南端で検出した。トレンチの幅が狭いため、住居の北半部を検出したのみである。平面形は方形を呈すると考えられ、一辺4.4m以上、深さ10cm前後を測る。周壁溝はみられず、主柱穴も１基確認したのみである。出土遺物としては須恵器のほか、不明石製品がある（第122図１・７）。１は須恵器杯Ｈ蓋である。７は面取りするなど、加工痕のみられる不明石製品である。

②包含層ほかの出土遺物　３・４トレンチでは、顕著な遺構は上述の竪穴式住居跡ＳＨ101のみであるが、包含層ほかから若干の遺物が出土した（第122図２～６）。２は精査中に出土した須恵器杯Ａである。３～６は素掘り溝や落ち込みなどから出土した遺物である。３は須恵器の短頸壺である。４は青磁椀の小破片である。５は土師器皿である。６は瓦質土器尊式瓶である。

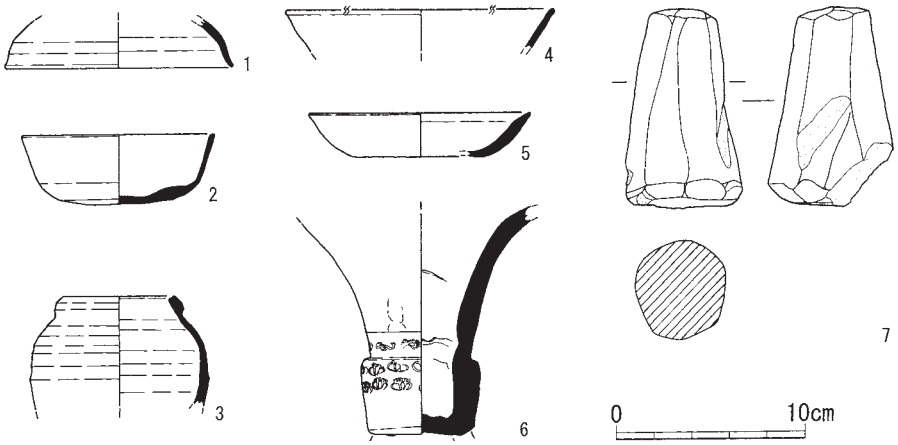


第121図　３・４トレンチ
検出遺構配置図（1/200）

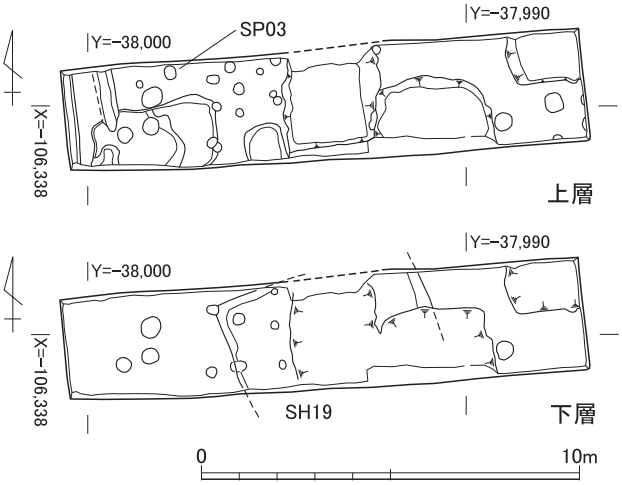
（筒井崇史）

27. 10トレンチの調査

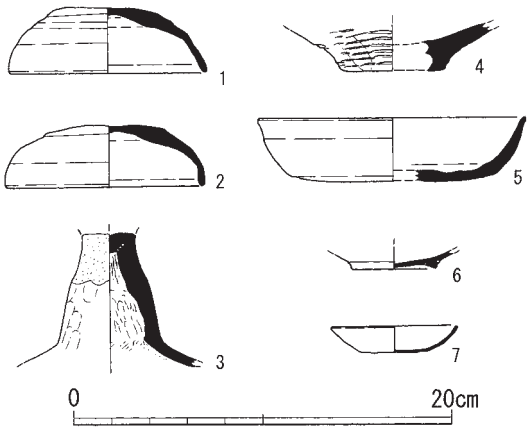
10トレンチはＡ２地区の北東側、農道を挟んで設定した用水路部分のトレンチである。トレンチの中央部～東側にかけて大規模な撹乱が見られたが、遺構面を２面確認することができた（第



第122図　３・４トレンチ出土遺物実測図



第123図　10トレンチ検出遺構配置図（1/200）



第124図　10トレンチ出土遺物実測図

123図）。上層では中世の柱穴や土坑などを検出した。また、下層では竪穴式住居跡１基ほかを検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ19　下層で検出した。トレンチの幅が狭いため、部分的な検出に留まるが、平面形は方形を呈すると考えられる。一辺5.6m前後、深さ15cmほどを測る。主柱穴２基と周壁溝を確認した。住居に伴う遺物として須恵器杯Ｈ蓋や土師器高杯脚部などがある（第124図１・３）。

②包含層ほかの遺物　10トレンチにおいても顕著な遺構は上述の竪穴式住居跡ＳＨ19のみであるが、包含層ほかから若干の遺物が出土した（第124図２・４～７）。２は１とほぼ同じ須恵器杯Ｈ蓋である。包含層出土であるが、住居に伴うものである可能性が高い。４は弥生時代後期の甕の底部である。10トレンチの付近まで弥生時代後期の遺構が広がっていた可能性がある。５は須恵器杯である。平安時代のものであろう。６は瓦器椀の底部である。７は土師器の皿である。４～７のうち、６は柱穴ＳＰ03から出土、その他は包含層もしくは重機掘削中の出土である。

（筒井崇史）

京都府遺跡調査報告集 第134冊

平成21年３月31日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　中 西 印 刷 株 式 会 社
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel (075)441-3155(代)　Fax (075)417-2050